月が我れやら我れが月やらで月と我との間に差別がなくなり、或人が「月や我れ我れや月やの分かぬまで心も空にすめる夜の月」と詠んだ能所泯絶の境界に到るのであります、しかし、さればとて、自分の眼が空へ飛び出して往つたわけでもなければ、天上の月が自分の眼の中に飛び込んで來た譯でもありませぬ、月は月、我は我、混雜は無いけれども、差別のまゝに能所一枚の所があります、是れは別段に科學者と申して、此の現象界の事柄を實驗と推理で細に入り微に入りて研究した人でなくては出來ないと云ふのでも無ければ、哲學者と申して宇宙の本體を研究した人でなくては出來ないと云ふのでもありませぬ、イヤ此の科學者とか哲學者とか云ふ連中には却て此の境遇に到ることが出來ないものが尠くないのであります、然るに、さひしき山里には道理や理窟は解らなくても、あゝ好いお月さんぢやと月を賞しながら、月の光りのその中で、草鞋を造る若者もあれば、紡を績る處女もあります、此の若者や處女は別段に科學的に研究したでも無く、哲學的に解釋したのではありませんが、一點の邪心もなく、一片の惡意も無く、知らず識らず月の光りの中で美しい生活をいたして居ります、今此の歸依三寶の態應道交の有樣も實に此の通りであります、我れ〳〵が月を賞したいといふ一念さへあれば、財產の多少や、位の上下に拘はつたとは無い、皆な無垢清淨の明

皎々たる三寶の月を賞することが出來るのであります、科學者や哲學者で無くては出來ないと云ふのでもありませぬ、一文不知の尼入道でも歸依三寶の一念さへあれば必ず此の月に照さるゝことが出來ます、一度此の光りに照されまするると、三寶は歸依せらるゝもの、吾れ〳〵は歸依するものと思つたのは誤りで、佛は佛衆生は衆生、その位を動ぜずして一躰無二平等不可思議の境界に到りまする、サテ此所に到りますれば、臥しながら此の良夜を過ごすも勿躰ない、一足の草鞋でも造らうか、一筋の紡でも績がうかと云ふ心が起りて、月の光りの中で仕業をいたすやうに、一躰無二の境界になりまするると、更に今度は、生々世々在々處々に增長し積功累德すとある通り、無間の時と無間の空間との中にあつて、自利利他の大菩薩行を行ずることになります、人間の最尊最上の生活とはかやうな境界を云ふのであります、

昔、一遍上人と云ふ偉いお方がありましたが、此のお方は時宗と云ふ一宗をお開きになつた高僧でありますが、或時に聖一國師と云ふ禪宗の高僧に參得なされて、自分の考えを歌で述べられました、その歌は「唱ふればわれも佛もなかりけりたゞ南無阿彌陀佛の聲のみぞして」と云ふのであります、實に難有歌ではありませんか、唱ふればわれも佛もなかりけり、唱ふる我もなければ唱へらるゝ佛も無い、たゞ南無阿彌陀佛

の聲ばかりである、所が、聖一國師はお許しが無つた、そこで上人は更に一工夫して、「唱ふればわれも佛もなかりけりたゝ南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」と述べられた所が、國師は始めてお許しなされたと云ふことであります、成程前の方はまだ聲か殘つて居る、感應同交とは申しながら何となく一分未だ到らぬ處があるが、後の「唱ふればわれも佛もなかりけりたゝ南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」となつては、我も佛も無いのは無論であるが、更に一歩進んで、一言一行が南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛であります、此時になれば、南無阿彌陀佛と申しても眞宗や淨土宗の專賣特許では無い、南無阿彌陀佛は直に南無釋迦牟尼佛であります、三世一切の諸佛であるのみならず、權兵衛、八兵衛そのまゝの日々の勤めであります、この所は世間の貴賤貧富の問題ではありませぬ、苦惱を超絶し、美醜を離れて居りますから、各その位に安んじて人間の本分を全うすることが出來ます、かやうな最尊最上の生活を强ひて申したならば美的生活とでも申しませうか、私は此を佛敎の美的生活と申して當らずと雖遠からずと思ひます、されば、人間の最尊最上の美的生活と云ふものは、此の眞實の感應同交に由つて始めて得ることが出來ます、何卒お互に一日一刻も早く此の美い生活に進みたいものてございます、

第十七席（戒法大意）

次には應に三聚淨戒を受け奉るべし、第一攝律儀戒、第二攝善法戒、第三攝衆生戒なり、次には應に十重禁戒を受け奉るべし、第一不殺生戒、第二不偸盜戒、第三不邪婬戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不說過戒、第七不自讚毀他戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三寶戒なり、上來三帰三聚淨戒十重禁戒、是れ諸佛の受持したまふ所なり、

サテ、我が曹洞宗の受戒の事は毎々申しまする所て、今また同じ事を繰り返へすやうにござりまするが、此の受戒のことは、すべての根本土臺になるものてすから、更に詳しくお話し申したい考てあります、

一躰受戒と申せば如何なることであるかと云ふに、一言で申せば性德の發揮てあります、すなはち本來具有の人々箇々の德相を現はすのであります、しからば、その本來の德相なるものは如何なるものであるかと申しまするとと、慈悲心孝順心の外はありませぬ、して見ると此の根本の慈悲心孝順心より現はれる所の事柄てあるならば、皆な是れ戒法に契つたのでありますから、十條や二十條の事柄では無いのてありますけれ

ども、實際の上にこゝに誓受をすると云ふことになりますと、先づその重なるものを擧げて誓受しなければなりませぬ、ことに從來の佛祖方より傳來して居る法に依らなければならないのであります、かやうな譯で我が宗では三飯戒と三聚淨戒と十重禁戒とを合して十六條戒と申してこれを誓受することになつて居ります、此の中三飯戒のことは前に述べましたので今は三聚淨戒と十重禁戒とでありますが、先づ三聚淨戒の方から申しませう、

三聚淨戒……吾れ〳〵お互に此の世の中に處して行きまするには、霞を食つて巖居川觀して居る人ならばいざ知らず、先づ普通人間として生活する以上は、社會と云ふものを組織しなければ到底完全なる生活をすることは出來ないのであります、これは實際の必要上よりまたは人類自然の要求として是非そうなるのです、諺に「向ふ三軒兩隣り」と申しますが、いかに交際の狹い生活の度の低い人でも少なくとも向ふ三軒兩隣り丈は世話もして遣り世話もして貰うて互ひに相助けて行かなくては人間としては生活することが出來ないのであります、されば吾れ〳〵お互ひは、一面には權兵衛なら權兵衛、八兵衛なら八兵衛で、一人一人で見ますときには私の外には、私といふものはございませぬから自分自分の獨り天下でありますけれども、他の一面より見ますれば社會の一員であるし、更に大きく見れば宇宙の一物であります、そこで、われわれの人として行はんければならぬ道德も亦人として平等に行はんければならぬ道德と、私として個人的に差別して行はんければならぬ道德との二通りであります、泰西の倫理學で道德上の本務を二つに分けまして、一を自己に對する本務と云ひ、他を他人に對する本務と云ふのも畢竟此の意であります、所が、世間には、元來道德なるものは、人と人との間の上で成立するもので自分一人ではどうでもよいやうに思ふ人もあるやうですが、是れは非常の誤りであります、すべての事柄、差別を離れて平等なく、平等を離れて差別は無いので、個人と社會ともその通りで個人の集合したものが社會で社會の一部分が個人でありますから、自分自分に道德上の本務を盡すことが、やがて社會全般に道德を行ふことゝなるので、佛敎ではこれを自利利他二利圓滿と申します、自分をも利し他をも利す、この自利と利他の二つが完全になつたので始めて道德上の務は充分になるのであります、今申す三聚淨戒は即ち此の自利利他を圓滿ならしむ根本土臺となるのであります、それは、佛の掟を守つて惡いことは一切せぬといふ攝律儀戒と、一切の善事は必らず行ふといふ攝善法戒とは自己に對する本務自利であるし、自分が惡を止め善を行ふのみでなく、進んで外の人々をも惡を止めて善を行ふやうに

し且つ自己のすべてを捧げて他の爲に盡ずといふのは攝衆生戒で、他人に對する本務で利他であります、殊に大乘佛敎では自利利他の中で利他に重きを置くのであります、よし一應は自利のやうであつても、その自利は利他の爲めの自利でなくてはなりませぬ、自分ばかりが高山に登つて云ふに云はれぬ立派な景色を眺めたからとて、それに滿足して居てはなりませぬ、今度は、一番山を下つて未だ山の絶頂の風光を知らぬ人に向つて說いて聞かせるは無論のこと、進んで手を曳て連れて登ると云ふことがなくてはなりませぬ、佛敎信者もその通り、いま佛の敎に依つて惡を止め善を行ひ人間らしい美しい生活をするやうになつたからとて、それに滿足して居てはなりませぬ、一歩退いて今度は未だ佛敎の味を知らぬ人に向つて說き聞せるは無論、手を携へて佛の道に歩を運ばねばなりませぬ、これを勸むる功德共に成佛と申して大乘佛敎の信者としては實に肝要なことであります、

次には十重禁戒のことですが、詳しいことと申し上げて居る暇もなければ、また必要も無いと思ひますから、一ヶ條一ヶ條に就て極く簡短にお話しいたしませう、

第一不殺生戒……「我もまたをしとこそ思へをしと思ふ命は同じ命ならずや」て、飛んで天に昇る鳶も躍つて淵に居る魚も、その他生とし生けるもの何一として死を憎み生を欲せざるものはありませぬ、此れは、別段に六ヶ敷い理窟や道理を列べなくとも、自分の身に比べて見たならば明かに解る事柄で、自分の身を捨つて他の痛さを知るとは能くも云つたものであります、しかしこゝに、御注意ありたいのは、不殺生戒と申せば文字の上だけでは、殺さぬだけのやうに聞へますが、殺してはいけぬと云ふ位ですから、鳥獸虫魚を無暗に苦しめてもいけないのであります、然るに今日わが國の狀態は如何でありませうか、貴顯とか紳士とか云ふ社會の中流以上にあるものが、銃を肩にして樂み半分に狩獵を行つては居りませぬか、口に南無阿彌陀佛を唱へて居るお同行衆が、自分の職業を助けて呉れる所の牛や馬を無理非道に使役しては居りませぬが、此頃は有志者の中に「動物虐待防止會」と云ふものが起つて動物の保護をせやうと云ふ位になつたので、誠に佛敎信者を以て固めて居る我國としては耻づべきことであります、それのみならず、工業が盛んになるに連れ、男子のみでは事足らず、また男子よりも女子の方が或る職業には巧者でありますから、女工と申して女子を使役することが多くなりました、所が、此れと同時に女工虐待と云ふ聲が起つ來ましたが、此は聲ばかりでは無い、雇主が女工を虐待することは處々の工場で實際にあることで、大にその筋の注意を引いて居る位であります、「雪の日やあれも人の子樽拾ひ」

屆ふものも屆はれるものも同じ人類で同じく如來の御子であれば兄弟と云つても宜しい、此の間にかやうな淺間しいことがあるとは實に氣の毒千萬ではありませぬか、此等の事柄は佛敎信者たるものは、平素佛の御訓誡を胸に置いて生きながら鬼の行ひをしないやうにありたいものです、

第二不偷盜戒……ヌスムナと云ふ戒であります、かく申せば離れしも一應はヌスムなど云ふ汚しいことは無いと申すでありませう、併しヌスムと申しても物質上の偷盜もあり精神的勞作の効果を盜むことがあります、物質上の偷盜は金錢物品等で多少恥を知る人は露骨には行りませんが、若し心中に僅かも偷盜の心があれば、事に當り物に觸れて種々の巧妙な手段を以て行ります、此は多く中流以上に行はるゝ所の偷盜で此を收賄と申します、收賄と云へば偷盜とは異なる樣ですが、その實兩方共に取るべからざるものを取るのですから、手段の上に巧拙はありますけれども收賄も一種の偷盜であります、次に精神上の勞作の結果を盜むことがあります、此は口先や筆の上ではヤタラに仁義道德を談ずる文士や學者の間に行はるゝので、折角他人が腦髓を絞つて造つた所のものを何の挨拶もなく我物顏にして名譽を取り金錢を利するのであります、先頃まで、東京大學史學敎授をして居られたリース博士と云ふのは、深遠な史的智識を有して居られまして、殊に最近五十年史は最も得意とする所でありましたので人が皆なその著述の出でんことを希望して居りました、そこで或人が博士に向つて、最近五十年史の著述を促しました所が、博士の云はるゝには、日本人は他人の著作を盜むの癖があるから日本では容易に發表することは出來ないと云はれたそうです、是れ實に我國の學者文士の恥辱ではありませんか、併しかやうことは、法律や規則の末では到底充分に制することは出來ない、たゞ人心の根底に不偷盜戒の戒光を輝かすのにあるのでありますから、何卒物質上の偷盜は無論のこと、進んで精神的の產物に對しても、所有方面に此の戒光が輝いて國民の品位を高むるとに努めなければなりませぬ、

第三不邪婬戒……一國の本は家庭であつて、家庭の主体は夫婦であります、男あつても女なく、女あつても男なきは完全なる家庭と云ふことは出來ませぬ、男あり女あり而して此の間に健全なる調和かたもたれて、始めて完全圓滿なる家庭と云ふことが出來ます、天授ひ地載す、しかしながら、別段、天が尊びと云ふわけもなく、地が卑しいといふ譯もありませぬ、男女の兩性は宇宙に天地の別あるがやうなものであります、男の貴きわけもなければ女の卑しいわけもございませぬ、天地あつて萬物位し男女あつて人道は立つのであります、そうでありますから、此の男女の間に正しか

らざる事があれば、その家庭は亂れたる家庭であるし、その社會は墮落したる社會であります、されば、如來は此の夫婦の事に就てお經の中に種々とお說きになりました が今『六方禮經』の中にお示しなされた一節を擧げて見ますれば、先づ夫として妻に對する道として

一には出入當に婦を敬すべし
二には之に飯食し時節を以て衣被を與へ
三には金銀珠璣を給與し
四には家中のあらゆるもの悉く用ゐて之に付せよ
五には外に於ては邪に傳御を蓄ふるを得ず

とあります、次に妻たるものが夫に事ふの道としては、

一には夫外より來れば起つて之を迎ふべし
二には夫出て在らざれば當に炊蒸掃除して之を待つべし
三には外に婬心あるを得ず夫のよし罵るとも色をかへて罵りかへすを得ず
四には夫の敎誡を用ゐ所有の什物を藏匿することを得ず
五には夫休息すれば蓋藏して臥するを得

と仰ふせられてあります、實に家庭道德の標準として適切なる御敎訓でありますから、夫たるもの妻たるもの、これを守りさへすれば、夫唱婦隨、家庭は團欒の樂みを受け、社會の風俗は健全になり、國家はますゝ隆盛になつて參ります、

第四不妄語戒……虛僞を吐かぬと云へば誠に易いやうでありますが、なかゝ六ケ敷い、またその影響する所が廣大でありまして、一言の虛僞のために一家一國の滅亡を招くとも少くないのであります、昔、支那の天子が其妾の褒似といふのゝ笑ひ顏が見たい爲めに烽火を擧げて諸侯を集めたことがあります、諸侯は欺かれて集まつたものですから其後まことに敵國が攻めて來て諸侯を集めやうとしたが其時には前の妄語にこりて一人も集らず終に其國の亡びた例があります、

第五不酤酒戒……此れは酒を酤つてならぬと云ふのですから無論酒を飲んではいけないも含んで居ります、たゞ酒を飲むのは範圍が狹く酤る方は廣いから不酤酒戒としたのであります、此の酒のことに就ては經論の中にも種々に罪過が御說き下だされ、また近來は世間で飲酒の害を認めて禁酒會などもありますから理窟や道理は充分解つて居りますが、一度飲習つたものは止めると云ふことは、なかゝ困難でありますから、最初から可成飲み習はぬやうに、また飲む人は必ず節酒をして行くやうにしたい

ものであります、

それから第七に説過とて惡しき心を以て他人を説くとか、第七に自讃毀他とて故らに自分を讃美し他人を毀るとか、第八に不慳法財とて、折角如來の大法を會領しながら法を施すことを慳むとか、瞋恚とて無暗に怒るとか、誇三寶とて、人々の父たり母たる佛法僧の三寶を誹謗するとか、皆な是れ佛敎信者の慎むべきことであります、此等の事柄は信念を培養する上に於て必要なることであるは無論ですが箇人の品格を高むる上に於て社會に進歩せしむる上に於てまた必要であります、猶ほまたそれのみならず、かやう事相の一々が眞如實相に契當して居ります、一例を擧げて申しますれば、不妄語と申せば我れ〳〵の言語の上の事柄で些細の事のやうではありますが、天地の間の物柄事柄みな此の不妄語の姿であると云ふことが出來ます、かの水の物を濕し火の物を燒くのは是れ水の不妄語火の不妄語でありますまいか、柳の綠りに花の紅なるは、これ柳の不妄語花の不妄語ではありますまいか、その他不殺生と云ふも、不殺生は直に是れ不生不滅眞如常住の理に契當したのであります、かくの如く事理一致諸法圓融の戒相でありますから、是れ諸佛の受持したまふ所で、また吾れ〳〵お互の必ず實行すべき所の事柄であります、何卒此の道理を能く御合點あつて一日も早く歩を十六條戒の路に運び、諸佛同道の戒相を受持せられんことを希望いたします、

第十八席（佛子とは何ぞ）

受戒するが如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり、誰の智人か欣求せざらん、世尊明らかに一切衆生の爲に示しまします、衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る位大覺に同ふし已る眞に是れ諸佛の子なりとサテ、お互に受戒と申すことは寶物でもなければまた買物でもありませぬ、人々自性の一大光明を發揮するまでの事であります、かやうに因を修してかやうな果を得やうと申すのは隨分迂廻の話であります、しかし茲に一の事柄があれば、必ずそれには原因もあれば、結果もある、只その原因と云ひ結果と云ふも當宗では、證上の修、修中の證とありまして修業不二因果一枚でありますから妙因とも妙果とも申します、此の妙因妙果の上では原因結果を分つても何も差支はありませぬ、いま受戒と佛果を證するといふのも先づ一應原因結果を分つてみれば受戒は因で佛は果であります、所が、その原因と結果との間が間に髮を容れずで、因と云ふや直に果、果と云ふや直に因であります、かやうな妙因果の上で談ずる結果は一躰なるものであります、それ

は、お示しの「三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり」とあります、三世の諸佛とあるから釋迦一佛でもなければ彌陀一佛でもありませぬ、三世であるから現在は無論のこと過去の過去際より未來の未來際に至るまであります、語を換へて申しますれば無限の時間に出現せられたる宗教的大偉人であります、此等のお方〳〵の證得せられたる阿耨多羅三藐三菩提と申して無上正眞道の佛果を、吾れ〳〵お互が受戒の當所に獲得することが出來ます、此の獲得の結果なるものは、實に火に入つて燒けず、水に入つて溺れず、富貴も淫すること能はず、權威も屈することと能はずて、此を形容し、此を贊嘆して金剛不壞と仰ふせられたのであります、此の妙因妙果の直理は、誰しも信して欣求すべき筈のものであります、誰の智人が欣求せざらんと、誠に御尤な事でありますが、然るに世間には隨分學者先生と云はるゝ人でありながら此を信ぜず欣求しない人かある、此は如何なるものであらうかと云ふに、こゝは特に佛教信者の御注意を願ひたいのであります、それは外でもありませんが、此の智人と云ふことであります、世間一般では智者と申せば、博學多才の人を云ふのでありますが、わが佛教ではかやうな人は智者とも智人とも申しませぬ、しからば如何なる人が智人であるかと云ふに、それは深く因果の道理を信じたる人を云ふであります、此の所が間違ひまするとと、折角足を佛教の門内に入れながら、遂に一種の智識餓鬼となつて安心立命と云ふことは遂に得ずして了ふことになります、そこで一文不知の尼入道でも信の一字が胸にありさへすれば智人であります、受戒入位には少しも差支はありませぬ、此の意で以て高祖樣のお聖教を味はないと眞實の御精神を解することは出來ませぬ、かやうに智人の欣求すべきは無論、猶はまた此事は世尊のお示でます〳〵確かであります、そのお示しのお聖語は如何なることであるかと申せば、すなはち次の「衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る位大覺に同ふし已る眞に是れ諸佛の子なり」との仰ふせであります、成程此のお聖語は實に尤なことで、譬へて見れば吾れ〳〵お互は一團の火藥みたやうなものであります、そこで少しでも火の緣があり さへすれば、非常の力を發する、今此の受戒は恰かも火の緣みたやうなものであります から、吾れ〳〵が此の火の緣に觸れさへすれば、非常の大能力を發揮して一超直入如來地で、當所に佛果位に躍込むことが出來ます、此の受戒の緣に觸れて發揮したる一大勢力は、前のお示しの金剛不壞と云ふので、あらゆる物に遇ふても碎け破れると云ふことは無論無い、のみならず、無限の時間と無限の空間を貫通して到處に戒光を放つのであります、昔から世に高僧碩德と云はれ偉人哲士と稱へられたる人々は、此

の金剛寶戒を輝かして居りますが、今こゝに一人のお方を擧げて、如何に此の戒光が輝いて居るかをお話しいたしませう

世はかり荒の亂れに亂れし元龜天正の戰國時代、群雄四方に割據して居る中にも、織田信長武田信玄と云へば、英雄中の英雄でありましたが、如何な英雄豪傑も死の手丈は避けるとが出來なくて武田信玄の方は織田信長に先き立つて一片の黃土となりましたが、その後はその子勝頼が繼ぎ武運の維持に努めました、所が勝頼は愚頓と云ふでもありませんけれども、固より信玄や織田信長に匹敵する程の人物では無論ありませぬ、然るに或る事柄より此の勝頼と織田信長とは干戈を交へざるを得ない場合となりましたが、勝頼は散々に信長のために破られて、天目山に逃げ込んで憐れなる最後を遂げましたが、その時に甲斐の國に父信玄の時代より歸依を受けて居りましたる所の惠林寺の快川禪師と云ふお方がありました、なか〳〵偉い所のお方でありましたから、信長は使を遣はして招きました所が、その招きに應ぜざるのみか、織田家滅亡の祈願をせられたと云ふ狀態、さなきだに殘忍なる信長、此事を聞きまして大に立腹して直ち兵を出して惠林寺に押寄せ、その寺に居る一百餘人の坊さんを皆な山門に上らしめ、その下に薪を積んで四面より火を放つたのであります、實に殘忍極まることではありませんか、サー、此時に當て快川禪師は如何にせられたかと云ふに少しも驚かず少しも悲まず、大數の坊さんに向つて「諸人即今火焔裏に向つて如何か大法輪を轉じ去らん各一轉語を着て末後の句と爲せよ」と云はれた、人間と云ふものは、平生は如何にも偉いやうな事を云つて居りまするが、サテ一番こゝが眞劍勝負と云ふ場合に臨むと、大抵は平生の大言壯語も何處やらに消え失せて仕舞ふものであるが、快川禪師は、却て此の大火焔裏に在て如何に大法輪を轉ずるか云ふのであるから、驚きも騷きもしない、大火焔の中を以て說法の道場として居らるゝ、かやうに云つて門下の人の一轉語を聞いて仕舞つて、最後に禪師が、「安禪は必らずしも山水を須ゐず心頭を滅却すれば火も亦涼し」と云つて悠然として火定に入られたのであります、此の話は隨分人口に膾炙して居る話でありますが、啻に壯快な話である面白い話であると聞き流がしては何の修養にもならないのであります、吾れ〳〵は快川禪師が如何なる所より此の一大安心を得られたかと云ふことを考えねばなりませぬ、一躰如何なる所より得られたでありませうか、此れは外てはありませぬ、心頭を滅却する所にあるのであります、吾れ〳〵は朝から晩まで、大く云へば生より死に至るまで、貪瞋痴の心に迷うて居るから、彼此差別の妄見に引かされて、貪るべからざるものを貪り、瞋るべからざるもの

に瞋り、迷ふべからざるものに迷ふて居るのであります、語を換へて申せば彼此差別の小我のために本來の戒光を昧まして居るのです、そこで一番此の小我を滅却して大我即ち宇宙の實在とも眞如とも法性とも云ふものに融和致しまする時には、從來迷ひに迷ひし小我の心頭は滅却して、いよ〳〵本來の戒光が光明赫灼として現前するのであります、快川禪師は即ち此の戒光を現はして居られたからして、四大假和合の肉身は燒かれても、その戒光は無限の空間と無限の時間とを貫通して輝いて居るのみであります、

世間では受戒と云ひ戒法と申せば、些々たる規則儀式の事の樣に了簡違ひをして居る人も尠くありませんが、受戒の根本土臺は人々本具の佛性を喚び起して、此の彼此差別の小我を捨てゝ、無限絶待の大我と融和し、その上の活動が物に觸れ事に當る當所〳〵に五戒となり十戒となり十六條戒となるのでありますから、本を瞭するともに末を修め、理を知ると同時に事を整へ、本末一致事理融通して、此の佛々祖々單傳の金剛寶戒を護持せられんことを希望いたします、

第十九席　（發菩提心）

諸佛の常に此中に住持たる各々の方面に知覺を遺さず、群生の長へに此中に使用する各々の知覺に方面露れず、是時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すをもて其起す所の風水の利益に預る輩皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟りを顯はす、是を無爲の功德とす是を無作の功德とす是れ發菩提心なり、

サテ、一躰衆生と云ひ佛と云ふのは、旦らく名前の上の異りでありまして、一旦此の戒を受けぎした以上は、「衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る位大覺に同ふし已る眞に是れ諸佛の子なり」と仰ふせらるゝ通りで、生佛一如であります、已に生佛一如でありまする以上はまた心境一如でありまして、是れ實に受戒の上に現はるゝ戒德であり作用でありますがこれを高祖樣は一應佛の方面からと衆生の方面からと兩方面からお示しになりまして、「諸佛の常に此中に住持たる各々の方面に知覺を遺さず」とありますのは、即ち此の佛の方面であります、そこで諸佛方は此の受戒の眞正中に在つて、その戒光は宇宙萬象に普く蒙らしめて、一心と萬法と無差別平等になり、諸佛の心のまゝが即ち森羅萬象の事柄物柄であり、宇宙法界の箇々物々が直ちに諸佛の心であり戒光であります、かやうになりますれば、照る日の光も輝く月の影も、春風に綻ぶ櫻

漫たる花も、秋風に散る片々たる枯葉も、皆な悉く佛心の姿である、こゝを各々の方面に知覺を遣さずと仰ふせられました、方面と申せば宇宙法界の萬有を指したので、萬法そのまゝが佛の戒德の光明の一々であります、然らば衆生の方は如何であるかと申せば、「群生の長へに此中に使用するのであります、

る各々の知覺に方面露れず」と仰ふせられて、衆生の心そのまゝが、萬物を攝め盡して、聳える山も流れる水も、皆な是れ衆生心地の戒光となるのであります、かくの通りに、衆生と佛と名は異なりても受戒の上の活用は、人の外に法なく、法の外に人なく、心境一致凡聖一如の妙用であります、されば此の所に到りますれば、十方法界の土地草木牆壁瓦礫が皆な佛事を作すことになります、またその起す所の風水の利益に預る輩皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟りを顯はすことになります、實に難有法門ではありませんか、親しき御教訓ではありませんか、しかし、こゝでお互が能く〳〵考えて置かねばならぬ事は、一體、佛事とは如何なる事であらうか、親き悟りとは如何なる悟りであらうかと云ふ點であります、大地が佛事を作すとか、草や木や壁が佛事を作すとは受け取り難い話ではありませんか、また、その起す所の風水の利益に預る輩までが、皆な親き悟りを顯はすとは合點の參ねり兼ねることではありませんか、此所は、昔、支那の宋の時代に東坡居士と云ふ人がありましたが、いかにも能く穿つて云はれたことがありますから、今はその事を一寸お話しいたしませう、

東坡居士、此人は今より八九百年前の支那の大學者であるが、一通り漢籍を讀んだ人なら誰でも知つて居る彼の唐宋八大家と云はれる中の一人で、而かも其中でも唐の時代の人は、韓退之と柳宗元の二人だけ、他の六人は皆宋朝の人であるが、その六人の中でも一人は此の東坡の父親の蘇老泉と、一人はまた弟の蘇子由、この親と弟との間にはさまつて、尤も傑出の評判のある蘇子瞻といふのが、即ち此の東坡居士であります、此の人は生れ附ての天才であるのに、親の教育も行屆いて、學問も見識も拔群なのに、詩文章は殊に名人であり、氣象が高くて議論が烈しいから、當時の儒者たちも、官員だちも到底及ぶものは無かつたが、また甚だ風流で漫落で交際が上手であつたから、多くの人に敬愛されて居られた樣子であります、然るに、若い時分には、頓と佛法の事などは輕蔑して居られた樣子でありまして、或時、玉泉の皓禪師や、佛印了元禪師などに參得をせられて、隨分見識も進んだが、その後東林の總禪師の所で、無情說法の話を聞き、翌朝馬に乘つて、尤も山水の景色の好い所を通りながら、眼には、

山々の美くして秀でたる樣を見、耳には溪水の濺々と音立てゝ流れるのを聞て、豁然として悟りが開け、「溪聲すなはち是れ廣長舌、山色清淨身にあらざるは無し」と諾ひ出した、是れは、多少禪宗の事を聞き込んだ人は、誰れしも知つて居る處の話ですが、成程、如來が五十年間横說竪說てお示しくだされたのも難有に相違は無いが、更に深く考えてみれば、如來は何をお說きなされたかと申せば、諸法實相の道理より外はありませぬ、さて、しからば諸法實相とは何であるかと申せば、諸法本來有のまゝ相であるから、柳の綠なる花の紅なる是れが即ち諸法實相であります、山の聲へる水の流れる是れ山水の諸法實相であります、かやうに考え及んでみますれば、溪水の音を如來の廣長舌と申したからとて何も不思議なことはありませぬ、また如來のお身躰と申せばとて、何も五十年や八十年の話ではありませぬ、法身は法界に周遍すと申して、無限の空間と無限の時間とを貫通し遍滿するのでありますから、山色そのまゝが如來の淸淨身と申したからとて驚く譯もありませぬが、吾れ〳〵は更に一段進んで考えなくてはなりませぬ、それは何であるかと申せば、溪聲の廣長舌たるを知ると仝時に人々の言語も亦如來の廣長舌とならなくてはなりませぬ、山色の淸淨身たることを知ると同時に人々の四大五蘊の此のまゝが、淸淨法身であることを知らなくてはなりませぬ、

是れは啻に理屈の上のみでは出來ませぬ、日々に用ゐる千言萬語が果して如來が諸法實相の道理を說せられたやうに行きませうか、人々此の身躰が我慢我慢を離れた淸淨法身の如くでありませうか、吾れ〳〵は柳の千古萬古その綠を變せざるが如く、花の千秋萬歲その紅を易へざるやうに、正しく世わたりをすることが出來ませうか、世間では佛事と申せは、たゞ法事供養に限つたやうに思はれて居りますが、成程それも佛事に違ひはありませんが、一段深い且つ親い所の佛事は人々その本分を味さぬ所にあります、して見ると、柳の綠りなるは柳の佛事であるし、花の紅なるは花の佛事であります、その他、山の聲える水の流れる、人々の動作する皆な佛事であります、此の有情非情同時成道の說法中より起る所の風に吹かるゝものも、其の流る所の水を飲むものも、皆な利益に預るのであります、例して申しますれば、彼の靈雲と云ふ人は如何でありましたか、春風そよぎわたりて桃花の笑むのを見て、大悟徹底したではありませんか、また香嚴の掃除の時に石礫が竹に碎く音を聞いて大事を發明したのではありませんか、若し通常よりまうせば、花言はず石語らず、何て悟れませうや、所が靈雲や香嚴は確に悟りました、是れ實に高祖樣のお示の「其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯はす」と仰ふせられたお意では

ありますまいか、こゝに到れば功とも德とも云ふことは出來ない、若し强いて申せば、無爲の功德とか無作の功德と申す外はありませぬ、しかも是れが眞實の功德で、達摩大師の所謂無功德であります、此を人倫の上より申しますれば、孝の孝たることを忘れて孝を盡し、忠の忠たることを忘れて忠を盡す、是れが眞の忠眞の孝であります、こゝより見ますれば、迷悟一枚世法佛法一如で、太陽の無心にして物を照し、水の無心にして物を潤ほすが如くに動作の上に功德を施しまするので、是れが眞實の發菩提心であります、是れ戒光の現成であります、私共お互は一刻も早く此の地位に進みて、難値難遇の人間の生を空くせざるのみならず、佛祖單傳の法雨に潤ひて、本來の一大光明を輝かしたいものであります、

（一般の注意）受戒のことは後に十戒說敎の部でくわしく御話し申すのでございますから、今は極く簡略に其大旨を示したのです、それのみならず、十戒說敎の方では老人や女子を相手として說敎することにいたしましたに、引きかへ、こゝでは齊年傳道の所存でありまするから多少當世向きに且つ理屈的に流れたかも知れませぬ、どうか後の十戒說敎の方と御參照下されたい、

（解說）三寶のことはいろ〳〵に說き方がありますが、これは大乘佛敎の根本思想でありまするから、左の如くにさま〳〵に見ることが出來ます、

佛（人格的實在）　法（萬有的實在）　僧（倫理的實在）

これは眞如の三方面を見たので、眞如は佛敎の根本中心ですが、これを人格的に見ると佛、萬有的に見ると法、倫理的に見ると僧であります、ツマリ同一の實在でありますが見かたによつてさま〳〵に見ゆるのであります、この同一であるといふことは同躰三寶の原理で明かです、

又宇宙の原理を說明するものと見て、

佛（同一の原理）　法（獨立の原理）　僧（調和の原理）

とも見ることが出來ます、凡そ物は其本躰を見れば宇宙平等ですが、それが萬象差別に現はれてをるのでありまするから現象は皆な個々で別々で互に獨立してをります、さうばといふと別々に離れてをるのではない、離れてをるものが調和してをるのが宇宙の妙用です、ソコデ、三寶は又

佛（本躰）　法（現相）　僧（妙用）

と見ることが出來ます、凡そ大乘佛教は此躰相用を主としてをるので、其言ても、華嚴ても、天台ても、乃至我が宗門に於ても此三つを根本思想として考へることが出來るやうになつてをる、即ち左に示すやうなものである、この一々の解釋は長くなりますので、略しますが、大乘佛教は此妙理を出ないのです、

本體＝眞如＝理＝空＝六大＝正＝佛陀

現相＝万法＝事＝假＝四曼＝偏＝衆生

妙用＝眞如即万法＝無礙＝中＝三密＝回互＝感應

といふやうなものです、この三寶の理を明かに當世流に說明せられたのが、大內南溟居士の三信であります、三信といふのは左の通りです、

吾人は無限の空間に充塞し、無限の時間を通貫して宇宙平等の本體たる絕對不變の靈光あることを確信す、

吾人は宇宙平等の本體活動して萬象差別の現相と成り因緣相續して世界の果報歷然たることを確信す、

吾人は萬象の妙用各其本德を全ふして互に相感應するときは即ち差別の現擔直にこれ平等の本體たることを確信す、

てある、以上は同體三寶に就ていふたのだが、住持三寶に就ては、

如來不思議境界經に曰く、佛を供養するものは大福德を得て速に阿耨菩提を成し、諸ろの衆生をして皆な安樂を獲せしむ法を供養するものは知惠を增長し法を證することと自在にして能く諸法の實性を了知す、僧を供養する者は無量の福德資糧を增長して佛道を成すことを致す、

高祖大師曰く、住持三寶とは形像、塔描は佛寶あり、黃紙朱軸の所傳は法寶なり、

剃髮染衣戒法儀相は僧寶なり、

二祖孤雲禪師曰く、天上を化し人間を化し或は虛空に現じ、或は塵中に現するは乃ち佛寶なり、或は貝葉を轉し、或は海藏を轉し物を化し生を化するは是れ法寶なり、

一切の苦を度し三界の苦を脫するは則ち僧寶なり、これを住持三寶と名く、

三聚淨戒は道德の根源を示したるものにて、これを四弘誓願に配當すると左の如くにいふことが出來ます、

攝律儀戒(止惡)　煩惱無盡誓願斷

攝善法戒(修善)　法門無量誓願學　佛道無上誓願成

攝衆生戒(濟衆)　衆生無邊誓願度

これを大内氏は三行と題して大乘佛教信者の心得とせられました、

一　吾人は凡そ止惡轉迷の規律皆誓て之を實行す

二　吾人は凡そ修善開悟の道法皆誓て之を實行す

三　吾人は凡そ濟衆救世の事業皆誓て之を實行す

です、これらの解說を參考として三歸三聚淨戒を新らしく說明せらるゝがよい、

（參照）　山神鬼神外道制多に歸依するなとて、迷信が排斥してある、此迷信も日本に多いが、目今尤も盛なのが左の諸教であります、

一　天理教　これは大和の中山ミキといふ婆さんの唱へたので國常立神を初め十柱の神を立て「あしきを拂ひ助けたまへ天理王命」などといふて男女相混じて踊り廻るのであります、

二　金光教　これは備中の藤井文次郎といふものゝ唱へたので金光大神といふものを立てゝ災を除き病を癒すといふてをる、

三　黒門教　これは豐前の島村ミツといふものゝ唱へたので事の妙法といふものを本尊とし、矢張男女打交りて踊り廻ります、

四　扶桑教及丸山教會　これは共に富士山を神としてこれに登山するのを目的とし、災厄を除くと信じてをるので、扶桑教の元祖は角行東覺といふ行者で、丸山教會は甲斐の農夫新兵衛によつて唱へられた共に邪教にあります、

五、御嶽教　これは信濃の御嶽山を神とするので江戸湯島の一心行者といふものが唱へたので、いろ〳〵な祈禱をいたします、

六、黒住教　これは備前の黒住宗忠の唱へたので盲目に目を開けることが出來るならばといふてをります、太陽を崇拜する教義です、

七、禊教　これは井上正鐵の主張したので「トホカミエミタメ」と唱へれば惡事を拂ひ善事を迎ふといふのです、

これらは皆な神道の假面を冠してをる邪教であります、此れ佛教の方から申しますれば耶蘇教も亦外道の教であります、

その外、神佛兩教を通して左の如きものを對象として信仰するものは皆な邪義といふて差支ありませぬ、

一、動物崇拜、龍、狐、鼠の類を神とする者

二、死者崇拜、これは追慕の念に出るのは迷信ではありませぬが、平井權八小紫の比翼塚に詣てたり、鼠小僧といふ盜賊の墓を崇拜するのです、

三、植物崇拜、老木を神としてこれを祭る、
四、山嶽崇拜、富士山や御嶽を神とするのも此内です、
五、天躰崇拜、日月星辰を神とする者、
六、庶物崇拜、岩石や刀劍類を神とする者、
七、生殖器崇拜、これは言語道斷なことです、

それから禁厭やト占も外道の法で、正法には不思議はないのです、

（譬喩格言和歌）は十戒說敎の部を參照して下さい、

第二十席（社會事業と佛敎）

發願利生

サテ、吾れ〳〵が無始劫來積りに積りし自己の罪惡に氣が附き、嗚呼惡つたと我昔所造諸惡業皆由無始貪瞋痴從身口意之所生一切我今皆懺悔と至心懺悔をいたし、進んで三歸三聚淨戒十重禁戒を受けまするときは、早や吾れ〳〵は凡夫でありませぬ、「衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る位大覺に同ふし已る眞に是れ諸佛の子なり」とありまして、受戒の功德によつて本具の生德顯然として現はれ、盡十方遍虛空、到處戒の光明ならぬ處は無く、凡聖一如生佛不二の境界に到るのであります、この境界になりますると、貪るべからざるに貪り、瞋るべからざるに瞋りし恐痴の夢は、早や覺めて、生きとして生けるものは無論のこと草木國土に至るまで、吾れと等しき悟りを開かせてやりたい、吾れと等しき樂みを與へてやりたいと云ふ心、否な、假令自分は必らずしも佛となるを望まじ、先づ他人をして佛とならしめたい、若し自分は苦むことがあつても、先づ他人を樂しましめたいと云ふ心が油然として起るのであります、此を發願利生と申すのであります、願を起すと申せば、いかにも故らに起すやうに聞えますが、實はそうではありませぬ、火の物を燒く何も故意ではありませぬ、水の物を濕ほす別段に工夫を用ゐるのではありませぬ、おの〳〵本具の性德の發揮せらるゝ所に、此の働きがあるのであります、そこで天地のあらん限り無限の空間と無限の時間を貫通して物を燒くと云ふのは、是れ火の發願利生であるし、水が宇宙のあらん限り空間時間を一貫して物を濕ほすのは水の發願利生であります、その如くに吾れ〳〵が無限の空間と無限の時間とを貫通して、有情も非情もありとあらゆる一切のものをして、迷を轉じて悟りを開かしめ、苦みを離れて樂みを得させたいと云ふのは、お互の發願利生であります、されば、此の間に報償を求むると云ふやうなことは毛頭ありま

せぬ、恰かも赫々と輝く太陽が吾曹に光と熱とを與へて貪る所なく、潺々と流る水が吾曹に潤ひを施して惜む所ないやうなものであります、此れ實に倫理以上の倫理、宗派以外の宗教ではありますまいか、當宗信者の理想とする所は、こゝでなくてはなりませぬ、佛々祖々のお示の要領も大乘佛教の眞髓も要する所はこゝにあります、大乘と申す言葉も實はこゝに根底を有して居るので、大は即ち無限を意味して居りますから、敢て干に限つたことも無ければ萬や億に限つたこともありませぬ、天の覆ふ所地の載する所、有情を盡くし非情を盡くして理想の世界たる涅槃に運ぶのが大乘と云ふのであります、しかし、かく申せばいかにも大いことのやうにのみ聞えますが、一句の法を談ずるにも、一つの事をなすにも、此の念に住してさへ居りますれば、その功德は無限であります、この念の發する所は、小にしては和氣藹々たる家庭と現はれ、大にしては信義ある國として世界の平和を擔保し社會の進運を資益いたします、我國は大乘相應の地と申して同じ佛教とは云ふものゝ、自利を主とする小乘の佛教は單に學問として傳つた丈で、實際の宗教としては大乘佛教のみであります、故に古より佛教信者の中には隨分此の意を体して實行した人も少くありませんが、彼の有名なる聖德太子の如きお方は、その重なる一人かと考えますので、今聊か太子の御一生に就て

親つてみませう、

太子は用明天皇の第一子であらせられまして、初め用明天皇が猶ほ皇子として在らせられました時、穴穗部間人皇女を納れて妃となされましたが、皇妃が一夜靈夢を感じて懷胎せられ、敏達天皇即位の二年正月元日禁庭を散歩せられまして廐の前に至られました時に、急に產氣がついて太子を生せられました、太子を廐戸の皇子と名け申したのもこの故によるのであります、かくて、太子は日を逐うて無事に生長せられ、僅か四ヶ月にして能く言ひ、早や七歳の時は、生けるものを殺すは、實に人間として恐るべきことである、無慈悲なことであると云ふことを深く感ぜられて、奏上いたされて、毎月六齊日と申して、八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、三十日、には天下の殺生を禁せしめられ、それから敏達天皇が御崩去になり、父上の橘日豐命が即位せられて、即ち用明天皇の御宇となりましてよりは萬機を輔佐遊されました、かゝる間に父上の用明天皇は七十近く御高齡であるのに、大禮の式を擧させられましてより以來、始終悲あらせられましたから、太子を立てゝ皇儲となし、後事を托せんとし玉ひましたが、太子は辭退あらせられて遂に應じ玉はず、已むなく敏達帝の第一皇子を以て皇太子となし、遂に御崩去になりました、それより太子は崇峻天皇、推古天皇と

陛下はお替りになつても、御自身は何時も重要なる補佐の位置にあらせられて、内は數多き諸皇子の爭鬪と權臣の跋扈を漸次に抑へて皇室の基礎を固くし、外は盛んに外國の文物宗敎を歡迎して大いに民心の開拓に盡瘁せられました、その功勞は日本佛敎の總開山として、日本文明の指導者として、我が國人の千古忘るべからざる大偉人であります、中にも蘇我氏の暴惡を誅し玉はざりしを以て、太子の德を傷んとするものがありますけれども、當時の内外周圍の事を察せざる愚論であります、太子の功勞は、君が世の千代に八千代に細石の巖となりて苔の蒸すまで末限りなきが如く、千古萬古忘れらるゝのではありませぬ、特に太子の御一生涯を窺つて見ると、天位に陞らせらるゝ德望は無論のこと、その機會のありしにも拘はらず、身を第二の位置に置て、上は天子樣を補佐し奉られてます〳〵皇運の無窮を祈り、下は所有方面より、文質的の文明は無論のこと、精神界の指導者たる佛敎を擴張せられて、人心の向ふ所を知らしめたまひ、更らにまたその敎理をは、實際の事實の上に行ひたまうて佛敎信者たるものゝ模範をお示しなされましたのは、吾れ〳〵深く感謝せねばならぬ所であります、今その重なるもの擧げてみますと、先づ四天王寺を御建立になりました、四天王寺と申すは、敬田院、施藥院、悲田院、療病院の四の物から成り立て居りますが、その敬田院と云ふのは、佛敎の話をいたして人民の精神上の病氣を癒す所であります、施藥院と云ふのは、鰥寡孤獨の不幸なるもので、病に苦しめられつゝも、一服の藥も得るとの出來ない憐れなるものに、藥を施して肉躰上の病を癒してやる所であります、悲田院は鰥寡孤獨廢疾の貧民が養はるゝ所、療病院は病人の治療を受くる所であります、それから憲法を制定せられまして、政敎二途の歸趨を知らしめられました、是れは今日で十七憲法と申して十七ケ條より成り立つて居りますが、中にも佛敎のことに關しては、その第二條に、篤敬三寶三寶者佛法僧也則四生終歸萬國極宗云々と仰ふせられであります、換言してみると、生きとし生げるものゝ終極の目的として歸着する所、所有國土の宗敎中の最も勝れたる宗敎で仰いて信すべき所のものであるとのことである、その卓見實に恐縮の外はありませぬ、吾れ〳〵は太子の御一生の御行爲を感謝すると同時に、此の行爲が佛敎信者の模範的行爲であると云ふことを承知いたして、一歩なりとも太子の御行爲に近くやうにしなければなりませぬ、それは如何なる次第であるかと云ふに、太子が天位に陞るべき德も機會もあらせらるゝに、遂にお臨りなくして皇室の御爲め社會人民の爲盡くされたのは、高祖大師の「設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり」との仰ふ

せに、能く合躰して居ります、世間一般の人情といふものは昔も今も大差はありませんが、大抵自分の名譽利益を得ることに孜々として、遂には仁義道德も打ち忘れる樣になるのであります、そこでその社會々々で、排擠嫉妬等の所謂罪惡のみが增長して、人のため社會のためと云ふやうな高尙なる考は、漸次に薄ぎ、世の中は智識技倆ある惡魔の社會となりはてゝ居るのであります、是れその人の不幸は無論であるが、延て國家社會の一大不幸を來たすであります、しからば此を救ふには如何にすれば宜しきやと云ふに、此の發願利生と云ふ高尙なる考えを起さすやうにしなくては外に方法はありませぬ、此の考は前にも申しまする通り、自己の性能を發揮し戒光現前する所に、自ら發起する所のものでありますから、吾れ〳〵は高祖大師の御敎訓と聖德大師の御行狀とに依りて一歩でも、此れに近くやうに努めなければなりませぬ、

第二十一席（社會改良家の任務）

菩提心を發すと云いふは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり、設ひ在家にもあれ設ひ出家にあれ、或は天上にもあれ或は人間にもあれ、苦にありといふとも樂にありといふとも、早く自未得度先度他の心を發すべし、

サテ、菩提心を起すと云ふことは、佛敎信者によりては、實に肝要なることであります、しからば、その菩提心とは如何なるものであるかと云ふと、先づ菩提と云ふ語は梵語でありまして、こゝに道と譯しますから換言すれば道心と云ふのであります、しかし道心と申しても解つたやうで解らないのですが、高祖樣は極適切な解釋を下されまして「己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり」と仰ふせられました、吾れ〳〵お互、靜に日々の行ふ事柄に反省してみまするとと、一應見ると誠に善いことのやうに見へますが、一皮剝いて見れば、皆な是れ自分の利慾のため名譽のためであります、所が此の傾向は日を逐うて盛んになりまして、世は文明開化と云ふ極立派なる名目の下に禽獸に等しい行爲を行つて居るでありますが、若し此の儘に進んだならは、人間はたゞ一箇の伎倆ある惡魔と化するより外はありますまいかく申せばとて私共は固より文明を呪ひ開化を嫌ふものではありませぬ、しかしながら、偏に智識にのみ重きを置きて道德の何物たることを解せず、物質的進步にのみ謳歌して精神的安慰を打忘れて居るのは、果して眞の文明といふことが、出來ませうか、西洋の或る學者が文明といふことを解釋して、「文明とは智識と道德との完全平均である」と申しましたが、今此の完全平均の衡て我國の現狀は無論のこと、歐米各國の狀態を量り

ましたならば、如何でありませうか、先づ米國に就いて見たらば、先づ富といふ物質的の方面より見ましたならば、實に雄偉の國であります、先進の歐洲列國も既に一歩を讓らねばならぬ位であります、然るに翻て精神的の方面で見ますれば、成程表面は左程でありませんが、時々折に觸れて暴露せらるゝ一端に依りて推察いたしまするに、隨分甚だしいやうであります、また英國と申して我國と手を取て世界の舞臺に飛躍して居る國は如何でありますか、由來此國はその氣品の高尚なる點に於て他國人の模範として居つた所のものでありますが、近來はその良風美俗も次第に廢れて來たやうであります、其他獨逸の如き、佛蘭西の如き例して知るべしとあります、一歩退いて、近く我國の狀態は如何でありませうか、外は陸海軍は勇敢なる軍隊として名を轟かし、內は交通機關整備は津々浦々まで文明の空氣を注入し、教育に技術に所有方面に於て非常なる發達をして居りますが、しかし、それと同時に狡猾の風、輕薄の俗は限なく行き渉り、嫉妬排擠我見我慢我慾の鋒は到處に人心を風靡いたしまして、心ある人をして道德の挽廻策を講ぜしめ、公德の養成を叫ばしめるやうになつて居ります、成程是れは尤の事で道德の衰退人心の危機は掩ふべからざる事實でありますから、道德の挽廻策も公德の養成も必要でありますが、如何も未だ根本問題に到着せないやうに思はれます、若し此の根本に向つて解決を與へない時は、假令一時應急の策としては、多少の功を奏することもありませうが、到底永遠のことでありませぬ、そんならば、所謂根本問題とは何んであると云ふに、人心の奥底に潜んで居る宗教的意識を喚起して利他的道德を主張するのであります、高祖の「己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり」と仰ふせられ御教訓を擴充するのにあります、一時の策としては種々の方法もありませうが、深く根底を人心の奥底に据へて尤も眞面目なる方法としては、これに過ぎたるものはありますまい、

此の通りに社會救濟の方法としても實に適切でありまするが、更に深く考えて見ますれば、利他心の有無は直にその人の人格の高下を判する標準ではありますまいか、若し人間が自分を保護すると云ふ事のみでありましたならば、左程禽獸と擇ぶ所はありませぬ、否、自分自身を保護すると云ふ點より申しましたならば、人間よりも一層利巧かも知れませぬ、たゞ人間は假令他の點に於ては劣る所があつても利他心があるから、他の動物より偉いと云ふことが云へるのであります、同じ偉い人間でも、彼の獨逸のビスマークと英國のグラッドストンとを比べて、虛心平氣に考えたならば、如何しても手をグラッドストンの方に擧ぐるのであります、若し此が單に手腕の上のみで

あるならば、グラッドストンはビスマーク々には及びませぬ、しかし、グラッドストンは大いなる暖き同情がある、此の同情の厚いと云ふ點は、人をして知らず〳〵その下に伏せしむる樣になります、此の同情と云ふのが、即ち利他心の第一歩であります、そこで、その次に高祖が「設ひ出家にもあれ在家にもあれ、或は天上にもあれ或は人間にもあれ、苦にありといふとも樂にありといふとも、早く自未得度先度他の心を發すべし」とお示しくだされた通り、出家と申して宗教家となりて佛教を弘むるものは無論のこと、在家と申して士農工商の職にあるものも、或は天上界であらうが、人間界であらうが、職業の相違や、境界の相違、貴賤貧富の異りは論するには及ばない、たゞ一日も早く利他心を起さねばならないのであります、私は高祖の御教訓を拜誦いたしましたと、彼の監獄改良の鼻祖たるジョン、ハワードを思ひ出します、こゝに聊かその人物を紹介いたしませう、

此の人はその生れを尋ねますると、英國の片田舎の豪商の子であります、そこで可なりの生活をして居られたが、當時西班牙に疫病が流行して、日に何百人、月に何千人と云ふ死人を出すと聽いて、心の奥に潜める慈悲の心は潮の湧くが如くに湧き出て、「假へ國は異なりてあつても、同じ人類である、その中には餓寒孤獨怀も嘸多く出來て、路頭に迷ひ居るものも夥しいであらう可愛さうなことである」と、遂に斷然起つて有志者を募り、義捐金を集め、己れも莫大の寄附をいたして、此を携へて海を渡り西班牙に入り込みましたが、その歸り途に於て、自分の乘つて居る船が佛國軍艦に捉へられ、自己は捕虜となつて佛國に連れ行かれ、プレストの牢獄に打ち込まれて仕舞ひました、是れは何もジョン、ハワードに罪があると云ふのでは無いけれども、英國の宰相ピットが普魯西のフレデリッキ王を助けて佛國と戰を開いて居たから、また已むを得ない次第であつたのであります、所が此の入獄は、啻に此の人一身に變化を與へたのみならず、延いてその影響は世界に及んだ、それは如何なる次第であるかと云ふに當時典獄の役目杯は皆賣買されて居たものであつたが、仲々相場も高いのでありました、何故高いかと云ふと、典獄でもその下役でも、その役目に就て居れば、金の多少て罪の有無を定めて居たと云ふ位であるから、賄賂は取り徳であつたからである、此を以て見ても、如何にその當時の社會が腐敗して居たかと云ふことが察せらるゝが、隨つて監獄の内部もなか〳〵悲慘なもので、男女も區別もなく、重罪輕罪の區別も立てず、皆同じ部屋に入れて、全然下等動物を一檻の中に入れた樣なもので、その亂雜その醜猥、實に目も當てられぬ斗りであつたのであります、此の中に繫がれたる時の

ジョン、ハワードは如何なる感がいたしましたらうか、ジョン、ハワードは此時は非常な感に打たれました、そこて如何にもして此を改革したいものてある、しかし此を改革するには自らその實權を握らなくては出來ないといふ所からして、ベッドフォードの「ハイ、セリフ」となりました、此の「ハイ、セリフ」と云ふ役は先づ郡長て裁判長も監獄長も兼ねて居る樣なものてあります、ジョン、ハワードが此の役になつたのは、無論衣食のためとか、財產のためてはありませぬ、その目的は監獄改革にあるのですから、その事務に精勵して處々の監獄も巡視しましたが、この間に非常にまたジョン、ハワードの心を刺擊したことがあります、それは、或時に例の如く巡視しまするとと、一人の若き者が飛び出して來て、「何卒長官よ、御慈悲てござりますから、一日も早く私を絞罪にかけてください」と願ひました、あゝ人間の最も嫌ふ所のものは何んてありませう、實に此の死てあります、然るに此の若者は獄にあるよりも寧ろ死を願つたのてあります、罪あるものとは云ひながら、實に悲慘の極てはござりませんか、さなきだに同情の念に富んて居るジョン、ハワードは何とも云へない感に打たれました、そこて彼は憤然として偉大なる救濟の念を起しまして、自ら斷乎として決心しました、それは、一部のハイ、セリフ位てはダメてある、一國は無論進んて世界各國の監獄を改良せやうと云ふことてあります、これより英國は無論のこと、歐洲大陸に渡ること十八回、帝王に說き權臣に談じ、また書を著して大に輿論を喚起しました、かやうにして彼れは自分の財產を拋ち、身命を犧牲にして呼號し運動しました結果、追々世間に有名となり、天下の諸國亦た彼れの改良案を採用しまして、今日歐米の監獄が所謂地窖制より感化制の傾向を取るに至つたのは彼れより起つて來たのてあります、

雪の日やあれも人の子樽拾ひ、同じく佛の御子てある、同じく人類てあります、假令罪があつたにせよ、これを善に感化する方法としては、兎も角、たゞこれを苦しめに苦しめると云ふことは、實に人間として忍ざる所てあります、況んや、同じ人間とは申せ、人を救ひ世を導いてやらうと云ふ自未得度先度他の心ある人に於て猶更のことてあります、何も特別に監獄に限つたことはありませんが、慈悲の眼を以て見れば、苦の海涙の谷て、救ふべき事柄は、大いことも小い事も、澤山あります、たゝ進んてその事に當る人がないから、苦しむものはます〳〵苦しみ貧しきものはます〳〵貧しくなると云ふことになりまして、世の中が何んだか寂しいことになつてしまいます、何卒上の話を能く御承知あつて大なり小なり自分の手てやれることを擇んて、此の美

しい己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むと云ふ心を發揮して戴きたいものであります

第二十二席（佛教と女子）

其形陋しといふとも此心を發せば、已に一切衆生の導師なり、設ひ七歳の女流なりとも、即ち四衆の導師なり衆生の慈父なり男女を論ずること勿れ、此れ佛道極妙の法則なり、

サテ、佛教信者、殊に吾が高祖大師の流を汲みて、信心獲得するもの心得べきことは、信者の價値と云ふものは、如何なるところにあるかと云ふことであります、男であるから尊ひでありませうか、年老けて居るから尊ひでありませうか、その顔、容態が立派であるから尊ひでありませうか、若し年老けたものが尊ひとしたならば、七十八十の老婆さんは嘸尊ひでありませう、男が尊ひと云ふならば實に男子萬歳です、顔容態の立派なことで云つたならば、衣通姫や小野小町でありませう、しかし、佛教では、そんな年の老少やら、男女の相異やら、顔容態の美醜に依つて標準を取るのではありませぬ、しからば何であるかと云ふと、菩提心を發したるもの、換言すれば利他の心を起したるものが、一番尊ひのであります、ぞこで、高祖大師は、「其形陋しといふとも此心を發せば、已に一切生衆の導師なり、設ひ七歳の女流なりとも、即ち四衆の導師なり衆生の慈父なり男女を論ずること勿れ」と仰ふせられました、七歳の女流と云ふのは、年の老幼に拘はらぬと云ふを思召てあります、特に此の女人のことに就いて深く御注意を願ひたいことがあります、それは、世間の人は佛教を誤解して、佛教では一にも二にも徹頭徹尾婦人を罪惡の塊と視て排斥するものであると考え込んて居る人が多いのですから、少し話が餘岐に渉るやうでありますが、少し佛教の婦人觀をお話しいたいと思ひます、先づ小乘教と申して佛教の極階級の低いところによつて見れば、女人には、一には穢惡、二には兩舌、三には嫉妬、四には瞋恚、五には無反復の五種の罪惡があると說き、または、三障十惡などゝ云ふことがあります、それから、進んで大乘の法になりますると、彼の「大般涅槃經」には、「如來の性丈夫法なるが故に、若し衆生ありで自身如來の性あることを知らず、世間に稱して男子となすと雖ども、我說く此輩は是れ女人なり、若し女人ありて能く其の身に如來の性あることを知らば、世間に稱して女人と云ふと雖ども、我說て此れ等を男子となすなり」とあります、また或る經の中には、「四大の幻身は男女生滅の別あれど、靈覺の心性には男

女生滅の相あることなし」と說かられてますがやうに申せば、同じ佛敎でありながら、正反對なことを云つてあるやうでありますが、小乘の方では、婦人の現象觀で實際今日々々の上の所有弱點缺點を擧げて示され、大乘の方では、婦人の本体觀で、實に靈覺の心性より申せば、男女の區別はないのでありまして、そこは反對のやうでありますが、實は一致して居るのでありまして、猶はまた、我國で極端の他力門を說て、日本の佛敎に異彩を添へられたる親鸞上人は如何であるかと云ふに、「八萬の法藏を知ると雖ども、後生を知らざるを愚者と名け、一文不知の尼入道と雖ども、後生を知るを智者と名く」と仰ぶせられてありますが、特にわ高祖大師は「得道はいづれも得道す、但しいづれも得法を敬重すべし、男女を論ずることなかれ、これ佛道極妙の法則なり……女人なにのとがかある、男子なにの德かある、惡人は男子も惡人なるあり、善人は女人も善人なるあり、聞法をねがひ、出離を求むることかならず、男子女人によらず」と仰ふせられて、古來の僻見を打破なされました、洵に御卓見ではありませんか、わが國では、西洋の文明が輸入されましてより、男尊女卑が眞理であるとか、女尊男卑が眞理であるとかと論諍して居るやうでありますが、私の考では、天は覆ふのが天の道であるし、地は載するのが地の道であるであります、しかし、別段に天が尊くて地が卑しいと云ふ譯でもなければ、地が尊くて天が卑しいと云ふ譯でもありませぬ、男女の兩性は宇宙に天地の別があるやうなもので、男子の尊いわけでもなければ、女子の卑しいわけでもありませぬ、天地あつて萬物位し、男女あつて、人道は立つのであります、されば、男尊女卑と云ふも誤りてあるが、また女尊男卑といふのも誤りであります、

たゞ、男は男らしく、女は女らしくして行けば、女尊男卑の說を主張しなくても、自然に女としての威嚴も備はり、德相も備はつて、眞實に女の價値があらはれて來るのであります、しからば、その女らしい所は何處にあるかと云ふに、なさけ、即ち同情慈悲であります、人間としては、誰れしも同情の涙、慈悲の心がなくてはいけませんが、殊に婦人の婦人らしい所はこの點であります、所が婦人は動もすると、自分の身の飾りにのみ、心を取られて仕舞つて、世間から毒婦とか惡女とかと云ふ批評を受くるやうになり易すい、かく申せばとて、婦人の裝飾を全然無用と云ふのではありませぬ、或る程度まで必要であります、

その程度を超しますると、却つて滑稽となるものであります、昔、英國に虛飾を好むところの婦人がありましたが、餘程工夫に工夫を凝らして裝飾をしてみても、充分に

自分の富裕を示すことが出來ない、洵に殘念なことであると歎息して居りましたが、或る時、此事を自分の友人に話して、其方法を尋ねますると、この友人の云ふには、それは、所有の銀行劵を綴つて外套にしたならば、充分に富裕なことを紹介することが出來るであらうと云ふたので、大に歡んで、友人の氣附き通りに實行して得々として居つたが、交際社會の笑物となつて仕舞つたと云ふことがあります、日本の社會も次第に虛飾の風が擴つて來ますが、後にはこんな事がないとも限られませぬ、何卒お互に人々身分を考へて適當の裝飾をなし、特に外面の裝飾と共に內面の精神が奇麗になくては、錦に毒石を包むと云ふやうな譯で、その人の心を垢を覆ふ道具に過ぎないことになります、殊に身姿は人爲の裝飾ばかりで、思ふやうに行くものではありませんから、假令、身姿は醜くとも、精神の方を奇麗にして貰らひたいものであります、古人の歌にも「すがたこそ島のゑびすに似たりとも心は花のみやこなりけり」とある通り、此の心を花の都にして貰いたいものであります、世間では美人と云へば、花の顏、霞の眉、雪を欺くばかりの肌でなくては資格が無いやうになつて居りますが、佛敎で申す美人は、それとは大いに違ひます、如來は『玉耶經』の中に、「女人の法容顏の端正なる者を美人と名けず、唯心行端正にして人に愛敬せらゝ者を美人と名く」とあります、世間で云ふ美人には生れつきにも由るし、特に金錢がかゝりますが、佛敎で申す美人には、生來の容態には關係しませぬ、金錢も無論かゝりませぬ、かく申せば、なさけ、即ち同情慈悲と云ふ者は、自然に金錢の問題と關聯して居るから、金錢がなくては出來ないと云ふお方もありまうが、成程或る場合には金錢も必要でありますが、それのみではありませぬ、いや、その心掛けさえあれば、平生事に觸れ物に當る上で充分に實行が出來ます、いま、これに就いて一例を擧げてお話をいたしませう、昔、松雨とまうす俳諧師がありましたが、風流の常で、或る雪の夜に、いかにもよい雪である、自宅で見るもあまりに無風流であるから、これから隅田川の邊に行かうと云ふので、召使の小僮をつれて出かけやうとする間際に、その女房の心に、夫は成程風流で雪見も面白いであらうけれども、此の寒い夜に小僮をつれて行くとは、實に可愛想であると感じたものですから、「我が子なら伴にはつれじ夜の雪」と咏みました、そこで、夫も成程と首肯いて小僮を連れて行くことは止めたと云ふことがあります、召使の者である、他人の子であると思うと、自然なさけないこともするやうになりますが、その子の親になつて、即ち地を換へてみますれば、自然と慈悲同情の心が湧いて來るのであります、此の松雨の妻の話は一寸した事のやうでありますが、人の心の

やさしい所は、かやうな事で解るのであります、此のやさしい慈悲深い心が、即ち佛の御心で「佛とはなにをいわまのこけむしろ慈悲より外にしくものはなし」とは、こゝでありますから、男子とか女子といふのは、此の皮一枚の上の話でありまして、何卒、此の利他の心を起して、折角の高祖大師のお示しを無にしないやうに、佛道極妙の法則に遵つて、美しい生活をいたされんことを希望するのでございます、

第二十三席（價値ある生活）

若し菩提心を發して後、六趣四生に輪轉すと雖も、其輪轉の因緣皆菩提の行願となるなり、然われば從來の光陰は設ひ空く過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際だに急ぎて發願すべし、設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも、尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量却行ひて衆生を先に度して自からは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり、

サテ、人間が此の複雜多忙なる社會に生存をいたして居りまするには、何か尊い目的がなくては出來ないのであります、若し此の目的が無つたならば、百年千年の長壽を保つても、畢竟その人の生涯は無意味であると云はなければなりませぬ、そこで、人の一生涯の價値は此の目的の如何にあると申しても差支はありませぬ、こゝに注意を願ひたいのは、その目的の內容であります、外面から見ては非常に立派であるやうに見えましても、能く〳〵取調べて見ると實に價値の無い目的もあり、此れと反對に表面から見ると如何にもツマラヌ樣に見えても、實際は却々立派なのも在ます、例して申しますると、世間では先づ一般の目的とする所は何であるかと申せば、財と色とでありませう、如何にもして澤山の財產を拵えて、榮耀榮華を極めたいとか、如何にもして所有天下の美人を集めて、色を漁りたいとかいふのであります、それから少し上つて來ますと、財產も欲しい色慾も滿たしたいが、それよりも名譽である、名譽のためには貧乏しても苦しくない、名譽のためには一生涯婦人に接せず、非常の禁欲主義を實行しても我慢をするといふやうな人がありまして、それから、また或る一流の人は、名譽も名譽だが、權威を得なくてはいけない、如何にもして權威を得たいものである、權威を得るにも、家庭の平破を破つても苦しく無い、親類の調和を缺いても差支は無い、朋友を賣つても、節を賣つても、持論を抛げても宜しい、只希望する所は權威である、これがためには、あらゆるものを犧牲とする覺悟をして居る人がある、成程、人間として生存するには金錢がなくては出來ない、財產を欲するのは無理も無いこと

である、また、人間としては絶對的に色慾を禁ずると云ふことは、却々出來ないから、色を欲するのも無理からぬことです、猶ほ進んで名譽を欲し、權威を欲する何れも尤もある、一般の社會が此を目的として、日夜汗水を流して東奔西走して居るのは、何も怪しいことではありませぬ、所が人間の欲望といふものは、實に限りの無いもので、金錢が充分であるとしても、決してそれに滿足しては居ない、金錢があれば更に一方には色慾を滿たしたい氣になる、幸にして金錢も充分に蓄へ、色も思ふ存分に漁ることが出來るとすると、進んで、名譽が欲しくなり、權威を得たくなる、少くとも財と色と名譽と權威とは得なければ承知しないやうであります、此の天地開闢以來、此の地球上に生死をした人は、實に千億を以て數へ盡すことは出來ない、無數といふより外はないでせうが、これ等の人を一々取り調べて見ましたならば、大概は此の四の外の目的はあるまいと思ひます、此の四つの中の一を漸くに滿たして死ん所の人もあらう、或は二つ、或三つを滿たして死んだ所の人もありませう、中には二つや三つの話では無い、僅に一つだけでも遂げずに仕舞う人が無いとも云へない、否、大抵はさうであります、先づ一つでも滿足に遂げたる人は餘程幸運と云つて宜しい、況んや二つをや三つをやです、誠に世の中は思ふやうに行かぬものであります、そこで、此の四つを皆遂げた人は非常の幸運、マー千歳に漸く一人と云つて宜しいでせう、して見ると、此の世界に人類が生存するやうになりましてから、何千萬年になつたか、何千億の人が生死したか解りませぬが、此の四つの希望を遂げたる人は僅かに指に屈するに過ぎないといふのも尤なことであります、中に就て、東洋で申せば、秦始皇帝西洋で申せば佛蘭西皇帝ナポレオンなどは、實に錚々たるものと云つても宜しい、今此の人々に就ては、詳かな話をする必要も無ければ、また時間もありませんが、只一言以て、彼の人々は、果して此の四の希望目的を滿足に遂げたか、猶ほまた滿足に遂げて、それに滿足したのであるかを觀察して見たいと思ひます、

皆さん、彼の始皇帝は六王おけつて四海一なり蜀山兀として阿房出づと、支那の文人が歌ひました通り。亂れに亂れたる當時の六國を打ち從へて、遂に秦の一國に纏め、外敵を防ぐのには萬里の長城を築き、自身の快樂を極めるには、阿房宮を築き、酒の池、肉の林、加ふるに三千の宮女があつて、人間としての榮耀榮華は、何に不自由無つたのです、支那全國を統一したのですから、所謂富み四海を有つて、財産の上では充分であつたに相違ありませぬ、次に色慾の方は、三千の宮女が居たのですから、無論此の慾も充分でありましたでせう、さてその次の名譽權威は如何と云ふに、德は三

皇五帝に超ゆるとまで思つた位、權威と云つたら、草木も靡くと云ふ有樣ですから、此の人は人間の希望を充分に滿たした標本と申して宜しい、しかるに、實際は此れに滿足しなかつたので、財や色や名譽や權威の上では、滿足だが、壽命の上で大に不滿足で、態と除福を日本に遣はして、不死の藥を求めしめました、彼のナポレオンも、佛蘭西皇帝の位に昇り、名譽も財產も色慾も、あらゆるものを得ましたが、それは一場の夢幻であつて、セントヘレナの一孤島に蟄居させられて、配所の月に世の中の無常を唱ち、その死する際には「嗚呼われはナザレノ大工の子に如かざるか」と歎息したと云ふことです、かやうに實際に照して見ますると、吾れ〳〵が幸にして、慾望を遂げることが出來たにしても、結極する所は不滿不平に了るより外は無いのでせう、寧ろ人間はすべての希望を拋ち、その日暮て一生を過ごす方が氣樂のやうにも考えられます、是れ實に人生の一大疑問ではありますまいか、

こゝが最初私の申して置いた通り、人間は希望が無くてはいけないが、その希望の內容を能く〳〵注意しなければならぬのであります、今申しました所の財產を目的とするやら、色欲を希望するやら、名譽や權威を希望するのは、一應尤もなことであるやうにありますが、その土臺が何にかと云へば、皆な自利と云ふ點から出て居るのであります、何故かと云へば、自分の生涯を榮耀にしたいがために、財產を欲するのであります、自分の獸慾を充たさんがために美人を求めるのであります、自分の名を擧げんがために高位高官を得たいのです、自分の偉いことを人に知らせて威張りたいためであります、かやうに皆自分自分と云ふのが土臺となつて居りますから、幸にして成功しても、その內容の價値は誠にツマラヌものです、しからば、如何なる考を土臺にして行れば宜しいかと云ふに、自分の全身を捧げて社會の健全なる幸福を圖るのです、即ち利他の觀念です、これが土臺になつて居りますれば、爲す所の事柄は、その時代と云ひ、その境遇と云ひ、一定する譯には行きませぬが、政治家として社會に立つても、商業家として世に働いても、農業家として耕作に從事しても、日々の仕事が皆な社會發達のことゝなりますから、實に價値のある生涯と云ふことが出來ます、今こゝに例を擧げてお話いたしますると、彼の北條時頼の如きは實にその人であるかと思ひます、

我國の歷史を繙いて歸往の治亂興廢を觀ますると、歎ふべきとも悲しむべきことも隨分ありますが、下人民を思ふと云ふ上では、北條鎌倉時代の如きは稀れであらうと思ひます、尤も皇室に對する點は不滿足ですけれども、それはその時代內外の事情があ

りますから、一概惡く云ふ譯には行きませぬ、中にも時賴の如きは實に政治家の標本とするに足ることが出來ると思ひます、時賴は御承知でもありませうが、形を僧侶に易へて諸國を行脚し、親しく人民休戚の狀態を觀察しまして、仁政を施しました、時賴の如きは北條家の花と云ふよりも我國の政治家中の花と云ふことが出來ます、これが即ち高祖のお示しである「六趣四生に輪轉すと雖も、其輪轉の因緣皆菩提の行願となるなり」とお聖語に能くも合しては居りませんか、自分が遊蕩の結果か、その他何か失敗が原因となつて諸國を流浪するならば、實にッライてありませう、しかし、菩提心即ち利他心を發して他を救濟せんがためでありますから天趣(天上人間畜生修羅餓鬼地獄)四生(卵胎濕化)に身を易へても、それが皆な衆生を救濟するの行ひとなるのであります、吾れ〳〵は動もすると口には能く云ふ、また心にも思ふが、さて實際手を下すと云ふことになると容易に行かない、時賴の行られましたやうなことも話してみれば左程のことでもないやうであるが、實際にはなか〳〵行り難いことであります、猶ほまた次の句の「然あれば從來の光陰は設ひ空く過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際に急ぎて發願すべし、設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも、尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて衆生を先に度して自からは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり」とありますが、要を取つて云へば、早く發願をせよ、また發願した以上は單位に上ることは且らく措いて利他の行をなせよとの御聖語でありますが、人間は事を始めるには、機會即ちハヅミと云ふことが必要で、今の此の發願も過去の事は悔ゆるとも詮ないことであるから、難値難遇の今生、今生と申しても、此の法話の席を機會として發願して貰らひたいものであります、尤も此の發願と申しても、かやうな願を發し、かやうな事を行つて一日も早く佛にならうと云ふやうな氣では駄目です、若し左樣な考であるならば、それも亦一種の自利主義であります、自分は佛と云ふやうな、偉い地位は望まない、それよりも、自分は地位は低くとも宜しいから、可成衆生を救濟をするに便宜な地位にありたい、されば、時によりては、渡守になるも可なり、門番になるのも可なりて、それが非常な尊ひ生涯でまた愉快な生活であります、利他の念より發する仕業は皆な是れ神聖であります、高潔であります、是を眞箇宗敎的生活と云ふのです、此の宗敎的生活が實行せられて、われ〳〵の生涯が價値あるやうになり、光明あるやうになり、意味あるやうになるので、此の生涯を送くる菩薩と云ふのであります、こゝに於て吾れ吾れは、貴賤貧富權威の外に超然として、進んで善を爲し善を樂み世を利することが出

來ますのすから、吾れ〳〵は一日も早く、他を利すると云ふ立派な心を發し、此の一生涯を價値あるやうに、意味あるやうに、光明あるやうに送りたいものであります、

第二十四席（慈善の本義）

衆生を利益するといふは、四枚の般若あり、一者布施二者愛語三者利行四者同事、是れ則ち薩埵の行願なり、其布施といふは貪らざるなり、我物に非ざれども布施を障へざる道理あり、其物の輕きを嫌はず、其功の實なるべきなり、然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし、此世他世の善根を兆す法も財なるべし、財も法なるべし、但彼が報謝を貪らず、自からが力を頒つなり、舟を置き橋を渡すも布施の棟度なり、治生產業固より布施に非ざることなし、

これは修證義の第二十一節で、隨分長文の贊題でありますが、初めには四枚の般若といふことを明かされたので、それは一々これからお話し申すこととなつてをります、今はその第一の布施のことを御話しいたすのでございます、抑も布施と申すのは坊さんに金を上げるばかりのことではございませぬ、布は普て施はホドコスでありますから、普ねく施すといふのて施しあひ惠み合ふといふことです、此施しあい惠みあふといふことは宇宙の眞理で、大陽は赫々たる光をわれ〳〵に施し、水は潺々としてわれ〳〵に濕ひを施し、植物は酸素を吐いてわれ〳〵動物に施し、われ〳〵動物は炭酸を吐いて植物に施し、互に施し合ふてをるのも宇宙の狀態で、如何に偉人とか豪傑とか云はるゝものでも、一人孤立しては生存することの出來るものではない、飯を食ふにつけては米屋の世話にならねはならぬし、米屋も米を買ふにつけては農夫の世話にならねばならぬ、農夫も其使ふ鋤鍬を鍛冶屋の厄介にならねばならず、鍛冶屋も金掘や樵夫の厄介にならずばならず、其着る衣服は呉服屋の世話にならねばならず、呉服屋も其食ふ米は米屋といふやうに互に世話になりあふてをるので、丁度老人のつく杖の、老人はこれを力にして立ち、杖は老人の手を力にして立つやうなもので互に持ちつ持たれつ惠みあい施しあふてをるのが宇宙の眞理でありまする、太陽は人間が禮をいはぬからとて光を止めたことはなく水は御禮を受けぬからとて濕ひをやめたことはない、布施といふは貪らざるなりと仰せられ、又彼は報謝を貪らす、自からか力を頒つなりといはれた如く、自然天然の務めとして此布施とせなければならぬ、かうすればこれほどの利益があるであらう、あゝすればこれほどの利益かあるであらうと利益

を計算してするのは、ホントの布施ではない、村の橋の修繕にこれだけ金を出したからこんどの村會議員には、おれを出してくれるであらうとか、今充分に世話をしてやれば、末には必らず禮をするだらうなぞと報謝を求める心があつては、まことの布施ではない、布施といふことを今日の言語でいへば慈善事業ぢや、慈善事業といふものは決してその爲めに報謝を求むべきではない、昔、梁の武帝が達摩大師に向はせられて、少しはこれまでいろ〳〵僧尼を供養したり、寺院を建立したりしたが、それは何程か功德があるであらうと云はれると、大師は一喝して無功德と云はれた、どれ位の功德があるであらうなぞといふケチな根情で布施をすれば、それこそほんとの物功德ぢや、どうだ各〳〵方も此無功德の心を以て布施をすることが出來るかな、これと同じ樣な話が近頃にある、それは鎌倉の圓覺寺の毓拙和尚のことぢや、和尚は近世の高德であつたが、其頃鎌倉の圓覺寺は非常に荒れてをつて柱は傾き屋根はもるといふ狀態であるのを和尚慨かれて、どうかこれが修繕をしたいと御考へになつて、信者の一人である江戸の豪商海津傳兵衛といふものに、どうか山門だけでも修繕したいから應分の寄附をしてくれぬかと云はれると、傳兵衛はもとより禪師の高德を慕ふてをるものでありますから一も二もなく承知して早速江戸に歸つて金五百兩を調へて鎌倉に參りました、時は冬の初めて木枯しの聲はとう〳〵として心耳を澄し香の烟もいとたへなる一室に禪師は爐のはたに座してござるところへ、傳兵衛參りまして、先般御話しの山門御修繕の費用にもと、わづかながら金子五百兩持參いたしました、どうか御受納下されと云ふと、禪師はたゞさうかと云はれただけで一言の御禮もない、傳兵衛は五百兩といふ大金を持て來たのであるから餘程禮をいはれるであらうと思ふたのに、禮がないからこれは和尚年寄つて耳が遠いのであらうと改めて、大聲で、五百兩と申しました、それでもそうかと仰しやつたゞけだ、傳兵衛も力抜けがして、へイ五百兩と申すのは少額ではございますが、私身分にとりましては大金でございます、其大金の五百兩を持つて參つたのでございますから、一言位の御禮があつても然るべきかと存じまするといふと、和尚、そこにあつた火箸を持つて傳兵衛の頭をピシャリとなぐつて、「馬鹿め汝の功德を積むために持て來たものを、何んて、おれが禮をいふか、と傳兵衛氣の毒に五百兩持つて來て頭をなぐられたが、傳兵衛も志のある人でございますので、深く禪師の一言に感服したといふことであります、今の慈善事業をする人の心の中を毓拙和尚に告げたなら頭をなぐられぬ人が幾人ありませう、まことに氣の毒な次第であります、布施といふは貧らざるなりて、一點でも貪る心があつては、そ

れは布施でございませぬ、此布施に財施と法施の二つがありまして、金錢や財物を施すのは財施、佛法の道理を人に施し聽かすのは法施であります、されば贊題に讀み上げました通り「一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる」とある、これは法施、「一錢一草の財をも布施すべし此世他世の善根を兆す」とあるのは財施で、そこで財ある御方は財を施し法あるものは法を施す、太陽は光を施し水は潤ひを施すやうなものぢや、財が卑いの法が貴いのといふわけではない「法も財なるべし財も法なるべし」で互に足らざるを補ふてゆく中に宇宙の眞理はあらはれ、人の人たる務めは出來てゆくので、決して他の人から報謝を受くべきではない、自分自分の功德となるのであるから誠拙和尙は汝の功德を積むのに何んでおれが禮をいふかど喝破せられたのでありますかく申すと私は錢がないから施せぬ、まだ〳〵悟を開かぬから法を說かれぬなどといふ人があるかも知れませぬが　高祖大師は「未だ明らめざれば人の爲めに說くべからずと思ふこと勿れ、明らめんことを待んは無量劫にも叶ふ可らず」、と仰せられて假令一句一偈なりとも人の爲めに說くのが慈善ぞと仰せられ、一錢一草たりとも人の爲めに施すのは布施ぢや、決して其多少を問ふべきではない、其志さへあればそれが則ち布施の本旨に叶ふのである、これは特別に貧者やまだ知らざるものに財法二施をすることを話したのであるが、たゞ財を與へ法を說くばかりが布施ではない、日々の仕事をなすにつけても、佛の心を發してどうか人の爲めになるやうに世の中の爲めになるやうにと心掛けてやってゆけば、それかそのまゝの布施にもなり慈善ともなるのであります、されば當宗に於きましては、食事をいたしまするにつけても、一口たべまするにつけては一切の惡を斷じやうと思ひ、二口目には一切の善を修しやうと思ひ、三口目には諸の衆生を度しやうと何を爲すにつけても佛の道に叶ふやうにとしてゆけと敎へになつてをるので和尙さん達は御飯をあがるときにも

一口爲斷一切惡、二口爲修一切善、三口爲度諸衆生、皆共成佛道、

と唱へて、御飯をたべるにつけても、衆生を濟度しやうと心掛るが如く、日々の行ひに此心掛を離れぬやうにするのが肝心であります、此布施といふ字は梵語には檀那といふので、今ま車夫さん達までが旦那〳〵といふが、これは布施をする人といふことで、慈善家といふ意味です、それを無暗に使ふものであるから、今は頗る不慈善な旦那樣がござるで、これらはまことに慨はしいことで、どうかまことの旦那となり、旦那と云はれても恥ぢぬやうにせなければなりませぬ

第二十五席（言語の用法）

愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し、願愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり、德あるは讃むべし德なきは憐むべし、怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、面ひて愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず、愛語能く廻天の功あることを學すべきなり、

サテよくこその御參詣、今席は既に佛の位に入り、佛の御子となり、上求菩提、下化衆生の心を起せしものゝ使ふべき言語を御示し下されたのが、唯今讀み上げた贊題で、これが四攝法の第二愛語である、前にいふ通りわれ〳〵の行はねばならぬ四つの法といふは第一が布施、第二がこの愛語、第三が利行、第四は同事である、今はこの中の愛語の話で、言語を一つ使ふにも親が子に對して言ふやうに顧み愛してやる心を以てせねばならぬ、愛らしき言語は愛らしき心から出て、慈悲ある語は慈悲ある心から出るのであるから、われら心に慈悲をいだくものゝ言語は必らず、憎まれ口や、人に聞きにくい言語をつかつてはならぬので、同じ雇人を使ふにしても、命令的にかうせよ、かくせよといへば快く働くものではないが、「汝氣の毒だがかうしてくれぬかといへば、快く働くのは人情であるから、親が子を思ふ心を以て一切の人々に對してをれば其言語はいつも情ある言語で、喧嘩や口論の起るべき筈はない、世の中に喧嘩口論の絶えぬのは多くは此言語の行き違いから起るものであるから昔の人も口は禍の門、舌は禍の根といはれてある「德あるは讃むべし德なきは憐れむべし」で、高德な人は讃めねばならぬはいふまでもないが、德のないものでもやかからとて惡口をいふべきでない、自分にコンナ子を持つたと思へば憐れまねばならぬのである、それを惡口したり誹たりするのは、自分をそのものと同等に置て考へるからで已に佛の位に入りしものゝ心とは云はれぬぢや、「親の目に憎しと思ふものはなし、罪ある子こそ猶可愛けれ」ぢや、かうやつて人に交際つてゆけは喧嘩もなく口論もなく、初め惡口いふに人も終にはそれに化せられて惡口をいはなくなるのみかは、しまいには、其人に心服するやうになるものである、そこを高祖大師は「怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、面いて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす、面はすして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘す」とは仰せられたのである、伊勢物語に昔しさる男、河内國高安といふ所に馴染める女がありまして夜な〳〵立田山といふ小さな峠を越えて其女の許に通ひまするに、通常の女房ならば嫉妬の心を起してやかましくいひまするに、此、

男の女房は、少しも嫉妬がましいこともなく、いつも夫が夜になつて馴める女のところへ出てゆきまするを門まで送つて御機嫌よろしうと挨拶をして中には入りまする、あまり柔順でござりまするので、其男がこれは女房が密夫をこしらえて却ておれの居らぬのを喜ぶのであらうと、自分の心に引きくらべ、或る夜、いつもの如く出てゆくふりをして、庭の木蔭に忍んで樣子を伺がつてをりました、やがて夜は闌けまして、風がザワ〳〵としてまゐりますると女房か椽の戸を一枚あけて空を眺めてをります、さてこそ密夫を引き入れるのであらうと、男は息を凝らして見てをりますると、其女は「風吹かば沖つ白波たつた山、夜半には君のひとりこゆらん」といふて、また戸を閉ぢては入りました、此歌の意は、嗚呼今頃はわが夫が獨りたつた山を越えて御出になるであらう、盜賊などもをるのであらうに、どうかわが夫の身に變事のないやうに、夫を思ふ眞情か溢てをります、それを聞いた夫は、これまでの自分の行ひのあしかりしことを悔い、妻のやさしき心に感じて、それからは馴染める女の許に通ふことをやめたといふことがあります、これらはまことに妻が愛語の力、夫を感せしめたのであります、これを世間の女房が少しても夫にそのやうなことがあれば山の神が荒れ廻つてやかましくいふに比べて見れば、其の女のやさしい心かわかるではありませぬか、

男子も勿論でありまするが、殊に御婦人方は此言語を御慎みになつて假りにも慳貪邪見の言を出さぬやうにいたされたいものであります、こゝて申すは畏れ入りまするが、われ〳〵は歴代の天皇樣方の御詔勅や、御和歌を拜讀いたしまする毎に、順愛の言語を以てわれ〳〵をいつくしみたまふ、大御心に涙を止めることが出來ませぬ、殊に今上天皇陛下の御仁德は或る冬の夜に身は九重の奥深きところに錦繡綾羅の御衾を纏ひて御やすみに相成る身を以て民を憐れと思召すのあまり、

冬ふかきねやの衾をかさねても思ふは民の夜寒なりけり

と仰せられ、一天萬乘の大君に連れ添ひたまふ、皇后陛下も

あやにしきとりかさねても思ふかな寒さ掩はむ袖もなき身を

とのたまひし、御和歌を拜するにつけ、われ〳〵は何の幸ひぞ、此日本の國に生れ、此仁慈なる兩陛下の下に立つこれを思ひこれを思へば、身を捨て家を捨ても、陛下の御爲め國の爲めに盡くすといふ心が禁められぬのであります、これを佛關西のルイ十四世が朕は國家なりといふて人民を奴隷の如くに扱ひましたのに比べますると實に天地の差ばかりではございませぬ、さて御話が外に走つたやうでございまするが、愛語の力の大きなのは皆さん御會得になつたでございませう、先きには御婦人の話をいた

しましたから、今度は男子方の御話をして此席を終ることゝいたしませう、昔戰國の時代に武田勝頼といふ人がありました、此人は芝居などでいたしますると回向しやうとて御姿を繪にはかゝせはせぬものを」などといはれて優男のやうてすが、實際はなか〳〵猛勇なる大將で、織田信長と德川家康の二人を敵として戰爭を初めまして家康などは非常に此人の爲めに困められたのでありますが、何にいたせ、天下の強將たる二人を敵としたものですから終には敗北いたしまして甲斐の國天目山といふ所で討死をいたしました、さて敵の大將が討死をしたといふことになると、首實檢といふことがあつてこれをこちらの大將に見せねばならぬが、今いふ通り大將は織田と德川の二人があるのであるから、先づ織田の所へ持つて參りました、スルト信長其首をヂット眺めまして「汝、弱輩の身を以て天下の強將たる此信長に弓を引きしが爲め、かゝる狀態となつた、無禮者奴」と足で其首を蹴倒しました、さて今一方の大將德川家康のところへ持つて參りますると、家康は今日は勝頼の首の來る日てあるとて佛前に燈明を上げて待つてござつた、ところへ持參をしたものてすから、家康は其首を見て兩手をつかへ、戰國の慣ひ敵となり味方となるは致方もござりませぬが、ならうことならば、貴殿と手に手をとつて快く軍物語をいたしたいと存じてをりましたに、貴殿の武運拙くしてかゝるおん有樣になりたまひしは家康身にとつて慨はしい至りでござりまする」と涙をハラ〳〵と下されたといふことてあります、前にもいふ通り愛らしき言語は愛らしい心から出る、此勝頼の首を見て無禮者奴と足蹴にした信長の心掛けこそ信長の生涯を過るの本てござりまする、信長に此心がなかつたならば、早く〳〵に天下を統一して明智光秀に本能寺て殺されるやうなことはござりますまいに、惜しい哉、この無慈悲な心掛けは無慈悲の語となつて現れ、自分の家來に殺されるやうな不幸となつたのてあります、これに反しまして家康のこのやさしい心掛は能く將士の心を得まして德川三百年の太平を保つた所以であります、或る人が信長と家康、それに豐臣秀吉との心を俳句に吟じたのが面白い、

鳴かぬなら殺してしまへほとゝぎす、　信長

鳴かぬなら鳴かして見しやう杜宇　秀吉

鳴かぬなら鳴くまて待たう杜宇　家康

三人の氣性をよく寫したものでござりまする、此殺してしまへといふた不仁の信長は半生にして殺され鳴かして見しやうといふた豐臣は二代にして亡びましたが、鳴くまで待たうといふた慈悲ある心掛は今申す通り十五代を續けることが出來たのてありま

すこの話一つでも愛語の功の大きなのを知ることが出來るであります、慈念衆生猶如赤子で、われ〳〵已に佛戒を受けた身には一切の衆生に對するには皆なこの心掛がなければなりませぬ、

第二十六席（處世の要道）

利行といふは貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻らすなり、窮龜を見、病雀を見しとき彼が報酬を求めず唯單へに利行に催ほさるなり、愚人謂はくは利他を先とせば、自からが利省れぬべしと、兩にはあらざるなり、利行は一法なり、普ねく自他を利するなり、

これは四攝法の第三で利行のことを仰せられたのである利行といふのは唯今讀み上げた通り貴賤の衆生を如何にかして利益せんと手段を廻らすのをいふのでこの事に就て昔の因緣話があります、それは支那の晉の代に孔瑜字は敬康といふ人があつた、或る時散歩をして餘不亭といふ所を歩まれると漁夫が一匹の大きな龜を捕へてこれを籠に入れて持てゆくのに遇はれました、フト何の氣なしに其籠の中を見られると龜は手足を動かして苦みもだへてをります、孔瑜はこれを見てさても可愛さうなことであると憫

憫の情を起して、漁夫に向ひ、どうか此龜を賣つてくれぬかと頼みまして幾許かの代金を與へこれを買ひ求めて水の中に放つてやりました、龜は水の中に入りて樂しさうに泳きながらふりかへつては孔瑜を見て終に水の中に潜むでしまひました、不思議なことかなと思ひましたが、その日はそのまゝに過ぎました、其後孔瑜軍功があつて餘不亭侯といゝる大名となりました、ソコデ支那の例で侯爵になつたものは龜のつまみの付いた金印を鑄ることゝなつてをりまするで、孔瑜は早速これを鑄させますと其龜の首が左の方へふりむいてをります、これは不都合であると三たびまで鑄なほさせましたが、いつも首が振りむいてをるものであります、からさては先年助けし龜の精神のこりてかくは不思議のことあるならむとて終に其まゝに用ゐて非常に名を擧げたといふことであります、今一つは後漢の楊寶といふ人の話でこの人は生れつき非常に慈悲深い質でわづかに九歳の時に華陰山といふ小丘で遊んでをりましたに、一の黄雀か梟の爲めに搏たれて地に落ちてをりまするを蟻どもはそれにたかりまして苦しめてをりまするを楊寶は憐れに思ふてこれを懷に入れて連れ歸り鳥籠の中に入れて餌をやつて養つてをりました、やがて百日ほど經ちますると毛も生へ揃ひ飛び去りては籠へ歸りて樂しく暮らしてをりましたが或る日、多くの雀が來て其雀を連れてゆきました、

其夜のこと黄色の衣服をつけた童子か楊の枕上に立ちまして白環四枚を與へて君が子孫繁盛せんといふて立ち去りましたか、其後楊賓の子孫は非常に出世して大臣にまでなつたといふことです今はこれらの故事を引て、窮龜を見病雀を見しとき彼は報酬を求めず唯單へに利行に催ほさるゝなり」と仰せられたので、雀や龜のやうなものに對して苦を拔き樂を與へてやるのが、菩薩たるものゝ務めてすまして世の中の爲め人の爲めに利益の善巧を廻らすのは皆なこれ利行でございます、ゼンナーが種痘法を發明して天然痘の患を除いたのも、ワットが蒸氣を發明して水陸の便を得さするやうにしたのも、皆な此利行であります、われ〳〵は何事をするにつけても、他人の爲めを先にせねばなりませぬ、かくいふと或は他人の爲めを先としたならば、自分の利益がなくなるであらうなどと考へる人があるかも知れぬか、それは全くの思ひ違ひぢや、われ〳〵お互か差別の見を立てゝ我だの彼だのといふが、唯だそれ因緣によつて我となり彼となつてをるので、元來一味平等なものぢや、此世の中は廻り持ち他の利益を計れば、やがて自分の利益となるので自分の利益ばかりを計つてをると、終には自分の損を招くのは、丁度商賣人が目の前の利益を計つて物品を高く賣るやうなものぢや、成る程高く賣れば一時は儲るやうぢやが、終には購客が買ひに來なくなるから損をすることゝなるやうなものであります、或る商人が其子を戒めた語に、商人は底なき柄杓で水を桶に入れる心得がなくてはならぬ、一しづく〳〵の水ぢやか、しまいには桶一杯の水となる、それに今の商人は目の前だけのことを計つて底のある柄杓で水を入れてはをるが、肝心の桶の底がないから何にもなるべきでないと、ナントもつともなことではございませぬか、利他の底だに固ければ終には自から利することが出來るのである、

江戸で一時富豪の名を博した紀伊國屋文左衛門といふのがあつた、此人は利益を計ることが上手で、紀伊國から暴風雨の日に船を出して江戸へ蜜柑を積み込むだ有名な商人で今も「沖の暗いのに白帆が見ゆるあれは紀の國蜜柑船」といふ俚謠の遺つてをるのは此文左衛門の大膽を譽めた言てあるといふことぢや、其文左衛門が江戸でどうして金滿家になつたかといふに、文左衛門は元來才智のある男で、江戸に大火があれば大金儲が出來るといふことを前知してをつたから、近郷近在へ番頭手代を廻はして材木を買ひ込ました、それもいろ〳〵狡猾な手段で安價に買ひ込ましてをつたが、其年の冬、案に違ばず、江戸が大火で花の大江戸が丸燒けになつたといふ有樣ぢやから、材木が必要となつたが、其材木は皆な紀伊國屋が買ひ込むてをるから殆んど一手專賣

じや、此時に儲けねばならぬと外になないのにつけ込むで高價で賣り出した、みす〳〵高いとは知るものゝ外に類がないのであるから紀伊國屋のを買ふといふ都合で一時に巨萬の利を得たが、世の人はこれをよくはいはぬ、紀伊國屋は江戸市中の困つてをる折に一人金儲をした人情知らずだといふことが評判となつたて自分一代はよかつたが、二代目で終に家が潰れてしまいました、之に反して、土佐の商人で年々材木を大坂に入れまする福田屋清六といふのがありました、今年も例の如く材木を積み込むで大坂へ參りました所が、其前晩に大坂は大火で材木が必要となつてをりますから仲買の人々は清六に、よい所へ來た、高く賣れ〳〵と勧めまするが、清六はイヤ〳〵此場合高く賣るのは人情に背く、私が先祖代々材木を商ふて大坂市中の人々にはいろ〳〵御厄負を受けてをるのでありまするで、無料にても差し上げたいが、小資本のものであるから左樣にも參りかねまするから原價を以てさし上げますといふて賣り出しましたところ問屋の人々それにては氣の毒であると相應の儲をつけてくれ、且つ清六は感心な男である、福田屋はエライ商人であるといふことが評判になつて子孫ます〳〵榮えて代々大阪を得意先にして繁盛したといふことであります、自他は一つ他を利するのが、やがて自ら利することゝなる、この道理を深く味ふて何事を爲すにも貴賤の衆生に利益の善巧を廻らすといふことが必要である、

第二十七席（同情）

同事といふは不違なり、自にも不違なり、他へは人間の如來は人間に同せるか如し、他をして自に同せしめて後に自をして他に同せしむる道理あるべし、自他は時に隨ふて無窮なり、海の水を辭せざるは同事なり、是故に能く水聚りて海となるなり、

大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし卒爾にすることなかれ、淸度攝受に一切衆生皆化を被らん功德を禮拜恭敬すべし、

これは修證義の第二十四節と第二十五節との御文で、四攝法の第四同事といふことを明されたのでございます、同事といふのは其字の如くに同じ事であります、此世の中のものは何一つとして同じものはございませぬ、皆な因緣によつてさま〳〵に別れてをりまするが、其根本は同じものであります、一つの木でも造りやうによつていろいろにかわる、

釋迦阿彌陀作りかへれば下駄あしだ
かわればかわるものにぞありける

と行誠上人の仰せられたやうに、釋迦となり阿彌陀となる木像の木も、下駄となる足駄となる木も、木には違ひはないが、因緣によつて下駄ともなれば、佛像ともなる、われ〳〵人間には賢愚貧賤さま〴〵に區別があつて一人として同じものはないが、其本體たる上に於てはいづれも變りはない、此變りのない本體の心を以て父は子を、子は父を、夫は妻を、妻は夫を思ひやりますれば、此思ひやりの心が異つたる二つのものを同じくするのでこれを同事と申します、學校の先生と生徒とは別々です、別々であるからとて先生が先生の見識通りの話をしては生徒にわかるものではない、先生が先生の心を思ひやつて生徒に同じてやるからよく會得することが出來るので、親が子供に概具を一つ買つてやるにも、親の好きなものでは子供の氣に入らぬ、子供の心を思ひやつて子供の好きさうなものを買つてやるから子供も喜ぶのであります、夫婦の間も兄弟の間も其通りで、此思ひやりの心が一番大切であります、昔南朝の忠臣菊池武時の討死にまする折りに、城を守つてをる女房の心を思ひやつて「故郷に今霜かぎりの命ぞと知らでや、ひとのわれを待つらん」と咏んでこれを贈りますると、女房は夫の討死を聞き一室に入りて「故郷も今霜かぎりの命ぞと知りてや、君のわれを待つらん」と咏じて自殺いたしました、これらは夫婦その心を一つにしてをるので、夫は妻の心に同じ妻は夫の心に同じたのであります、かく互に同じてをりますれば、一家内に不和といふものはなく、波風たゝずに世を送ることが出來るのに、此互に同ずるといふことがないものであるから一家内の不和が起るのであります、されば釋迦牟尼如來は人間を教化したまふのが御目的でござりまするから人間の御姿をあらはしてわれわれを教へ下され、われ〳〵も亦釋迦牟尼如來に同ずるやうにして初めて滿足することが出來るのであります、海にはいろ〳〵な水が流れ込みまするが、流れ込むて同じ鹹味となるのであります、これが同事の相ぢや、われ〳〵も己に佛戒を受けて諸佛の位に入つたのであるから、其心を第一として何人に對しても思ひやりといふことを尊らとして人に交際をしてゆくのがわれ〳〵の世を渡るの道であります、これを當世流の言語でいふと同情といひます、同情といふのは思ひやりであります、佛教ではたゞ思ひやりだけではない、其ものと同じくなるといふので、或る畫師が親が幼兒に物を食べさせてをる畫をかきました如何にも情が寫つてよく出來てをりますが、或る人が見てこれではゆかぬ、どこがゆかぬといふに親が子に物を食べさせてをるときは、其親の口が開いてをらねばならぬといふたといふことであります、子に物を食べさすのとき其口を開くのが親の情、その情が現はれて子に同するのであります、これがま

ことの同事佛は一切衆生を赤子の如く思召す下さるのであるから子のこゝろを推して御教化下さる如く、われ〳〵も人に對して此心を失つてはなりませぬ、德川三代將軍家光の傅相として酒井忠世、青山忠俊、土井利勝の三人がついてをりましたが、將軍に少しでも惡いことがあれば、此三人が出て御諫め申さねばならぬのであります、ところが、忠世や忠俊はこれは惡いこれこれは善くないと、叱りつける如くいふものでござりまするから將軍も嫌がつてござつたが利勝だけは隨分手ひどく御諫言申すのであるが、將軍家は快くこれを容れられて何事も利勝々々と御相談になる、これはどういふわけかといふに、將軍が酒宴でも開いてござると、忠俊などは左樣なことをなさつてはならぬと直に御諫め申すから將軍は大に御怒になるが、利勝はイヤ御酒位は召し上からずば御身躰にも障りませうと、先づ將軍に同情して置いて、さてそれからいろ〳〵と御諫め申すと知らず〳〵御用ひになつたといふことで、これは全く利勝がよく將軍に同じたからであります、大凡菩提心の行願以下の文は、前から御話し申した發願利生の一章、殊には四攝法を結ばれたので、節も別になつてをるのでござりまするが、今は便宜の上でこゝにまとめて御話し申すので、已に佛位に入りし身が佛の心を發し佛の行いをするといふことは、まことに大切なことである、これを敎へ下された、佛の御恩往は忘れてはならぬといふ御意であります、われ〳〵に此心だに發らば此身そのまゝ佛であり、此心そのまゝ佛心であり、此行ひそのまゝに佛行であるのであります、尙ほ次きが行持報恩の章に入て御話し申すことゝいたします、

（一般の注意）本章のは佛となつたものが、佛の如き心を起すべきことを示されたのであります、佛敎と社會事業との關係を說くには必要であります、そこで第二十一席に用ひたる譬喩因緣を第二十四席に應用し又第二十席にも應用することが出來ますから適宜に組立てゝ御說敎なさるがよい、又「世を渡るの道」とか「處世の要道」と題して二十四席以下の四席を混和して演說に組立てゝもよろしい、且つ此四席は家庭傳道や、婦人敎誨に用ゆることが出來るのでありますから其時は言語を尙ほ一層柔らかにして御用ひなさるがよい、第二十二席は當宗の女子の心得を示したのであります、これは婦人傳道に適當てあります、これと四攝法とて御婦人方の心得は充分に說くことが出來ます、總じて婦人敎誨には或る可く堅くるしい言語を避けねばなりませぬが、さればとて野卑に流てはなりませぬから言語を非常に御注意あらんことを祈ります、家庭傳道も勿論これと同じことてございます、婦人小兒といふものは感情の動き易いものてありますから、少しの事にも泣き笑ひまするて、

あまり感情を激せぬやうにして成る程と感服さすのが說教師の伎倆であります、

（典故）第二十二席に七歳の女流とあるのは、法華經にあります龍女成佛から出たので、これは娑竭羅龍王の女、年甫めて八歳で菩提心を起し、忽然の間に變じて男子となり菩薩の行を具したのに出たので、これは龍女成佛とて法華經ではやかましい一節です、さて第廿五席の廻天の力もいふことは、唐の大宗皇帝の家來に、張玄素といふ人がありまして諫議太夫といふて天子を諫める役をつとめてをりました、太宗或る時　御殿を修繕せよと　仰せ出されましたが、其時は農時の多忙な時で百性か非常に苦みまするから、誰かこれを諫めるものはと思ひましたが君命は拒まれず、皆な〳〵難義をいたしまするのを張玄素は、これ實に民に君たるものゝ心すべきことなり、國家を愛し君を愛するものゝ默すべきでないとて諄々涙を流して諫めました　太宗も終に其事を思ひ止まれました、時の宰相の魏徵といふのが、これを善めて張公が事を論ずるまことに廻天の力ありといひました、廻天の力といふのは天子の御心を廻す力といふことでございます、廻天の力ありと仰せられたのであります、それをこゝへ御引用遊はして、愛語に

（和歌）

折掛ても心ゆるすな山さくら
　さそふ嵐のありもこそすれ　　佛國禪師

世の中はみな佛なりおしなへて
　いづれのものとわくそはかなき　　花山院御製

こと浦に朽ちてすてたるあま小舟
　わが方に引くなみもありけり　　風雅集

たのむそよいつゝのさはりふかくとも
　捨てぬほとけのちかひ一つを　　徽安門院

かの岸にわたらんものはあすか川
　さわりの淵や瀨になりぬらん　　俊成

そこひなき淵やはさわぐ山川の
　淺き瀨にこそあだ波はたて　　道灌

道ならぬものをほしかる山猿の
　こゝろからとや淵にしづまん　　未詳）

みな月のけふよりかぬて知られけり

君の惠みの秋の田のみは　（道歌）

生れては死ぬるものぞと心得て
慈悲と情けて人を助けよ　（仝）

善し惡しの人にはあらて我にあり
かたち直きは影も曲らず　（仝）

ものいへば唇寒し秋の風　（俳句）

氣に入らぬ風もあらうに柳哉　（仝）

雪の日やあれも人の子樽拾ひ　（仝）

（格言）

維摩經に曰く、佛一音を以て法を演説するに衆生類に隨ふて各解を得

智度論に曰く、大悲心を以て物を施すは同じといへども、福德の多少は心の優劣に隨ふ、

禮寶藏經に曰く、貧窮にして布施すること難し、豪貴にし忍辱なること難し、危險にして戒を持すること難し、少壯にして欲を捨ること難し

法句經に曰く、千言を誦すとも行せずんば何の益あらむ、一ぴ聞て勤修して益を得るには如かず

淨心經に曰く、利に着せざるが故に涅槃を得

圓覺經に曰く、一切諸法、皆な眞如の相にして男女の相なし自他の相なし犯なく持なきを眞の持戒と名く

高祖大師曰く、人界に同ずるを以て知りぬ、同余界なるへし、同事を知る時自他一如なり、

仝　貧らすといふは世の中にいふ諂らはさるなり、

管子曰く、海は水を辭せざるか故に能く其の大を成す、山は土を辭せざるか故に能く其の高きを成す、明主は人を厭はず、故に能く其衆を成す、

梁川星巖曰く、惟此の一誠萬理に通ず、興亡治亂ことごとく前知す、

セミル曰く、多事を爲すの捷徑は他なし、即時に一事を爲すにあり、

第二十八席　（吾人の行爲）

行持報恩

修證義の御話もだん〳〵進みまして今は此の行持報恩の一節て御しまいに相成りまし

た、毎度申しまする通り當宗の安心はこの身このまゝ佛の御位に入ることが出來るので、今までは疎末に使つてをつた品物が先祖重代傳家の寶物であるとわかつたのであるから寶物は寶物のやうに錦の袋にても入れて、座敷のかざりにでも使はねばならぬ、決してこれまでのやうに疎末にしてはならぬのであります、此身もこれまでは凡夫の汚い身と心得てをつたから日々いたしまする仕事も貪瞋痴の三毒に騙られ見苦しいことばかりいたしてをりましたが、今は佛と同じ御位に入ることが出來たのであると知つた以上は佛の御心を發し、佛の行ひをせねばなりませぬ、佛の行ひとて別なことではない、此有難は佛法に歸依し殊には佛祖嫡傳の此正宗によりたればこそ、迷いに迷へる此身そのまゝ佛の御位に入り佛の御子となることが出來たのであるから何事を爲すにも此佛の御恩に報ひ奉るといふ心を以てせなければならぬ、これを行持報恩といふので、其心をさへ持てすれば其の日〳〵の行ひ、そのまゝに佛の行ひとなり佛の御恩に報いてゆくことが出來るのであります、華嚴敎の中には一切殊勝の妙行を勤修することと無量無邊にして恒に厭足せざるを行持といふとある、われ〳〵が佛の有難い敎を聞き奉りかくせねばならぬと氣の付いた時にはかうしやうと思ふことは思ふが、それがなか〳〵實際に出來ないもので初の中はやつて見るが二三日經つとやめてしまう、丁度酒を呑む人が酒は惡いと聞いてをつたが、さほどにも思はぬ、それが一日、二日醉てもして頭が痛むと、イヤ實に酒は惡いものぢや、呑むべきものではない、これは止めねばならぬ、と氣が付くこれは丁度懺悔のすがたぢや、ところが其禁酒ながくつづかぬ、甚しいのになると朝、禁酒をしやうと思ふたものが、夕方になると二日醉には迎ひ酒がよいなぞといふて呑みかける、これでは折角の懺悔も何にもならぬ、イヤこれではならぬと禁酒會にても入つて禁酒の仲間入りをする、さあ、さうなるともう呑むことが出來ぬ、これが入位のすがたぢや、それで呑まねば禁酒會員たるの資格を維持してゆくことが出來るのぢやが、どうも其辛抱が出來ず、忘に厭いてこれは脱會しやうかなぞといふ心も起り、終には、

我が禁酒やぶれごろもとなりにけり

さあついてくれさあついてくれ

とやるやうになる、これはまことの行持といふことが出來ぬ、それを辛抱して一年二年經つと終には呑まうと思ふても呑めなくなるやうになる、この呑まうと思ふても呑めなくなつた所がまことの行持ぢや、これが即ち佛の行ひぢや、されば高祖樣も「諸惡莫作諸惡莫作と行ひもてゆく中に諸惡作られずなる」と仰せられ又「諸惡作られず

なる所に佛果現成す」とも仰せられてある、惡いことをすまい〳〵と思へば、しまいには出來なくなる、其出來なくなつたところが佛と同じこと、其行ひそのまゝに佛作佛行であるのである、さて心に堅くきめてゆくには禁酒會員が禁酒會の規則を守るが如く、佛の仲間入をしたのであるから三歸三聚淨戒十重禁戒を守つて心に堅く生死即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ぶべきもないといふことを悟つて一日も徒にすごさぬやうにするのが第一であります、此心さへありますれば、それがそのまゝ佛の御恩を報ずるのであります、商人が算盤を手にしながら、農夫が鋤鍬を手にしながら、官吏は官吏の務めをしながら、軍人は軍人のつとめをしながら佛祖の御恩に報ずることが出來るのであります、昔、亞米利加のミスシッピー河に洪水のあつたことがあります、どなたも御存じの通りミスシッピー河といふのは世界第一の大河で其の長さは殆んど日本の國の長さほどあるのでありますから、それが洪水といふのですから、それは大騒ぎで、今までは蒼々としてをつた田も畠も、濁浪澎湃として入りこみ、家は潰れる人は流れる、なか〳〵御話し申すことも出來ぬ狀況でありまするから、皆な救ひを遠國の親類や知己に求めやうとて電信を打ちに參ります、ところが其電信局も亦水がつきました、西洋のことでござるから立つて事務を取扱つてをる電信技師の腰までも水が參りました、技師達はこれは大變であると早速逃げ出しましたが、中に一人イヤイヤ、これは逃げるべき時ではない、われ〳〵が今日まで生活してをるのは此電信技師として務めてをるからである、私の電信技師たるは自分の爲めではない、社會の爲めである、然るに今ま社會の人々がかくの如く困難をしてをるのに自分一人が、生命が惜しいからとてこれを逃れたならば、これ社會に盡くすべき務を欠くのであると考へて、自分一人は踏み止まつて頼みに來る人の電信を受けては打つてをりました、受けては打ち受けては打ちしてをる中に、水はしたい〳〵に增して終に其電信技師の肩まで參りました、それでも技師は自若として電信を取扱つてをりましたが、水が自分の首まで參りました時「ワレイマシス」といふ電報を次ぎの電信局に打つてそのまゝ水に溺れて死んでしまいましたといふことがあります、何んと奇特な心掛てはござりませぬか、世の人々が何をするにつけても此心があります れば、それが即ち報恩の行持となるのであります、此人の如きはまことに能く生死として厭ふべきなく、涅槃として欣ふべきなく、我が此行ひ直に佛と同じものとの考といふてもよろしうござります、國も違ひ人種も異り敎も同じからざる亞米利加にも、コンナ心掛けの人があるのでござります、況して此日本の國に生れ、此甚深微妙の佛

法に遇ひ奉り、佛の御位に入ることの出來たものは、此心掛がなくてはならぬのであります、尙ほこの事を次ぎの席から御話し申すのであります、

第二十九席（日本と佛法）

此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり、今是の如くの因緣あり、願生此娑婆國土し來れり、見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや、

參詣の方々何んと喜ばしいことではありませぬか、われ〳〵は此日本の國に生れたればこそ、此有難い敎を受けて佛と同じ御位に入ることが出來るのでございまするぞ、此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなりとあつて、南閻浮と仰せられたのは佛敎の上の地理の話で、今日の地理の上からいふと妙でござるが、これは古代の印度地理の說によりますると、此世界は須彌山といふのを中央として其四方いろ〳〵の國があるといふので、東邦婆提州、西瞿陀尼州、北拘盧州、南閻浮州といふので、たゞ今われ〳〵が世界といふてをるのは其南閻浮洲に當るといふのです、釋尊御在世の時分には此天文地理が盛んに行はれてをつたのでありますから、釋尊もこれを御採用になつて南閻浮洲と仰せられ、高祖大師もそのまゝに南閻浮洲と仰せられたのであるが、今日の學問から云へば此世界と見てよいので、此佛と同じ位に入り佛と同じ御心を發してゆくとは地球上の人類に多いと見て差支はございませぬ、佛法では世界といへば此地球上だけてあるとは見ないので三千大千世界と申しまして、此われ〳〵の接むて居る地球の外にいろ〳〵の世界があるといひます、これは佛法だけではございませぬ、今日の地理學や天文學から申しましても、月には月の世界あり、土星には土星の世界あり、水星には水星の世界あり、天に輝く星には皆な一世界あるといふので、これはブルノーといふ學者が初めて唱へ出して今日では何人も疑はぬ定說となつてをります、たゞ一つこれに反對いたしましたのは耶蘇敎で、耶蘇敎は神が此地球を作つたといひ地球の外には外界がないといふのでありますから、この多世界論には反對せねばなりませぬ、ソコで氣の毒なのは此ブルノーといふ學者です、初めて多世界說を唱へたが爲めに耶蘇敎の人々に怒られ、終に耶蘇敎の管長樣なる羅馬法皇の爲めに火炙に相成りました、話が岐路に入りましたが、さういふ次第で耶蘇敎では多世界論は取りませぬが、今日の科學では皆な此多世界說て佛法も亦三千大千世界と立るのでございまする、サテかく多くの世界を立てまするて、其多くの世界の中でも此南閻浮州のもの即ち地球上の人類が菩提心を發すべきものであるといひ、又此われ〳〵の住むてをる世

界を娑婆世界と申しまするて、今われ〳〵は因緣あつて此世界に生れて來たといふとを、「今是の如くの因緣あり願生此娑婆國生し來れり」と仰せられたてある、娑婆といふのは支那に譯して忍土といふ、悲華經に「何んか娑婆と名くる、や、此の話の衆生三毒及ひ諸の煩惱を忍受し能く斯の惡を忍ふか故に忍土と名く」と仰せられてあつて、此の如くの住むである世の中といふものは、まことに思ふに任せぬものであります、この思ふに任せぬ世の中に日を送つて行かうといふには、辛抱か第一てござる、此辛抱せなければならぬ、浮世てあるから忍土といふので、見たいと思へど目の力には限りあり、聞きたいと思へど耳の力にも限りあり、まゝにならぬか浮世の慣ひ、忍土とはさても能く名けたものてあります、さてわれ〳〵は此世界に生れたればこそ釋迦牟尼佛の御敎を奉ずることか出來るので若しも外の世界に生れたならば、此有難い法にも遇ふことが出來ぬであらうに、何の幸ひぞ、此世界に生れ此敎に遇ふぞと思ひて、何事をするにつけても佛恩報謝といふことを忘れてはなりませぬ、高祖樣はかく仰せられたのてあるが、われ〳〵高祖大師の御敎を奉ずるものは「願生此娑婆國土し來れり見釋迦牟尼佛を喜はざらんや」と仰せられたのを、更らに手近く「願生此日本國土し來れり見承陽大師を喜はざらんや」と考へて日々の行持を怠つてはならぬのてあります、當宗の信者は佛となることの出來る御恩報謝の心を以て何事をもなさねばならぬのてありますが、今は手近く日本國民として恥しからぬ行ひをして上御一人の御恩に報ゆるといふことが、やがて佛恩報謝の行ひとなるのてござります、思ふても涙といめあえぬのは　天皇陛下の御恩德てあります、神武天皇初めて大和の橿原に都を奠めたまひしより歷代の天皇方、皆な下を憐れむ大御心を以てわれ〳〵を愛し下され或る時には高き屋に上りて民の竈に烟なきを悲みたまひ、或る時は寒夜に御衣を脫して民の痛苦を問ひたまひ、離れ疎かはござりませぬが、わけてわれ〳〵の厚き御恩を受けて居るのは、我が　今上天皇陛下にございまする、四五十年前までは汽車もなく電信もなかつた此日本の國をして汽車あり、電信ある今日の文明國になし下されたのは、これ偏に　今上天皇陛下の御恩德てあります、四五十年前迄は學校もなく敎育も完全せなかつた此日本の國をして日本國中津々浦々、野の末山の端に至るまて學校の設けあらざるはなく、敎育の制度の立たざる所のないやうになし下されたのは、これ偏に　今上天皇陛下の御恩德てあります、昔は武士のみ跋扈して町人百姓は斬捨御免などといふ不條理極まることが行はれたのに、今は四民平等安らけく世を渡ることか出來るやうになし下されたのは、これも偏に

今上天皇陛下の御恩德であります、天に一輪の月、流れに落れば水の流れに月影はやどる、桶の中の水にも映れば、木の葉に置く露にもやどる　陛下の御仁德われ〳〵萬民の心の水にひき映し、月やわれ、われや月かとあかぬまで心も空に澄みわたつて其日其日の營業をすれば、それがそのまゝ　陛下の御仁德に報ゆる所以であります、われ〳〵何の幸ぞ、此の日本の國に生れ、此仁慈なる　陛下の下に立つ、これを思ひこれを思へば、生き易り死に易りても此國に生れて　陛下に忠勤を盡すといふ心掛がなくてはなりませぬ、楠正成は日本第一の忠臣といはるゝ人でありますが、此人が延元元年五月、足利尊氏が西國の兵を引き連れて攝津の兵庫に參りまするのを、防ぎ戰はむとて我が子正行には櫻井の驛にわかれて後事を托し、死する覺悟の血戰にさしもの賊軍辟易いたしましたが、衆寡敵するべくもなく、正成の一軍、刃は折れ矢は盡きて、今は討死の外なしと湊川は廣嚴寺の庭に入り一族八人相集りて、正成は、一度び笠置の山に　陛下に頼まれ奉りしより如何かして賊軍を平げんとしたれども、南風競はず、吉野の山の花嵐、あだに散りてのこる櫻の色もあせ、この一戰も死出の旅、死するは武士の本懷なれど、正成こゝに討死と聞きたまへば、南朝の帝は如何に悲みたまはむ、これを思へば死にたくはなけれど、今は刃折れ矢盡きて詮術もなき今日の仕義、のう弟と、正季に向はれると、正季は、兄上さな慨きたまふな、「七たび人間に生れて朝敵を亡ぼさん」といひまするに、正成はよしと打ち笑みて一族八人刺し違へて死にました、何んと忠義なことではござらぬか、七たび人間に生れて朝敵を亡ぼさむわれらは此日本の國に生れたといふことを喜ばねばなりませぬ、敎といふ敎は澤山ありまずが佛祖正傳の戒法を我が日本に傳へ下された承陽大師ありたればこそ、此無上甚深微妙の法を聞くことが出來たのであります、此娑婆世界に生れ、釋迦牟尼佛の敎に遇えともこれを傳へ下さる高祖大師のござらねば、われらは此法を聞きあさましき凡夫そのまゝに、佛の位に入ることが出來ぬのであります、佛となる身ぞ心ぞと知つて悔い改め、さて佛作佛行をなすがごとく、日本國民ぞと知れば、此日本の國を恥かしめぬやうにせなければなりませぬ、國といふ國は多うござりまするが、我が日本のやうに萬世一系千代に八千代に變りなき、皇室を戴いてをる國はありませぬ民といふ民は多うござりまするが、四千萬の國民、悉くが、天皇陛下と其御先祖を同うしてをる民はござりませぬ、佛法は此國に流布してわれ〳〵に佛祖單傳の敎を聞くことを得かしめたまふのであります、われ〳〵自ら此萬國に比ひなき、日本國民ぞと知つたならば、此日本の國を恥かしめぬやうに行つてゆくのが、それか即ち報恩の行持となり、此無上

正法に遇ふことの出來たる身ぞと知つたならば、高祖承陽大師幷に此法を御弘め下された大祖弘德圓明國師の御恩德に報ひ奉るといふ心を起し、何を爲すにつけても、御恩報謝の行ひぞと覺悟して一生懸命にせなければなりませぬ、くれ〳〵も申すやうてあるが、われ〳〵は此日本の國に生れ此佛祖正傳の法に遇ひたればこそ、あさましき此身そのまゝ佛の御位に入ることが出來るのてありまするぞ、

第三十席（聞法の心得）

靜かに憶ふべし正法流布せざらん時は、身命を正法の爲めに拋捨せんことを願ふとも値ふべからず、正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし、見ずや、佛の言はく、無上菩提を演說する師に値はんには種姓を觀ずること莫れ、容貌を見ること莫れ、非を嫌ふこと莫れ、行を考ふること莫れ、但般若を尊重するが故に、日々三時に禮拜し恭敬して更に患惱の心を生せしむること莫れ、

今日は佛法を御聽聞なさるに就ての心得方とも申すべきことを御話し申さねばならぬ次第となりました、佛法を聞くといふことは今日ではイト易いことて、野の末、山の端にも寺院のないところはなく、津々浦々にも僧侶方のござらぬ所はないから何日ても聞かれるが、若し此寺院もなく僧侶もなく、此佛法といふものが流布してをらなかつたならば、如何に身命を捨てゝこれを求めたからとて得られるものてはない、釋尊の御前生のことぢやとて涅槃經に出てをるのてある、それは釋迦牟尼佛が過去の世に波羅門となつて、雪山の中て菩薩の行ひを修めてござつた時に、帝釋天が其修行を見て假りに羅刹の姿となつて、諸行無常、是生滅法との二句の偈を說かれました、佛はこれを聞てこれぞまことの法ぞと喜ばしく思はれたが、どうかして其次ぎの句が知りたいとそこらを見玉ふと一人の羅刹が居りましたものぢやから、呼び止めてあなたは此次ぎの句を知つてござるかといふと、羅刹に私はこれを知つてはをるが、飢に迫つてこれを說くことが出來ぬ、食ふべきものさへあれば汝の爲めに此法を說かむといひまするから、佛が、されば貴殿は何を食るゝかと御問ひになりますると、人の肉を食ふのだと答へられた、佛は然らば、どうか其次ぎの偈を說いて呉れ、說き終らば我れ汝の飼食とならむとて、次ぎの生滅々已、寂滅爲樂の句を說くのを聞き終つて自ら其身を拋つて羅刹の食となられたといふことてあります、これは釋尊の御修行の困難てあつたことを示された譬喩てござりませうが、正法の流布しない其時は身命を拋ちても求められぬのてあります、それに今は此四句の偈を解し易く說かれた

色は匂へど散りぬるを（諸行無常）
わが世誰ぞ常ならむ（是生滅法）
有爲の奥山今日越えて（生滅々已）
淺き夢みし醉もせず（寂滅爲樂）

の四十七文字は小供でも知つてをることゝなつた、ナント有難いことではないか、「いろは」といへば何んでもないやうてあるが、この句の意味を求める爲めには釋尊は身命を抛たれたのてある、が、たゞ此四十七文字だけては意味かわからぬが、石見の屋善といふ人が何人にもわかり易く示された歌があるから、ことの序に話すことゝしやう、

咲く花の、色は匂へど、やがてまた、散りぬるものを、わが世にはたれぞ常あるものならむ、いざこの有爲の奥山を、今日越え出てて、あさはけき夢はまた見じ、やがてかの涅槃の都につきぬれば、明りなき酒にはもとより醉ひされもせず

これて大体の意味がわかるてしやう、これは「いろは」の御話ちやが、これもなかなか知ることが出來なかつたのが昔のさまちや、今はそれどころてはない、無上甚深微妙の佛法を聞き、しかも佛祖正傳の戒を受けて佛の位に入ることの出來たのは、抑も誰れの御蔭てあらうと思へば恩澤の有難いに感泣せねばなりませぬ、若し佛法が行はれなかつたならば此無上の大法に遇ふと思ふても遇ふことが出來ぬのてあります、されば此法を說くの師あれば、如何なる人てもこれを聽くがよい、十圓紙幣は王侯貴人が持つても十圓、乞食非人が持つても十圓ぢや、王侯貴人ちやから十圓以上の價値があるといふわけもなければ、乞食非人ちやから十圓以下にしか通用せぬといふ道理もない、金襴の袈裟に紫の衣ぢやから其法が貴いの、破れ衣ぢやから卑しいといふことはない、それに今時の人達は、坊主が憎いから此佛法までも惡いやうにいふて攻擊する人かあるが、それは持ち手が惡るいから十圓紙幣が一文の價値もないといふやうな議論てまことに笑ふべきてされば、佛も「無上菩提を演說する師に値はんには種姓を觀ずること莫れ、容顏を見ること莫れ、非を嫌ふこと莫れ、行を考ふること莫れ、但般若を尊重するが故に」と仰せられたのてある、鼻紙に包むでわつても黃金は黃金ぢや、蒔繪の重箱ても馬糞が入てをつては何にもならぬ、入れものはどうてもよい、中が大切ぢや、破戒無慚の坊さんが說法しても法は法ぢや、その坊さんは兎に角、其法をまて侮蔑するのは、鼻紙に包むてあるから黃金の價がないといふのと同じことて大間違の話てある、昔俳諧の名人芭蕉庵桃青が信濃路へ赴つて旅をしてをると、時は

丁度八月の十五夜、今宵が秋の最中なりけるて、月は皎々として照り渡り田の面の景色得も云はれぬ、そこで其近傍の村人はトアル小丘に宴を張つて觀月をして、佛句を吟むてをります、芭蕉もずきな道とて、それへ參りましてどうか、私も仲間に入れてはもらへまいかと、いひまするとと、村人は、芭蕉の裝服を見てをりましたが、檜木笠の破れたのに、杖をついて疎末な衣服を着てをるのてありますから、發句といへば十七文字ぢやが、なか〳〵むづかしいぞ、到底おまへ方の出來るものてないと、やりました、芭蕉はニッコリ笑つて、さうてあらうが、どうかやらしてくれといふ、それならば、先づ此名月について何か一句よむてみよ、その次第によつては仲間入をさせないものてもないといひまするから、さらばとて芭蕉は、矢立を取り出し、「三日月の」とやつた、これを聞いた村人は一度にドット笑ひ出して、八月の十五夜に三日月とは可笑しい、これてはとても俳諧は出來るものてないと云ひまするを、芭蕉は、直ちに「頃より待ちし今宵かな」とつけた、「三日月のころより待ちし今宵かな」これては滿月の句となる、イヤハヤ誠に名吟でござりまする、村人一同ひたすら感心して大に初めに笑ふたのを恥ぢたといふ話がある、何事もその通り服裝や容貌を見て其人を評するのは凡俗のことて、まことに見苦しいことてす、殊に無上甚深微妙の法を聽くには、

如何なる人にても一たび說かむといふ人あれば、これに聽いてをかぬと、終に聞くことが出來なくなるやうなことがないとは申されませぬ、かへす〳〵も正法の爲めに行持するのが當宗の起行てござりまするて、この事を忘れぬやうになさりたいものてあります、寂蓮法師はますほのすいき、といふこと一つを聞くためには、風雨をも厭はず出立せられたといふことは、いつぞやも御話し申しましたが、正法を聽く人はこの心掛が第一てあります、

第三十一席　（佛祖の大恩）

今の見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩なり佛祖若し單傳せずば奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙ほ報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざらんや、病雀尙ほ恩を忘れず、三府の瑞能く報謝あり、鴉鳥尙ほ恩を忘れず、餘不の印能く報謝あり、畜類尙ほ恩を報ず、人類爭か恩を知らざらん、

これは前席に續いて佛祖の大法の有難いことを示したのて、われ〳〵が此有難い佛法を聽くことの出來るのは並大抵のことてはない、皆なこれ釋迦牟尼佛が一切衆生を憐

れと思召し下されて難行苦行の御修行、それから臘月八日の明星に轄然として大悟したまひ、此無上甚深微妙の法を二祖たるべき摩訶迦葉に御譲りなされ、迦葉はこれを阿難に、阿難はこれを商那和修といふ風にだん〳〵と一杯の水を器から器にうつすが如く面と相向ひなされて御傳へなされ、それを行ひ持つて來て下されたればこそ、われ〳〵はこれを聽くことが出來るので、殊には我が　高祖承陽大師が支那の國に御赴てになつて天童如淨禪師からこれを御傳へ下されたので、若し高祖大師の御入宋がなかつたならば、われ〳〵は到底此佛祖の正法を聽くことは出來ず、煩惱の曇深き此身そのまゝに諸佛の位に入ることとは出來ないのでありまするに、これを聽きたればこそ諸佛の位に入ることが出來るので、さもなければ、未だに迷ひに迷ふてをるのであります、其御恩を思へば實に大きなものではありませぬか、一句の恩猶ほ報謝すべし一法の恩尚ほ報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざらんやであります、併し人間といふものは勝手なもので、目の前の恩は禮をいひますが大きな恩はツイ忘れ勝なもので、咽の渇いたときに一杯の水を貰へば有難いと禮をいふが、朝から晩まで流れも盡きず、われ〳〵に濕ひを與へてくれる水の恩は忘れるし、暗夜に提灯をかりたをりには禮をいふが、赫々として輝く太陽には無斷で其光をつかつてをる

今正法眼藏無上大法はあまり大きいから忘れるか忘れてならぬのは、この事でございます、日々日は東より出て、夜々月は西に入る、未だ曾て休まず、未だ曾て息ひませぬ、それを思へばわれ〳〵も日々夜々少しも怠ることなく其業を奬まねばなりませぬ、其業を奬むのが、そのまゝに日月の恩に報ゆることであります、佛祖の正法も其通り別段これといふてやるのではない、日々の行ひそのまゝに御恩謝報とならねばならぬのであります、此恩に報ゆるといふことは、佛教道德の主眼で、恩を知るものは大悲の本、諸〳〵の美業を開くの門とあり、又恩を知らざるものは禽獸に等しともいふてある、病雀尚ほ恩を忘れず、三府の環能く報謝あり、窮龜尚ほ恩を忘れず、餘不の印能く報謝ありて、病雀や窮龜でも尚ほ恩を知つてをるのぢや病雀や窮龜のことは前に話したから略してをくが、禽獸でも恩を知るといふことは今更ら事新らしくいふまでもない、英吉利のある片田舍にゼームスといふ小供があつた、これは餘程感心な子で親に頗る孝行であつた、其母親が病氣で困つてをるから或る冬の夜、月高く霜、地に白き山道をとぼ〳〵と、一里ばかりある醫者の所へ薬をとりに參りましたが、常に可愛がつて飼つてをりまする犬は尾を振りつゝ從ひて參りまする、其日は殊の外の寒さで雪がチラ〳〵と降り出しました、ゼームスは醫師の家に參り薬を受けて歸りまする頃は雪はま

す〳〵降りしきりまして、小供の足ではなか〳〵に歩き難いやうでございまする、ゼームスは寒さを忍んで父に藥を飲ませたいばかりに、山道を參りますると、雪は次第に降りしきりまして風さへ加はり、今は一歩も出すことが出來ませず、しばし立ちすくむでをりましたが、終にドット倒れました、其上へ雪はます〳〵降りしきり、犬は其前後をとりまいて吠へてをりましたが、ゼームスの起き上りさうにもないのを見て、悲しい聲を出して吠へ廻り、やがて飛ひ出してゼームスが家の方へと參り、家のぐるりを吠へ廻りました、ゼームスの父は其聲に驚きて戸を開きまするとと無理にッポンを咬はへて引きまするので、何事かと引かれつゝ參りますると、ゼームスが雪に埋まられて居る、所へ參りました、犬は雪の中を前足にてかきまして知らせまするて、父は初めてゼームスの雪に溺れてをるのを知り抱き起して連れ歸り、やうやうに蘇生をさしたといふことです、若し此時に犬が報知をせなかつたらば、ゼームスは終に雪の中で死んだかも知れぬのであります、犬てさへ飼主の爲めには、恩を報ゆることを知つて居ります、若し人にして恩を知らぬものがあつたならば、それこそ禽獸よりも劣つて居るのであります、一飯の恩尚ほ且つ忘れてはならぬのであります、況してや、無上甚深微妙の法門を敎へてくだされた大恩は、これを報酬することを忘れてはなりませぬ、

人といふものは敎がなければ禽獸にも等しいものですが、敎を受けてこそいろ〳〵なことを知り、この生死の一大事をも明むることが出來るのです、人生の大事は生と死とであります、此生死の一大事を明め、迷ひに迷へる此身そのまゝに佛祖の正法を傳へらるゝとは何たる幸ひでございませう、太田道灌といふ人は戰國時代の勇士でありましたが、其死ぬる折はまことに氣の毒な次第で、讒言をするものがあつて、其主人たる上杉定正が糟谷の邸に呼はれて參りまするとと、定正はこれを湯殿に案内をさせて槍を以て刺させました、其時に道灌は少しも騒がず、槍の幹を握りて

かゝる時さこそ命の惜しからめ
かねてなき身と思ひしらずば

といふたといふことであります、かねてより道灌は當宗の信者で生死の道理を明めてをりまするて、かくは覺悟をすることが出來たのであります、此敎に遇ひたればこそ、かく泰然自若として死ぬることが出來たのであります、此敎は佛々祖々の單傳せられた所で、正法限藏無上大法であります、われ〳〵お互其の皆な此大恩を受け此敎示にあづかつてをるのでありますから、一日も此恩を忘れてはなりませぬ、此大法こそ佛

祖の單傳したまひし所であります、佛祖の單傳せられなかつたならば、われ〳〵は到底此大法を受くることは出來ないのであります、思へば〳〵有難き敎てはございませぬか、有難いといふことの氣がついたならば、どうか一日片時も其御恩報酬を忘れぬやうにしたいものであります。

第三十二席　（處世の大道）

其報謝は餘外の法は當るべからず、唯當に日々の行持其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日々の生命を等閑にせず、私に費さゞらんと行持するなり、

これはわれ〳〵が世に處するの道を示されたものでございます、そも〳〵われ〳〵は正法眼藏無上大法の大恩により佛の御位に入ることが出來たのでございまするので、如何にしてこれを報ひねばなりませぬかといふに、其報謝の法にはいろ〳〵あつて言語を以て報謝するのもあれば、力役を以てするのもあり、金を以てするのもあれば、命を捨てゝするのもあるが、今まわれ〳〵が眞正に此大恩に報謝せんとするには、外のことではゆかぬ、たゞ日々の行ひそのまゝに報謝の正しき道ぞと心得ねばならぬ、それは如何にすればよいのであるかといふに、たゞ此の日々の生命を等閑にせぬやうに無益に費さぬやうに行ひ行くので別段むつかしいこともなにもない、君の恩を報するのでも、親の恩を報ずるのでも、たゞ口ばかり君は大切ぢや、親は大事ぢやといふばかりでは、それはまことの忠孝ではない、君や親の困つてござる時に金を出したり、身命を棄てゝ君父に盡くすのは結構ぢやが、眞の忠といひ孝といふものは、常に間斷なく君を思ひ父を思ふので日々の行ひそのまゝに忠孝の道となり、君父に酬ゆることゝなるのが、まこと報謝の道である、古人も眞忠は忠を忘る念々これ忠、眞孝は孝を忘る念々これ孝といはれてある、俚歌にいふ通り「忘れねばこそ思ひ出さぬ」といふのが、まことの道である通り、此正法眼藏無上大法に報謝するとて、外にむつかしいことをするには及ばぬ、日々此の生命を無益に費さぬやうに、自分〳〵の本分を守つてゆくといふことが、そのまゝに報謝の道となるのぢや、しば〳〵御話いたす通り此の世の中は持ちつ持たれつしてをるので、互に世話になり合つてをるのであるから世の中の爲めに働くといふことがわれ〳〵の忘れてはならぬ大任ぢや、政治、法律、宗敎、文學、農工、商とさま〳〵に人の仕事は分れてをるが皆な自分〳〵の務めを盡くして社會の爲めにするといふのが、人の本分ぢや、人は決して活きてをりたいが爲めに働くのではない、人といふものは働くべき爲めに生きてをるのぢや、それに人と生れながら

ら、人の爲めになることをもせず、世の中の爲めになることをもせず、自ら浮世の惠みの露を受けながら無益に生涯を送りましては、殺潰しといはれて、人の人たる務を盡くさぬものとなつてしまう、これから即ち佛祖の大恩を忘却したる不屆至極の者といはねばなりませぬ、西洋の諺にも勞働は神聖なりとわつて働くといふことは、此世の中に尤も貴いことでございまする、それに何か勞動といへば卑しきことのやうに思ひ、安逸に暮すのを貴いことのやうに思ふのは以ての外の誤りで、人は額の汗を以て自ら食ふものより貴いものはございませぬ、立派な衣服を着飾つてぬらりくらりと遊んでをるものより破れた衣服を着て、額に汗を流して働いてをるものゝ方が貴いのであります、されば文祿の俳人といはれたその女は、大和國當麻寺に詣でゝ中將姫の織りたまひし道の曼荼羅を拜し、「ころもがへ自ら織らぬ罪深し」と吟じたといふことであります、畏れ多くも、故英照皇太后陛下は萬乘の御身を以て深くもその女が、此吟を感じたまひて養蠶のことをすゝめたまひ、皇后陛下は手づから蠶糸をとりたまひ、英國のヴィクトリヤ女皇は、六十の高齢にましましながら政務の餘暇には機を織られたといふことです、高貴の御方でも、かようてござりますから、ましてわれ〳〵共は一日でも無益に費してはならぬのであります、われ〳〵は世の中の惠みを受けて生きてをるのでございまするから、一日でも怠つては此生命を等閑にすることゝ相成ります、人々が此勞働の神聖なることを知つて一日を無駄に費すまいと覺悟いたしますれば、僅倹の風が盛んになつて奢侈の沙汰はなくなるのです、奢侈は安逸から起るのでして家を亡ぼし國を亂すの本であります、「賣家と唐樣はかく三代目」で、先祖が勞動してこしらえた財産も、二代目三代目となりまするとと財産があるまゝに勞働をいやしみまして、終には奢侈に耽り、先祖代々の家藏まで賣らねばならぬことゝなります、これらも皆な勞働の神聖を汚した罪であります、それでおりますからたゞ日々の生命を等閑にせぬといふことが、われ〳〵が處世の大道であります、さればこそ石頭の希遷禪師は光陰虛く度ること莫れと御戒めに相成り、百丈の大智禪師は一日作さゞれば一日食はずと仰せられてある、この心掛を以て世の中のことに務めまするのが、われ〳〵當宗の信者たるものゝ道であります、それでありますから世の中の爲めになり、人の爲めになる折には、いつにても此命を捨るといふ大決心も出來て、快活に世を渡ることが出來ます、どうか皆さん此御心掛を以て日々を御送り下されたいものであります、

昔、伊豫の宇和島に大飢饉のあつたことがありました、田は枯れはて、一粒の產もなく、野には青葉の影もない、昨日は幾人の餓死があつた、今日は何人を見るも涙の有

様でありましたが、其時に作兵衛といふ農夫は一升入りの麥の袋を枕にして餓えに苦んでをりました或る人が怪んで汝がさう餓えに苦むなら、何故其枕にしてをる麥を食はぬかといひますると、これは食はうと思はぬではないが、今年の大飢饉、此宇和島領分には最早や一粒の米もなく、一粒の麥もない、このまゝに過ぎたならば、來年は蒔くべき種がないであらう、それでは來年も亦困まねばならぬのであるから、些少ではあるが、わしが枕にしてをる一升の麥、これだけてものこしてをけば、來年の種が盡きぬであらう、今わしがこれを食ふたからとて、一月と生命は保つことが出來ぬ、わしはよしこゝで死んでしまうても、此種だけはのこしてをきたいと苦しき息をつきながら話をいたしましたが、作兵衛は終に其麥を枕にしたまゝ死んでしまいました、それで宇和島領には翌年の種が絶無にもなりませなんだといふことであります、此作兵衛の心掛こそ、佛菩薩の心掛とも申すべき立派なものではありませぬか、農夫は農夫、商人は商人其盡くすべき務はいろ〳〵ありますが、世の中の爲めに死しても尚ほ盡くすといふのは、何んと美しい心掛ではありませぬか、今われ〳〵は正法眼藏無上大法の大恩を受けこれに酬ゆるのも、むつかしいことではなく、たゞ日々の生命を等閑にし、空しく費さゞるやうにするのに外ならぬのであるから忘らず、たゆまず、何事をなすにも佛祖の御恩に報ずるのであると思ふて世を渡つてもらいたいものであります、「精出せば凍る間もなし水車」で少しでも等閑になつては、そこへ煩惱の氷が出來るのであります、

第三十三席

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し、何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復ひ還し得たる、徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なく悲むべき形骸なり、設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも其中一日の行持を行取せは一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の他生をも度取すべきなり、此一日の身命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此行持あらん身心自からも愛すべし、自からも敬ふべし、我等が行持によりて諸佛の行持現成し諸佛の大道通達するなり、然あれば則ち一日の行持是れ諸佛の種子なり、諸佛の行持なり、

何んと有難い結構な御教訓ではござらぬか、世の中は三日見ぬ間の櫻花て、移りゆく光陰は矢よりも迅く、明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかはで、人の生命は露よりも脆いものであります、どのやうな方便を以てしましたからとて過ぎにし

一日を復ひ返す得ることが出來ませう、學問が如何に開け諸種の發明は出來ましたが、未だ一日を呼び返すことは出來ませぬ、光陰一たび過ぎてまたかへらずて、光陰のかへらぬやうに人の命は一日と共に過ぎこはまた返へりませぬ、「今日も亦命の中に暮れにけり、明日をも聞かん入相の鐘」て一日〳〵入相に近づくのてあります、此等は光陰、脆い生命に何事をもせず安閑として日を送りましては、後て氣が付いてももう取り返へしがつきませぬ、たとひ佛に念じ菩薩に御願い申したからとてこればかりは致方はないのでありますから、前にもいひました通り此一日の生命を等閑にせぬやうにして佛祖の御恩に報ひ奉らねばなりませぬ、とし百年生きてをつたからとて世の中に何の益もなければ、實に悲むべき形骸であります、われ〳〵凡夫のあさましさ、惜しい欲しい可愛い憎いの煩惱に追ひ廻はされて其日〳〵を送りませうとも、これてはならぬと氣が付いて懺悔し受戒し發願して一日なりとも佛恩報謝の行ひをしたならば、其一日こそは空前絶後の一日て、此一日てこれまての罪を償ふのみならず、これから後の世までにも及ぶ立派な一日てある、丁度これまて怠り懈けて遊び廻ってをつたものが、これてはならぬと氣がつきて正直に働き出せばこれが習慣となつてなか〳〵に怠ることの出來ぬものぢや、よし再び怠つたからとて其一日の行持はいつまても消ゆるものてはない、そこの道理を「設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せは一生の百歳を行取するのみにあらす、百歳の他生をも度取すべきなり、此一日の身命は貴ふへき身命なり、尊ふへき形骸なり」と仰せられたのである、法集要頌經に「若し人百歳中懈怠劣精進なりとも、一日中勇猛行精進なるには如かず」と仰せられてあるのも、此道理て一日〳〵なりとて決して疎かにしてはならぬ、惡いと氣が付いたならば、其日より速に改めてゆかねばならぬ、其改めて行ひゆくそれこそまことに佛の行ひてあるのてある、一日の精進と精を出すことは百歳の懈怠にも優るのてあるから此一日を疎にせぬやうにせねばならぬ、實に人の生命はわづかなもので五十年七十年ぢやが、宇宙の壽命は永いものて何億何千萬年經つたからそれてしまいといふこともなければ、いつが始りといふこともない無限の時間とて限りなく過去現在未來と通じてをる其の中に、わづか一日といへば大海と粟粒位の違ひぢやない、モット小いものぢやか、此の一日も無限の時間の一つて、一日が全く欠けてしまうといふわけにはいかぬ、一日は僅かだが、悠久なる宇宙の壽命の中てあるのぢや、この一日を無駄にせば悠久なる宇宙の壽命を無駄にすることゝなるのぢや、丁度時間は一日一日の輪が繋がつてをる鎖のやうなもので、これ一つ欠けても此の鎖は解けるのて

ある、さう思へば此一日の時間も、此一日の行ひも決して〳〵疎末にすることは出來ませぬ、ワットといふ人は蒸氣を發明した人ですが、この人が鐵瓶の蓋が湯氣でコ〳〵と上るのを見て、蒸氣を利用することを發明したのは、ワットしたことでわづか一時間位のことでしやう、併し此一時間は後世幾億萬年を利益する貴重なる一時間であります、フランクリンの電信を發明したのも、雷雨の日に紙鳶を上げた一日、それが後世までに諸種の便を與へてをるのぢや、ゼンナが種痘を發明した其行持は、世間幾多の人間をして天然痘を免れさせたことに立派な一日であり一生であります、わづかに一日ですが、わづかに一生ですが、それでかくの如き立派なことも出來るのであります、此一日は貴ぶべきものであり此一生も亦大切にすべきものであります、この一日は佛と同じ行ひをするのですから此身も心も四衆の導師なり衆生の慈父たるのであります、それであるから此身も心も貴重して自ら愛し自ら敬してゆく、これが即ち佛々祖々單傳の無上の大法を相承し、一切衆生と共に菩提を成就するのでございまする、此行持は一切衆生を濟度して佛種を相續せしむる報恩の行持であります、譬へて見ますると、われ〳〵は惜しい欲しい可愛い憎いの煩惱の繫縛にしばられて自由自在になることも出來ぬのは、丁度繩にくゝられてをるやうであります、今あ

ゝ惡かつたと懺悔して受戒したれば其繩が解けて自由自在の佛の位に入たのであるから此自由自在になればそのまゝ諸佛の大道に通達するので、それから後の一日は佛の行ひをする一日ぢや、よし百歳の長い馬は煩惱の繩にしばられてをつても、此一日の懺悔受戒によつて解けてしまへば、それからの行持ほど貴いものはない、われ〳〵は一日の行持をも疎にしてなりませぬ、これを世間のことで申しませうならば、一日なりとて無駄に費さぬやうに覺悟して其日〳〵の仕事をしてゆくのが、世を渡るについて必要なことであります、英國の諺に、ペニーを無駄に費すな、パウンドは自ら無駄にならぬ、時を無駄に費すな、年は自ら無駄にはならぬといふことがある、ペニーといふのは一錢とか五厘とかいふ小額の錢ぢや、此小額の錢を無駄にせぬやうにせよ、大額なるパウンド(五圓とか十圓とかいふ額)になると錢の方でも無駄にはならぬ、一時間位ぢやといふて無駄にするな、それが積りつもりて長い百歳の無駄となるぞ、一年となるも全く無駄にすることとなからうが一時間位といふ心が一番惡いと戒めたのであります、先きにもいふ通り無常迅速、生死事大じや、いつ如何なる時に此生命は捨てねばならぬかも知れぬが、一日も無駄にせぬのは人生といふ旅宿に賃錢を拂つてをるからいつても出立てきるやうなもの、さうでないものは賃錢か滯つてをるから、なか

なか出立することが出來ず、生死に自在を得ぬ、生死自在を得る人は、此一日を疎末にせぬといふことが大切です、英吉利のヴィクトリヤ號といふ軍艦が沈沒するときに、船は早や半は傾きて怒濤は艦上に入りこむてをるのに、火藥番はチャント火藥庫の前に立つて少しも體度を亂さず、武器を磨がくものは、チャント其所を亂れず磨いてをつて、今ま沈沒して生命を捨てねばならぬといふことを知らぬやうである、艦長はこれを見舞はつて英吉利の海軍の強いのは戰爭のかけひきが上手なばかりではない、船員が死ぬまで其職を守つて少しも騷がぬのにあるのぢやといはれたといふことであります、今、船が沈沒するといふに、少しも騷がず泰然自若として其職を盡くしてをるのは、何たる大膽、何たる勇氣でございませう、當時の信者は常に其職を盡くす點に於て此勇敢なる氣風が大切であります、よし此身はこゝに死すとも、一日の行持を怠らぬといふのはこゝのことであります、

第三十四席（即心是佛）

謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり、過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛と成るなり、是れ即心是佛なり、即心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし、正に佛恩を報ずにあらん、

これを當宗の安心の上に於て尤も必要なることで即心是佛といふのが、當宗の極意ぢや、今は修證義の終りであるから此極意を示されたので懺悔滅罪、受戒入位、發願利生、行持報恩の四門の要は、此の即心是佛にあるといふてもよい、何故かと申すに、迷ひに迷ふて安心することの出來なかつた此身が、正法眼藏無上大法の恩に浴し、あゝ惡かつたと懺悔して此心そのまゝに諸佛の位に入り諸佛の子となり、佛願を起して佛恩を報ずるので、これがそのまゝ懺悔、受戒、發願行持の四門となつてをる、此諸佛といふのは宇宙間に現れざるなき宇宙の實躰を指すので其數は無量百千萬億と數へ盡すことが出來ぬのだが、此宇宙の眞實の道理を語り、われ〳〵に御示し下されたのは釋迦牟尼佛で、われ〳〵が此の心そのまゝに釋迦牟尼佛の御心と一つになるところか、即心是佛ぢや、あゝ惡かつたと懺悔をするものは此心ではないか、諸佛の位に入るのも此心ではないか、利生の發願をするのも、此心ではないか、報恩の行持をするのも此心ではないか、われ〳〵は此心そのまゝに佛となるとか出來る資格を持てをりながら迷ひに迷ふて、到底佛になれぬなむと愚痴をこぼすのである、眞晃斷際禪師の云はれたのに「生を明らめ死を明らむるは是れ誰そ、生死即ち涅槃と心得るは是れ誰

そ、諸佛の前に徧ふして誠心に懺悔さるは是れ誰ぞ、諸佛の所證なる金剛不壞の佛果を證せるは是れ誰ぞ、薩埵の行願、自未得度先度他は是れ誰ぞ、一々已れに省みて眞參實究し、日々の生命を等閑にせず、私に費さゞらんと行持す云々」とあるのは、よく此即心是佛の道理を說き示されたものであります、佛とて外にはない、それを間違へてをるのかわれ〳〵凡夫のあさましさぢや、昔、一休禪師は誰れに向つても曲つた杖を出して、さあこれを直ぐに見ろ、と仰しやる、どう見れば眞直ぐなのであらう、と考へる、考へれは考へるほどわからぬ、わからぬから、皆困つてをると鯰川新左衛門、ずか〳〵と出て、和尙、其杖は曲つてるといふと、和尙はから〳〵と笑つて、左樣ぢやと云われたといふことぢや、曲がつたものを曲がつたと見る、これより眞直ぐなことはない、それを見ることが出來ずして迷ふのぢや、「二人行く一人はぬれぬ時雨かな」といふと、さあどういふ理由ぢや二人行くなら二人ともぬれねばならぬ、それに一人はぬれぬのはどうかと迷ふ、迷ひ迷ふてわからなくなる、が、眞直ぐに見ればよくわかる、二人行くならば二人ともぬれるので一人はぬれぬ、それであるから「二人ゆく一人はぬれぬ時雨かな」ぢや、ナントわかつたか、それを迷ふのは即心是佛々參究することか出來ぬも同じことまことに氣の毒な次第ぢや、この即心是佛と參究

て、昔の人が頭を失ふたと思ふて探しあるき柱で打つけて、初めて矢張、本の所にあつたと悟つたやうな愚なことをせぬやうに、御研究なされて其悟りの道が、日々の行ひにあらはれてくるのが修證不二の道理で、當宗の極意であります、なか〳〵引き續き御話いたしました修證義もこれで終りましたで、また外の贊題に就て御話をいたしませうか、外の話をするとて全く別のことではない當宗の安心はこの修證義に御話し申す外はないのでありますから、その量見で御聞き下されたいのであります、

（一般の注意）　此行持報恩の章は職工傳道に必要であります、此章各節の因緣は互に應用することが出來ますで臨機應變でこれを御使ひなさるがよい、職工傳道といふことの本意は、職工をして其任務の大なることを知らしむると共に勞働の神聖なることを知らしめねばなりませぬ、それから引例は成る可く職工若くは技師に關したのを撰ばねばなりませぬ、それから、此章の說敎には第一章の總序の所を參照して生死の話や無常の話をなさるがよろしい、最後の一節は普勸坐禪義の說敎を參酌なさるがよいと思ひます、

（事實）　土屋東雨といふ彫工は、職人といふものは金を得やうと思ふ心があつてはならぬ、少しでもそんな氣があつては出來たものに銅臭を帶るたゞよくしやうといふ

ことをのみ心掛けよとある、これらはよい心得であります、職工のことばかりぢやない、政治家にも此話は應用できる、

彼の北條泰時と申せば、北條歴代中で偉い人でありましたが、或時、その頃有名なる高德明惠上人の所に參るりまして、爲政の要と申して、政治を爲すに就ての根本要義を質問しました所が、上人はこれに示して、良醫は能くその病の源を知りて藥を與へ、灸を加ふれば病おのづから癒ゆるやうに、國を治さめるにもその通りてあるから、亂るゝ源を知りておさめなければならぬ、さて、その亂れの根本は何かと申せば唯た慾が根本である此の欲心が變じて一切萬般の禍となるのであるから、能く此を慎まれよと云はれたといふことてあります、國を治めるには、種々方法手段もありませうが、その要所はこゝてあるが、人々自身を修めるにも此の無貪が必要てあります、上人の示されました所は、實にその要所をとらへて居るが、以後北條の政策は、實に無貪を土臺にして居るやうてあります、無貪が一變して貪慾主義になつた時は、北條氏は早や事實上の滅亡てあつたのてあります、

（金言）

付法藏因緣經に曰く、若し人生れて百歲、生滅の法を知らざるは生ずること一日にして之を解了するには如かず、

高祖大師曰く、即心是佛といふとい（ども、是れ心猿意馬、即佛といふにあらず、近代の學人多少錯り會して或はいふ一たび即心是佛に歸すれば第二世なしと、恁麼に會するときは即ち斷見外道に同じ、百久して曰く即心是佛是何の宗旨ぞ、兒啼を制せんと欲して一拳を打す

忠心經に曰く、自ら身を觀て他人の身を觀よ自ら意を觀て他人の意を觀よ、自ら法を觀て他人の法を觀る

文殊師利問經に曰く、心性は本淨し、諸過を垢と爲す、智惠の水を以て心垢を洗除す、

維摩經に曰く、一切の煩惱は皆なこれ佛種なり、

涅槃經に曰く、凡そ心あるものは成佛す、

華嚴經に曰く、初發心は便ち正覺を成す、

諸法無行經に曰く、衆生は即ち菩提、菩提は即ち衆生なり、之を知るを世尊と爲す

（和歌）

むかしおもふまかきの花をつゆなから手折りていまも手向つるかな　（乘好）

聞き得るぞやがてほとけのみなれ棹さしてをしへんおもふ波路を　（道遊院）

二葉より匂ふはやしにたちぬるゝ袖もかくこそ四方のはるかな　（仝）

朝顏を何はかなしと思ひけん人をも花はさこそみるらめ　（覺圓）

あしかりし難波のみつのうらの名もきこえぬかたに漕きそわかるゝ　（頓阿）

生れくるこゝこそもとのふるさとを迷ひし道になにか歸へらん　（實隆）

知らじかし秋來るかたのいろにみな染むるすかたは露もしぐれも　（仝）

いまそしる世々をこゝろに照しつゝ人を鏡といひしまことも　（了然）

極樂をねがふおもひのけふりこそむかひの雲とやかてなるらめ　（源信）

ふたつなき花の心の開けては墨繪の梅のいつもかふばし　（不知）

十戒教說

第一席

十戒

サテ、佛敎の大海は愈入れば愈深して、四十九年の說法、五千餘卷の經論、到底お互が三年や五年で研究をいたしてみやうなどゝ申しても容易に手に入れられるものではありませぬ、そこで、昔から佛敎を研究し聽聞した所の人で、多くは、佛敎の廣大なることに驚いたまゝて、佛敎とは如何なるものであるか、また佛敎信者平素の行は如何にいたせば宜しいかと云ふことが、解らんで仕舞つた人が尠くありせぬ、これは一應尤な話であります、實に佛敎は廣いであります、且つ深いです、信者のお方〳〵が方角に迷ふのも無理はありませぬ、しかし、更に飜て深く考へて見ますと、如何に深いからとて、如何に廣いからとて、捉ふべき所を捉へさへすれば、決して方角に迷ふやうなことはありませぬ、此に就て大いにお互の心得となるべき話がありますから、

今一寸大畧をお話しいたしませう、

昔し支那に白樂天と云ふ人がありました、此の人は非常な學者でありまして、その人の詩風などは、遠く我が國に影響を及ぼしまして、彼の有名なる菅原道眞公などの詩も、此の白樂天の詩風であると云ふ位であります、所が、此の白樂天が、杭州と云ふ處に太守の役をいたして居らるゝ時に、世間で佛敎佛敎と云ふが、何か定めて高尙なものであらう、一番研究したいものぢやと云ふので、幸にその州に居らるゝ鳥窠禪師と云ふ大德を訪問せられた、今その狀態を一寸申して見ると、先づ最初に白樂天がその禪師に問うて「佛法大意如何」といはれたれば、鳥窠禪師は直に「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎」と答へられました、此を解り易く云つて見ると、佛法は八萬四千の法門とか、五千餘卷の經論とか云つて居るが、それを概括してたる所の主意と云ふものは如何なるものであるかとの問であります、流石は白樂天であります、大底の人なら佛敎と云へば直に地獄極樂のことを聞くが、此の人は極樂のことも地獄のことも問はずに、驀直に佛敎の大主意を問うた、能く問ふべき所を問ふたのであります、その答もまた能く答ふべき所を答へて居る、何故かと申せば、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎とは、一切の惡いことなら、大にせよ小にせよ、決してなすまひ、そのかはりに、ありとあらゆる善事は悉く行ふ、しかも、能く自分の意を清淨にして行くのが、是れ三世諸佛の敎であると云ふので、實に佛敎が如何に廣く如何に深くあつても、此れで盡して居る、しかしながら、白樂天は平素佛敎に對する考が異つて居る、佛法と云ふものは、餘程高尙幽玄なる議論であらうと思つて居たのですから、此の答に遇ふて大に意外に感じたので、白樂天が「三歲の童子も此を知る」と云はるゝと、鳥窠禪師は「三歲の童子も此を知れども八十の老翁も之を行ふこと難し」と答へられた、此が有名なる學者白樂天と、有名なる高僧鳥窠禪師との問答であります、能く要領を得て居る問答であります、如何に佛敎が廣いと云つても深いといつても、あらゆる善事を爲し、あらゆる惡事を止めて其の意を清淨にさへすれば、それで澤山でありませう、所がたゞ聊かお互に解り苦いのは、如何なるものが善で如何なるものが惡であるかといふことです、此の善惡の問題は西洋の學者等も種々の說を立てゝ議論をして居る、よし議論の上では合點しても、實際行るといふ時になると、なか〳〵迷ふ此所を解決しないと、如何に論諍をしても、如何に一致をしても所詮何の得る所も無いのであります、こゝに着眼をして實際事實の上で標準を示したものは、佛敎の十戒であります、即ち身口意の三業で、先づ身の方のは、不殺生とて生きもの

を殺すな、不偸盜とて泥棒をするな、不邪婬とて邪な交接をするなと云ふ三てあるし、口の四は、不妄語とて虚僞吐くな、不訶語とて心にもお世辭を云ふな、不兩舌とて二枚舌を使ふな、不惡口と申して罵詈惡口を云ふな、それから意心に於て貪とか瞋とか邪見とか云ふ考えを起すやうな事をするなと云ふのてあります、此は何れ詳しいお話もいたしませうが、一寸聞て見ても誰れも異論の無いことであらうと思ふのてあります、此の十惡を止めるのが、前の諸惡莫作てあります、さて、かやうに十惡を止めることは止めても、更に一段進んて善事を爲さなくてはいけないが、事實を擧げて見ると十惡の反對の事柄を行るのて、殺生の反對に放生をし、泥棒の反對に施しを爲し、邪婬の反對に清淨行をやり、妄語の反對に誠實の言語を吐き、綺語の反對に質直なる語を用ゐ、兩舌のかはりに、和諍の語を使ひ、罵詈惡口の反對に、溫順なる語を使ふやうにし、意の方て貪欲の反對に不淨觀をして貪欲を離れ、瞋恚の反對なる慈悲觀を起し、邪見の反對に因緣觀を行るのてす、衆善奉行と云ふのは、此れてあります、猶ほまた心得て置くべきことは、自淨其意と云ふ、即ち意を清淨にすると云ふのてありますが、此に就ては一寸大乘の戒小乘の戒のことをお話しせねばなりませぬ、元來、戒そのものには大小の隔りはありませんけれども、此を護持と申して、護り持つて行く人々の心の持ちやうからして、自然、大乘小乘の差別があるのてあります、しからば、如何なる所が異なるかと申しますると、先づ大略二ヶ條の相異があらうと思はれます、一には自利と自他との相異てあります、人間と云ふものは、兎角自己の都合の好いやうになることばかり考えるものて、だん〳〵此の心が增長して參りますと、自分の利益のためには、親兄弟も犧牲にするやうになります、かやうな淺間しいお互であるから、佛法を聽聞して發心はしても、どうも、自分の事ばかり氣が向いて、極樂往生をして安樂な暮しをいたさうとか、今生の善業に由て來生の福德を得たいとか云ふことばかりを考える、是れ等は佛敎信者てはあるけれども、極下劣な考えてあるから、此の心を以て持つ所の戒法は小乘戒と申します、此れと反對に自分は兎も角何卒他の人類が苦んて居る、迷つて居るから、此を救つてやらう助けてやらうと云ふ考を以て戒を持つのは大乘戒と申します、その次には、小乘の方は形式に重きを置きまするし、大乘の方は精神に重きを置きます、此の世の中は御承知の通り、苦の海涙の谷て、人間一生五十年の間には、苦いこともあれば辛いこともある、そこでお互が順境にのみ處して行きまするならば、形式に重きを置く小乘の方ても宜い、また、自分丈の事てあるならば、それても不可と云ふてはありませんが、順逆の風雨の中に立

つて人の爲め社會のために盡して行かうと云ふことになれば、形式に重きを置く小乘の方では、臨機應變の點に融通がつきませんから、却つて戒法のために縛せられまして目的を達することが出來ないのであります、特に戒法と云ふその物より考へて見ましても大乘の言て無くてはいけないかと思ひます、それは何故かと申しますと、戒法の根本精神よりみますれば、規則や箇條は末でありまして、人々固有の本性の德用を發揮するのが本であります、本性の德用は何かと申せば、佛の御心、此をお互の方て申せば、慈悲心孝順心に過ぎないのであります、此の慈悲心孝順心が、實際事實の上に現はれて行く所が、不殺生不偷盜等の十戒でありますから、その土臺の精神を淸淨にせなければなりませぬ、

我が高祖承陽大師は、此の事に就て親しくお示しになりまして、「諸惡莫作と願ひ諸惡莫作と行ひもてゆく、諸惡すでに作られず成りゆく所に修行力たちまちに現成す」と仰ふせられました、何事に依らず、總て惡いことは決して仕まいといふ願を起し、此の願を相續して十惡を斥け十善を行ふやうに仕て參ありますれば、「諸惡すでに作られず成り行く所に修行力たちまちに現成す」と仰ふせられた通りに、最初、善と惡と相對して居つたのが、既に惡といふことが無くなつて仕舞へば、これに對する善といふ名も自然に無くなるのであります、こゝになりますると、善惡の普通の意味よりも遙に高尙なる絕對善とでも申しませうか、相手の無い無限絕の善でありますから、不殺生と申すも不偷盜と申すもこの戒の光明に過ぎないのであります、此を古の人は佛性の戒珠とも申されました、戒法などと申しますと、何か六ヶ敷い個條規則の樣でありますけれども、能く〳〵尋ねてみますれば、此行の實現せらるゝ所が、直に佛の行であるし、祖師の行願であるし、人々本性の德用の現はれてありますから、呉れ〳〵も信受起行ありたいものであります、十戒の一々は何れ席を改めてお話しいたしませう、

第二席

第一　不殺生戒

サテ、吾れ〳〵お互が、此の世の中に處して行きまするには、種々樣々な物が必要であります、先づその一二を擧げて申すると、吾れ〳〵には鳥獸のやうに、生れつきの着物がありませんから、寒暑相應に着物が無くてはいけない、また、鳥のやうに高く木の上に巢うとか、蟲獸のやうに、地を堀つて穴居するならばいざ知らず、それが出

來ないとすれば、起臥をする所の家屋がなくてはいけない、着るに衣服があり、住むに家屋があつても、餐を食ひ露を吸うて生活せざる以上は、それ相當の食物がなくてはなりませぬ、古より衣食住と申して、人間として此の世の中に存在するに缺くべからざるものとして居るのも、尤な事であります、所が、此の着る所の衣服、食う所の食物起臥する所の住家があると、それて宜いかと云ふと、それては到底人間らしい社會を形造ることは出來ないのであります、成程、着るべきものを着、食うべきものを食ひ、住ひすべき所に住むことが出來るは、それて充分のやうでありますけれども、これだけては到底社會を形造ることは出來ませぬ、

譬へてみれば、こゝに一軒の家屋を拵へるとしますると、礎となるべき石は無論のこと、材木やら、瓦やら、其他種々のものが必要であります、所が、此等の物がありさへすれば、一軒の家屋が成立することが出來るかと申せば、そうはいけませぬ、一すこと見ると目にも留まらぬやうでありますけれども、此の柱と彼の梁とを結ひ合せ、此の樓と彼の樓と結ひ付けて居る所の釘や「てうつがひ」なるものが無くては成立つことは出來ませぬ、恰どその如く、此の社會にも、釘や「てうつがひ」が無くてなりませぬ、その釘や「てうつがひ」といふのは、何てあるかと申しますると、同情慈悲と云ふものてあります、そこて、西洋の社會學者は此の同情慈悲を以て社會組織の原則といたした位てす、此の同情慈悲と申すものは、初めは、至極簡單て、その及ぼす範圍が狹いでありますが、次第〳〵に此の心の光りが明に輝いて來ますと、その及ぼす範圍が廣く遠くなつて來ます、佛と凡夫とか常に申しますが、さて、しからば、此の佛と凡夫の違ひ目は如何なところにあると云ふと、外てはありませぬ、佛樣はこゝぞと云ふ涯りの附かない、即ち絶對無限の慈悲同情を有して居らるゝし、われ〳〵凡夫は、極小いさな慈悲同情しかないのてす、こゝが、吾れ〳〵と佛との違ひ目でありますから、古人の歌にも、「佛とは何をいわまのこけむしろ慈悲より外に敷くものはなし」と申されました、言を換へて申せば、佛樣は慈悲の凝結てあります、此の慈悲の凝結が吾れ〳〵凡夫、否、一切衆生に對せられるときは、如何なる狀態てあるかと云ふと恰ど母親が子に對するやうなものてあります、吾れ〳〵衆生が苦しめば佛も苦みたまひ、吾れ〳〵が樂めば佛も樂みたまふのて、結局、佛は苦樂を吾れ〳〵と一緒になさるといふことになるのてあります、此に就て面白い話がありますから一寸、それを紹介いたしませう、

昔、或る畫工が、母親が子に物を食べさせて居る圖をかきましたさうですが、その圖

が如何にもよく出來て居るので、觀る人觀る人が皆な賞讃ました、所が、或る一人が頭を傾けて云ふには、成程皆さんの仰ふせの通りよく出來て居りますが、如何しても私には遺憾な所があります、それは、一躰母親が子に物を食べさする時は、思はず知らず、自分の口をも開けて居るのですが、此の畫を見ると母親の口が閉じて居るので、充分に母親の愛情を寫したとは云へないと申しましたと云ふことです、此れは、ヤ塙の畫の批評に過ぎませんが、能くも穿つた話でありまして、また、佛が吾れ〳〵に對して慈悲を垂れてくださる狀態を知ることが出來ます、そこで、佛の前には貴賤の差別もなく、貧富の區別もありませぬ、賢いとか、愚かなとか云ふことも無い、同じく自分の生み落した子供ですから、佛の前には華族も平民も同胞であり、賢いものも愚かものも同胞であります、イヤ、華族と平民と賢者と愚者とが同胞であるばかりではありませぬ、一切生きとし生けるものは、皆な同胞であります、佛の聖語に一切の生きとし生けるものは、皆なわが子であると仰ふせられました、古から隨分聖人君子も出られまして、種々な難有法門をお示しくだされましたけれども、一切の生きとし生けるものは皆なわが子であると仰ふせられました程の尊い聖語に及ぶものはありますまい、此の聖語こそ空前絶後の難有いお言葉であります、してみると、こゝで、一番考えてみなければならぬのは、一切の生きとし生けるものが皆な佛の御子であるならば、人間お互が同胞であるのみならず、その他の生きとして生けるもの皆な同胞であるから、此の同胞の間には吾れ〳〵の母親たる佛の御心にかなはぬやうなことを致してはいけないことです、同胞喧嘩も無論母親の氣にかなふたことではありませぬし、また同胞相害すると云ふことも、猶更母親たる佛のお心にかなつたことゝは申されませぬ、これが此席で篤と御承知を願つて居きたいのであります、古より佛敎で殺生を誡しむるのは、只今までお話し申しました通りて、佛の御前には皆な同胞の關係であるすでに同胞である以上は、他人にさへも慈悲なさけと云ふものはあるのですから、同胞のものが互に相害すると云ふことは、無論行れるものではありませぬ、然るに我國では、維新以來、耶蘇敎も入り込みましたけれども、大體から申せば、先づ佛敎國と申さなくてはなりませぬが、その佛敎國たるわが國には、自分の家業を助けて呉れる、牛や馬を使ふに隨分無理非道なことを行ります、使ふ人は別段に惡いとも考えないでせうが、少し考えを廻らしてみれば、そう無理非道に使はれるものではありませぬ、殺生と申せば生きて居るものを殺すことのみが惡るいやうに聞えますが、その土臺は、慈悲にあるのですから、牛や馬を無理非道に使ふのも惡るいであります、佛のお心に違つ

たことであります、此れは皆さんが、平生少し御注意をなされば、充分に實行ることです、

昔、源平時代の頃に、畠山重忠といふ人がありました、却々勇氣な人でありましたが、平家を攻め落す時分に、彼の嶮しい鵯越を下つたことがあります、その時に、畠山重忠は自ら馬を負ふて下つたと云ふことがあります、此の話は些々たる話のやうでありますが、如何にもその人のなさけ深いことが、能くあらはれて居ります、時によつては、鬼をも殺すと云ふ人が、一時には馬を負ふて嶮路を下るとは、いかに優にやさしいものではありませんか、さて、しからば、今日の我國の狀態はいかゞと申せば、前に申しましたやうに、自分の生活を助けて呉れる牛や馬を虐待するとか、また一方には紳士とかなんとか云ふ人々は、自分の樂みのため獵りをするとか、實に無慈悲極る社會ではありませんか、生き者を殺して樂むよりも殺される者をも助けた方が一層の樂みではありませんか、此の生き者を殺すのが樂みである風が、鳥獸に止つて居るならば、まだしもの事であるが、此の風は次第に社會人類の間に及ぼしまして、世の中が次第に殺伐になつて來るので、遂には自分の利害のため、自分の樂みになることなら、親兄弟も慮は無いと云ふことになりまして、世の中は全然惡魔の世界になり、冷かなる氷の世界になるのであります、此れでは、如何に文明であらうが、開化であらうが、何にも名譽とするには足りませぬ、ダムロカと云ふ人が「眞の文明は慾情を制し慈悲の心を養成するにありて存す」と申しましたが、實に尤もなことであると思ひます、生きたるものを殺すな、生たるものを苦しむるなと申せば、陳腐なことのやうにあるけれども、これこそ、佛のために皆なわが子であると呼ばれました所の吾れ〳〵お互の行ふべき道德の大本でありまして、すべての善行は皆な此の殺さない、苦しめないといふ溫き慈悲同情のあらはれに過ぎませんから、佛の御心にかなひ、人の入たる本分を盡し、眞箇の文明に進んでまゐりたいと思ふ吾れ〳〵は、たゝ寒暑を防ぐの衣服を着、起臥をする住家があり、生命を繋ぐ食物がある以上に、此のやさしい心を有つて戴きたいものでありますから、何卒、このお心掛けを希望いたすので御座ります、

第三席

第二　不偸盜戒

サテ、世の中に私共の使つて居る言語は隨分數多いものですが、その中で、泥棒とい

ふ言葉程、厭な語は先づ少ないのてありませう、所が、かやうに厭がらるゝにも拘はらず、濱の砂子は盡くるとも盜人の種は盡きないと申しますが、一躰如何なる譯てありませう、今、私はかやうな事に就て、學問の方から、種々研究することは止しにしまして、兎も角、此の事實がある以上は、如何なりともして、出來得るだけ減少するやうにせなくてはなりませぬ、それに就て、國には法律といふものがあつて、それに種々なる機關があつてその方法を講じて居りますが、成程、法律も必要てある、また法律の力を假らなくては出來ない場合もありますが、しかし、一言て申せば、法律は外部からの制裁てあるし、また事後遷善の方法てありまして譬へて申せば、こゝに一つ大いなる濁りに濁つたる川があるのに、その源の如何は兎も角として、川尻の方て種々として水を澄せやうとするやうなものてあります、そこて、折角の方法も割合に効能が無いやうてあります、そこて、此の社會を立派にして行くには、是非とも、その流れの源をきよめなくてはいけないのであります、此れを行るには宗教の力によるより外はありませぬ、宗教と申せば却々範圍が廣いてすが、今、われ〳〵の信じて居りまする佛教では如何てあるかと申しますするに、何時もお話しいたしまする通り、世にありとあらゆる罪惡の根本は、貪瞋痴の三毒てあります、貪といふのはムサボルことで自分の好む所のものを多く得やうとする心、瞋といふのはイカルことて自分の好まないものを斥ける心てす、さて、その次の痴といふのは、元來、吾れ〳〵の心は明皎々たる鏡のやうなものであるけれど、一つ自分の好むものを映して居るものてすから、如何しても、ありまゝの相が映らない、そこて正しき道理を見ることが出來無く、これが痴てあります、此の三毒位に世に恐るべきものはありますまい、所が、更に一段深く立ち入つて考えてみれば、此の三毒の奥に何物かゞ一つ潜んで居るやうてす、それは何でありませうか、外てはありませぬ、我といふ奴てす、我れ、己れといふ執着てす、我が好かぬ、我の氣に入らぬ、我の思ふ通りにならぬ、我れのものにしたい、我のいふことを聞せたいといふのは皆な此の我てあります、此の我が〳〵といふ考さへなければ、皎々たる心の鏡には曇りなく、ありのまゝに映るのてあります、たゞ此の我といふ雲霧が深く鎖して居るものですから、ありのまゝに映すことが出來ないのでは殘念なことではありませんか、今、特に偷盜と申して他人のものを盜むといふことに就て考えてみますと、一層此の我といふものが、吾れ〳〵の本心を昧まして居るといふことが解ります、一體お互に、吾れ〳〵人間といふものは、因緣所生て、過去の因緣に由つて此の世に生を受けたものので、譬へば、大海の中の泡みたやうなものので

あつて、時節到來すると待てしばしは無い、應否は無い、ひきよせて結べば柴の庵なりとくればもとの野原なりけりで、權兵衛も八兵衛も差別は無い、貴賤も貧富も區別は無い、皆な同一法性の大海に歸して仕舞ふので……、元來が同一法性の權兵衛なり八兵衛なり、華族なり平民なりであつてみれば、何んにもお互に角を生やして他人の物を奪ふとか、盗まうとかすべき道理は無いのであります、然るに無明妄想のために、此の道理が解らねものですから、權兵衛は權兵衛で百年も千年も二世も三世も依然としてあるものである、華族は華族で千代に八千代に華族であるといふ考えを起して、泥棒しても此の權兵衛や八兵衛自身を富ましたいといふことになる、實に能く〳〵考えてみれば馬鹿氣切つたことではありませんか、彼の石川五右衛門は、此の世を去る時分に何を所有つて行きましたか、鼠小僧は何を携えて行きましたか、佛蘭西皇帝ナポレオンは如何でした、秦の始皇帝は如何でありました、死ぬる時の荷物は、貴賤貧富の差別もなければ賢愚利鈍の區別もありませぬ、皆な同じ荷物であります、その荷物は何かと申せば、業といふ荷物です、業といふものは、譬へて申せば、人間といふ旅舍の精算表であります、人間最後の斷案は此の精算表の如何にあるのです、如何でせうか、人間といふ旅舍に滯在して居りながら、他の客人の物品を盗んだり、或はその旅舍の物品を盗んだりしましたならば……一人前の待遇を受くることは到底出來ないのみならず、可成人の目に觸れないやうに、椽の下か床の下に苦しい暮しをして、さていよ〳〵旅舍を出ねばならぬと云ふことになれば、無論立派な精算表がある筈は無い、闇より闇に入るのみであります、そんならば如何したなら、此の人間といふ旅舍で一人前の待遇を受け、猶ほ此の旅舍を出る時分に立派な精算表を得ることが出來ませうかといふに、布施といふこと行るのであります、布施と申しますれば、檀家や信徒のお方がお坊主さんに上げることのやうにのみ聞こえますが、それも無論布施でありますが、實はそれよりも餘程廣い意味でありまして、ホドコシといふことです、

一體ホドコシと申せば、世間では直に何か品物を遣ることのみのやうに聞えまして、ホドコシなんかは、吾れ〳〵の身分では到底出來無い、そんな事は財產家のお方〳〵がやることであると申す人がありますが、それは大いなる了簡違ひであります、此の世の中は御承知の通り、何か彼か不足の多いものであります、その不足の多い世の中で都合よく世渡りをして參りまするには、一人や二人の施しでは到底駄目であります、畏れ多くも、上は一天萬乘の大君より、下は九尺二間のわび住居にいたるまで、すべ

ての人が此の施しをやらなくてはいけませぬ、結局此の世の中は施しの仕合てあると思ふて居なくてはなりませぬ、此の心を以てすべて自分の職を行りますれば、世の中は極の立派になつて參ります、今一二の例を擧げてみますると、

政治家と申しまして、出家の政をいたして行くものは、立派な政治をいたして行くのは、政治家の職分として左樣に無くてはならぬことて、政治家自身の方から申せば、只自分の職責を盡す丈のことですが、それがそのまゝ仁政を布き德を施すといふのですから、布施即ちホドコシといふことになります、華族さんて申せば、皇室の藩屏と申して、上皇室のために忠義を盡し、下人民のためには模範となつて行くのが、ホドコシなのであります、立派な別莊を拵へ妾の三人も五人も蓄へて、ブラ〳〵として此の世を送くるのは、華族の名目だけて華族の實が無いのであります、農業や商業をする人てあるならば、眞面目に農業を行り商業を行るのてすが、そのまゝ布施てあります、農業をする人を百姓と申して、何となく世間ては卑んて居りますが、此は大いなる誤解てありまして、私は百姓のすることは實に尊い事て大いなる布施てあらうかと思ひます、何故であるかと申しますれば、人間て必要なものと云へば、數多いことですが、その中て尤も必要なものは、何てありませうか、無論それは食物てありますす、此の大切なる食物の原料を與へて居るものは百姓ではありませんか、或人がかういふことを云つた、華族さんやなんかゝ夏の土用になると熱い〳〵と云つて涼しい地方へ避暑旅行をするが、全國の百姓が皆んな華族さんの眞似をいたして避暑旅行をしたならば、吾れ〳〵は飢えるてあらう、有難ものは百姓てあると申しましたが實にさうてあります、夏の炎天、九十何度といふ時に、汗水を流して、水車を踏み、田の草を取て呉れなければ、實に吾れ〳〵は飢へなくてはならぬ、してみると、農業をして居るお方は皆な布施をして居らるゝので、全國のものは、百姓のお方から皆な布施を頂戴して居ると云はねばなりませぬ、その他、何れの職業をなさる御方でも、眞面目に自分の職業を努めなさるれば、一方に知らず〳〵布施をやつて居るのであります、

私は前に泥棒といふ語は吾れ〳〵の使ふ言葉の數多い中て、尤も厭な語であると申しましたが、それと反對にホドコシといふ語は非常に尊い語てあります、此に就て思ひ出しまするのは、先年亞米利加てあつて事てあります、今それを一すお話いたしませう、それは、先年、亞米利加のミスシッピー河が大洪水て、その河の近所近邊、非常の水害を被りまして、家を流されるやら、田畑を洗らはれるやら、命を失ふやら、却々悲慘なるものてありましたから、平日でさへ多忙てある電信局てすから、東に西に電

報を依頼する人が多いので、なか〳〵の混雜である、混雜は混雜てよいが、だん〳〵水が增して來まして、電信局にも水が攻め込んで來た、所が、その中で、一人の技手は平然として依頼して來る電信を取次て、これを彼地此地に打電して居りましたが、猶ほも水は增して來るので、遂には、技手の腰まで來ました、モー斯樣になつては致方が無いといふので、局內の人は皆一生懸命で逃け出した、けれども、一人の技手は猶ほも平然として事務を取りて、結局水が肩まで來た時に「イマウシス」と打電して遂に水のために溺れて死したといふ話がありますが、これは却々非常な場合のことてますから、平日の標準とはなりませんけれども、此の人の心にある所の、自分が職をつとめるのは只金錢のためては無い、幾分か世の人のためにならなくてはいけないと云ふ觀念を鑑みて、すべての事に當りさへしますれば、勞力に逐ひつく貧乏なして、何も人に嫌はれ、自分の罪過を增す泥棒などをやらなくても、今日〳〵の生活も次第に樂になり、人の信用も出來て來るし、今迄は苦しいと思つた世の中が、何となく面白い世の中になり、知らず〳〵の間に人のため社會のためになるのてすから、布施の行ひが出來て、此の世のみの安樂ではなく、生々世々の善根の種を蒔くことが出來るのてあります、泥棒をなさるなど云ふのは、皆さんに對しては、釋迦に說法と云ふやうな工合てありますけれども、同じ泥棒をせない、職務を努めると云ふに就ても、佛敎の道理を聞いてみますると、一層愉快に面白く行ることが出來ますから、大畧、此事を申し上げたのてあります、

第四席

第三　不邪婬戒

サテ、世間て能く「家」といふことを申しますが、一体、家といふものは、如何なるものでありませうか、或る人は、それは家屋てあると申しませう、成程、家屋も家には相違ありませぬ、しかし、世間ては隨分借屋住居、長屋住居といふものがありまして、殊に世の中が進んて生活の度が高まるといもに、かやうな種類の人は多くなるのてあります、所が、かやうに借屋住居をし長屋住居をして居つても、立派に一家を成して居る人が多くござります、してみると家といふ眞實の意味は家屋といふのではあるまいと思ふのてあります、また、或る人は、家といふのは家產のことをいふたのであると申します、成程、そうかも知れませんが、しかし、家產と申す所の家附の財產が無くても月給取や日傭取ても立派に家を成して居ります、かやうに次第に考えて見

ますと、すでに、家といふことは家屋でもなければ家産でも無いことが解りますが、結局、何を指して家といふのでありませうか、私は家とは夫婦の生活を云ふのであらうと思ふのです、世間でよく家を持つと申しますが、男であるならば女を迎へて夫婦の生活をなすことであるし、女であるならば、男を迎へて夫婦の生活をするので、家屋とか、家産とかは必要には相違ありませんが、家といふ眞實の意味は夫婦の生活を云ふのであります、此の家の集合したものが國家であるし、社會であるのであります、してみると國家と云ひ社會と云へは、大變仰山らしくございますけども、これを縮めてみると、家即ち夫婦の生活であります、否、社會や國家の本も無論夫婦であります が、此の吾れ〳〵を覆ふ所の天も、載する所の地も、大いなる夫婦でありますまいか、古より此の天と地との德を以て能く夫婦の德に配合してありますが尤もなことだと考えます、更にこれを佛敎の戒定慧の三學に配ますると、男は慧が勝れて居りまするし、女は定が勝れて居ります、そこで近古の大德であつた慈雲律師はかやうに仰ふせられました、

經の中に男子は慧が勝て定が劣る、女子は定が勝て慧が劣るとあり、天の德を全せる姿のもの、これを無流聖道に用ふれば慧となり來る、地の德を全せる姿のものこれを無漏聖道に用れば定となり來る、定慧は元來不二なるものて慧のある處は必ず定が隨ふ、定のある處は必らず慧が隨ふ、男子が慧力を滿足すれば定慧增長して無漏智見を得、女子が定を滿足すれば、定慧增長して無漏聖道を得、

成程、流石は慈雲律師てあります、能く欠點と長所を擧げて居らるゝ、これて見ますと、此の社會が男子と女子との調和によつて成立するばかりては無い、此の佛敎を信じて實踐して行くにも、女子は自分の長所を充分に發達すべきは無論のこと、一方には男子の長所を考えて自分の短を補ひ、男子もまたそれと同じく長を助け短を補ふといふ工合にして行かなくてはなりませぬ、眞諦門から見ましても、俗諦門から見ましても、正しき調和をせなくてはなりませぬことは、實際に照し經論の上てみましても明かなことてあります、所が、如何てせう、一朝此の間の調和が破れて、女子は男子を輕んずるとか、男子は女子を虐待するとか、男子は情慾を滿たすために妾などを蓄ふとか、女子は道ならぬ交接をするかと云ふことになりましたら……是れ實に男子や女子の一個の身の上の恥辱てあるのは、無論てすが、延いては、國家や社會の盛衰に影響することになります、一躰、我國は從來外國などに比較をいたしますると女子のことには餘り重きを置かなかつたので、殊に佛敎ても、多くは支那の風習や學

說のために僅に、小乘て談ずる女人の欠點のみを擧げて、大乘眞實の女子に對する敎は世間に知れなくて居つたのであります、そこで、世間には佛敎信者は妾を蓄へても差支は無いのであらうなどの間違つた了簡を起して居るのが尠くないのであります、是れは、實に歎ずべき事柄であります、そこで、少しは煩雜になりますが、私は此れから、夫婦の守るべき佛の御敎訓を大略お話し致さうと思ひます、「六方禮經」といふお經の中に夫の心得ふるべき五ヶ條を擧げて、

(一)には出入當に婦を敬すべし

(二)には之に飯食し時節を以て衣被を與へよ

(三)には金銀珠璣を給與すべし

(四)には家中のあらゆるもの悉く用ひて之に付せよ

(五)には外に於ては邪に傳御を蓄ふるを得ず

と誡められました、此の箇條を標準としてわが國の現狀に照して見ますれば、如何でありませう、五ヶ條中て、第二第三第四は可なりに行はれて居るてありませうが、婦に對する敬を以てする人はありませうか、婦を愛する人はありませうが、敬する人は尙に少ない、所か、敬と愛とは車の兩輪、鳥の兩翼のやうなもので、敬を缺いた所の愛は痴愛で夫婦の別を紊すやうになるし、愛を缺いた所の敬は、溫き所が無い、夫婦相和樂して而も亂れないといふのには、此の敬愛の二が平均を得なくてはなりませぬ、

次に、第五條目の外に傳御を蓄ふるを得ずとありまするが、今日は、身分が高ければ高い程、妾を蓄ふることが盛んてあります、華族とか紳士とか云ふ人々は、大抵、此の敎に背いて居る、否、華族や紳士ばかりではありませぬ、信徒の眼からは活如來とまで尊崇されて居る人が、隨分聞きぐるしい風評を立てられて居りまするのは、實に恥つべき次第であります、

それから、婦が夫に對する心得は、是れ亦五ヶ條あります、

(一)には、夫外より來れば起つて之を迎ふべし

(二)には、夫出て在らざれば當に炊蒸掃除して之を待つべし

(三)には、外に婬心あるを得ず、夫のよし罵るとも色をかへて言りかへすを得ず

(四)には、夫の敎誡を用ひ、所有の什物は藏匿することを得ず

(五)には、夫休息すれば盖藏して臥することを得

と仰ふせられました、此の中て、第一第二第三第五の敎は、大抗實行されて居りませうが、第四のお誡は如何てありませう、日々の新聞を見て居りまするとと、一日として

此等の事が載つて居ないことはありませぬ、やれ、彼の男と女とが姦通をしたとか、其所に夫婦喧嘩があつたとか、何んだとか、かんだとか、隨分種々の罪惡が造られて居ります、多くの人は新聞等の記事を讀みまして、面白がつて居りますが、私は實に歎息に堪えぬのであります、それは、道ならぬ交接をするとか、喧嘩口論をするのは、その夫も婦も惡るいのは無論ですが、それが延いて社會の興廢、國家の盛衰に關するからであります、何故かと申しますと、家庭は一種の學校であります、第二の國民を教育する教場で、夫婦は子に對すると教師であります、ミヲーといふ人が「家庭は眞學校、眞の大學で、兒童の品性は此中に養はれて、その父母より受けたる感化は、生涯拔くことの出來ぬものである」と申しましたが洵に知言であります、學校の教師が教場で千口教えるよりも、家庭で平日見聞する所の感化が餘程大いであります、此事に就て私の友達である小學校教員が面白いことを話されました、

それは、その教員が或る時のことに、作文をさせましたさうですが、小學校のことですから、文題は無論易いのでありまして、その時の題は「烟管」と云ふのであつた、此れは平生見聞して居りますから、大抵出來たやうですが、その文が種々で、或は「烟管は竹と金とでこしらへたものでお父さんが煙草を吸ふものである」とか、或は

「お父さんの腰につけて行くもので竹と鐵とでこしらへてある」とか、書いたので、小學校の二年や三年では可なりの成績である、所が、中に二三人の生徒は「烟管は竹と金とでこしらへてお父さんがお母さんをなぐるものである」と書いたのがあつたので、餘り面白いから、それとは無しに、家庭の樣子を聞いて見ると、成程、その家庭は烟草を吸ふよりも夫婦喧嘩の方が多いとのことであつたと、面白半分に話しました、これは笑談として聞けば、それまでゝすが、この話で以て、家庭の感化が如何に大いなるかといふことが解ります、そこでありますから、夫婦互にその道を盡して行きますのは、夫婦として歡ばしいのみならず、子供に對しての大いなる教育であります、昔から賢人君子とか、忠臣義士とかいふ人々は、内助と申して大半は婦の力に依つて名譽を擧げて居ります、その一例を擧げてみますれば、山内一豐の妻の如きは、それでありませう、

山内一豐は織田信長の家臣でありまして、最初は僅かの俸祿で夫婦暮してありますから、隨分つらい生活をして居りました、所が、或時の事に、馬商が關東第一の駿馬といふのを織田家の家臣に賣らうとしましたが、皆なあつばれの名馬であるとは賞しましたが、名馬のことであるから無論高價であるので、誰れも買ふものがありませぬ、

そこで馬商は空しく歸らうとすると、一豐は例の貧乏のことであるから、買ひたくはあつても、買うことは出來ないし、打ちしほれて家に歸へりまして、愚痴をこぼしまするとと、女房は、此を聞いて、左樣にお氣に召したならお買ひなされ、その金錢は妾が參らしますと、何程でありますかと、鏡奩の底から黃金十枚を取り出して夫の前に置きこれは、たゞ夫の身の上の一大事があつた時に用ゐよとの仰ふせて、年來の貧乏も忍びに忍んで來ましたが、只今のお話てある名馬は、功名を立てたきう道具で、これを買うことは武門の面目一家の名譽てありますからと申しましたので、一豐、一は驚き一は喜び、直にその名馬を買ひ求めました、その後、幾くも無くして、織田家の家臣の馬揃がありましたので、柴田、佐久間、丹羽など申す重臣より、下は一豐如きものまでの馬を悉皆揃へて品評いたしましたが、中に於て、一豐の馬は東國第一の名馬てござりますから、信長公も不當に思はれて、事の仔細を問はれましたので、前の事柄を申上げまするとと、信長公大に感じなされ、かれほどの名馬を、我が家來の中に買ふものがないとは、武門の耻辱であるのに、貧しき中にも拘はらず買ひ求めたのは、その心も推して知らるゝとのことて、此が因緣となりて、次第に重く用ゐられ、後には二十四萬石の大名になられました、一豐も一豐てすが、それを助けて成効させたものは此の婦人てあります、その他、昔も今も此れに類したことは頗る多いのてあります、何卒、世の婦人方特に、佛敎を信ずるお方〳〵は前にも申しました、佛の御敎訓を胸に置かれ、また、男子がたも、かの敎訓に照して、家運の盛々を圖るのは無論のこと、延いては風俗の紊れたるを匡し、社會の進歩、國家の隆運を助けて行かんことを希望いたします、猥りに女權を振り廻はして、突飛な議論をなすよりも、婦人は婦人の特色を發揮なされて、人生の花となつて、此の世の中に趣味を與へ、愉快を與へられまするならば、女權の擴張も自ら出來て、天は天の德を全ふし、地は地の德を全ふして、人間萬事圓滑に行きまして、苦しいと思つた世の中が、意外に面白く世渡りをすることが出來ます、此點は返へす〳〵も御注意を希ふのてあります、

第五席

第四　不妄語戒

世の中のことを能く〳〵考えてみますれば、昨日までは血を分けたる兄弟も及ばぬと云ふ間柄てあつたのが、早や今日は仇敵の間柄となつて居る、今朝頃の話には共に俱に手を携えて事を行らうと云つて居つた人が、早や夕方には反目敵視すると云ふやう

な事は尠くないことてあります、所がかやうになると云ふものは、何に原因するかと申せば、それは種々ありませうが、多くは僅かの事の行違ひから大變の事になるのてあります、此の人間社會といふものは、醫へてみれば、極巧みなる器械みたやうなものてありますから、機關に異狀がない限りは、洵に巧妙にすべての事が圓滑に行くのてありますが、一朝何處かに異狀を生ずると、すべてが面白く行かないので、實に世の中は面倒なものてあります、そこて、此の世の中を可成平和にして安樂に送らうと思ふなら、可成器械に異狀を起さぬやうにして行かなくてはなりませぬ、しからば、如何にすれば宜いかと申しますると、妄語を吐かぬことてあります、妄語を吐くのは、世間ても惡いとは認めて居りますが、左程大きな罪惡とは思はない樣てありますが、此は非常の考え違てあります、此を小い上て申しますれば、箇人と箇人の間柄より、家と家との間柄、進んては國と國との間柄にいたるまで、反目敵視するのは、多くは三寸の舌頭にあるのてあります、仰山なこともあるまいと思つて、その塲ックロィに虛言を吐く、さて一方に虛言を吐いてみると、今度は、その虛言を眞實らしくせなければならぬのて、他の方にも虛言を吐く、かやうにして遂には、双方の喧嘩となり、不和となり、結局は血を流すと云ふやうな事も尠くないのてあります、佛陀が此の戒をお說きなされたのも尤もなことゝ考えます、

此に就て、『正法念經』の中にお示しくだされたのは、實に適切な御敎訓てありますから、大略お話いたしませう、そのお語は、「甘露と及び毒藥とは、皆人の舌の在り、甘露とは實語の謂にて妄語は則ち毒となす、若し人甘露を須ふれば、彼の人實語に住す、若し人毒を須ふれば、彼の人妄語を說く、毒は決定して死せざれども、妄語は則ち決定して死す、若し人妄語を說けば、彼れ死人と言ふことを得るなり、妄語は自らをも利せず、亦他人をも益せず、若し自他樂しからざれば、云何ぞ妄語を說かん」とあります、實に痛切な御敎訓てありませうか、今日、社會の現狀を見てみますると、死人が澤山あります、而して、その死人と云ふのは、毒命が絕へたと云ふのては無いのてありますから、無論、食物も食るし、衣服も着るし、住居もあるのてすが、只それだけの事て、社會に信用が無いので、世間に活動をして世を利するなどと云ふことは、無論出來ないのみならず、兄弟親戚にいたるまで信用がないので、僅に口蔭者として生存して居るのみてありますが、此等の人は一種の死人に相違ない、さて、しからば、此の死人は何に原因して居るかと云へば、多くは虛言を吐くからてす、此れは理窟や道理よりも、實際吾れ〳〵の見聞する所の事て解りますから、「若し人妄語を說けば彼

れ死人と言ふことを得るなり」との仰ふせは、吾れ〳〵の世に處して行く上に於てす時も忘るべからざることであります、殊に實業などに從事して居るお方は、一層此の點が必要であります、近年、經濟界は到處不景氣の聲で滿されて居りますが、或る經濟學者は、今日の不景氣の原因を論じて、信用の頽廢ちやと云はれましたが、實にその通りで、實業の進歩といふ者は、信用の厚薄によるもので信用がなくては、預け主は銀行を疑うし、貸主は借主を疑うし、株主は會社を疑ひ、會社はまた其取引を疑ひ、金錢を代表すべき約束手形のやうなものまでが、全く其用を失ふやうになつては事業といふものゝ發達すべき道理が無いのであります、彼の經濟學者として有名なるコッカロッシといふ人の語に、信用は一の資本なりといふことがありますが、實に尤もな語で、信用の無いのは資本の無いのであります、資本の無い實業は無論發達すべき道理がありませぬ、それに、此の頃の實業家を見まするとまこと實に途方も無い了簡違をしてゐります、先頃も或る所での話に、商業を行るには半分は資本で半分は虚言で行くのである、此の虚言をやう云はぬやうなものは、到底大いなる商業家となることは出來ない商業の掛引といふものは、虚言をいふのである、此の虚言を上手にいふのが眞の商業家ちやといふた人があります、ナント呆れる話ではありませんか、コンナ覺悟で實業に從事するから信用が無いのであります、信用の無い事業は如何にしても、發達すべきものではありませぬ、信用さへあれば、よし目前の利益は少うござりましても、終には大利益を得るに至るものであります、只目前の利益に迷ふて虚僞の行ひをするのは實業社會の大害毒です、或る商人が、その子を戒めました語に、商人は底なき柄杓で水を桶に入る、樣なもので、底の無い柄杓であるから、一滴位しか入らない、併し休まずに入れてをると、一滴二滴また三滴と、ポトリ〳〵と落る水も終には桶一杯になる、それに反して柄杓の底に注意して底のあるのを用ゐても、肝心の桶には底が無いとすると、何にもなるものでは無いのであるが、今日の商人は、目の前の柄杓に底のあることを知つて、可成大いなる利益を得やうと考えて居るのみで、信用と云ふ根本が無いから、丁度底の無い桶に入れて居るやうなものであると云つたと云ふことであります、これは、實業家の地方は平生始終胸に記して置いて貰ひたいことです、かやうに貴重なる信用は、理窟や道理で得らるゝものでは無い、日用の言語の上の注意に依るものであります、さてまた、これを宗教の上でみましたなら如何でありませう、佛は我が法は如實語である眞實語であると仰ふせられました、して見ると佛教の尊いのは何であるかと申せば、虚妄で無いからである、即ち妄語で無いからである、

宇宙の實相そのまゝをお說きなされたからであるのであります、宇宙の實相そのまゝと云ふのが即ち不妄語であると申すことは、餘程御注意を願ひたいのですが、これに就いて面白い話がある

それは、昔、或る人が禪宗坊さんの坐禪と云ふものは如何なるものであらうかと云ふ問に答へて「坐禪せば四條五條の橋の上行き來の人を深山木に見て」と云はれたそうですが、四條五條といへば、京都で尤も繁盛な所であります、そこに坐禪をして少しも心を動かさず、行き來の人を深山木に見るのですから、實にエライ感心です、所が、或る人が此を聞て、成程ウマイことはウマイが、若し自分であつたならば、「坐禪せば四條五條の橋の上行き來の人をそのまゝに見て」と云ひたいと云はれたと云ふ話があります、此れはまた一段ウマイと思ひます、世の中に處するにも、佛法を信ずるも、何れにしても、行き來の人を深山木に見なくとも、その物の通りにありのまゝにさへ見れば宜しいのであります、君を君と見て忠節を盡し、父母を父母と見て孝を盡し、社會を社會と見て世の爲めに盡して行きましたなら、天下は泰平、國家は安全であります、そのまゝ不妄語の當躰です、佛法廣しと雖、教義多端でありますけれども、此の不妄語の一戒に攝するとが出來ます、そこで些細な處を申しますると、われ〳〵お互が日用の上より、高いなる所に行きますると、悲智圓滿の佛果の境界までを盡し、廣い所で申せば、天に在ては森羅、地に在ては萬象、皆な悉く不妄語の當相であります、すから、何卒、一言一句といへども、眞理に背いたことゝか、人の不爲や世の害になることを避けて、お互に、此の不妄語の德を全うしたいものであります、

第六席

第五　不酤酒戒

サテ、此の酒と云ふものは、昔から隨分議論のある物でありまして、一方の人が酒は百藥の長であると隨喜讃歎をいたします、すると一方の人は、イヤ酒は罪惡の根本である、杯に手を觸れるのもまた罪惡であると排斥する人があります、此に就ては、私の考えては、すべて物には利害得失の兩方面があつて、しかも此の兩方面は相伴うものでありますから、能く〳〵此の兩端をたゝいて、利と害と得と失と何れが多きやと云ふことを考えてみなければならぬことだと思ひます、今、此の酒に就て申せば、或る場合に適度に用ふれば、百藥の長とまでは行かずとも、多少衛生になることもありませう、此の點から申しますると、絕對的に排斥するには及ばぬやうですが、世間で酒を飲む

といふのは、かやうに藥用として用ゐるのは、至極僅かの部分でありまして、九分九厘までは娯樂のために用ゐて居るのであります、娯樂と申せば、これも世間では、絶對的に排斥する人もありますが、世の中に處するには多少の娯樂がなくてはいけないのですから、娯樂は強ち惡るいことではありませんが、たゞその娯樂に酒を用ゐるのは如何であるかと云ふことであります、そこで、此の酒といふものは、如何なる害毒があるか、如何に罪惡の媒介をなすかと云ふことをみなければなりませんが、先頃まで警視廳の警察醫長をして居られた山根醫學士は、餘程、此事に就て研究して居られまして、大に信用するに足るものですから、今、同氏の話を參考として、大畧をお話いたしませう、

先づ此を衛生上から申しますと、酒を飲むと『疾病性酩酊』また『酒醉』とも『酒狂』とも稱する一種の病氣を惹起するのでありますが、猶ほそれのみならず、種々なる病氣の原因となるのであります、人間で恐るべきものは、病でありますが、その病の中でも、『疾病性銘酊』などといふやうな恐しい病の原因となる以上は、自ら好んで病を求める人で無いならば、酒は飲むべきものでは無いことは、無論のことであらうと思ひます、

かやうに諸種の病氣を惹起す原因となるのみならず、また諸病を惹起す媒介となるのであります、先づ重なるものを擧げてみますると、下痢病、梅毒など申す所の花柳病は大抵酒の媒介であります、一杯また一杯で、杯が重ると、平生は至極僅直な人でも、精神に異狀を來して、遊廓に飛び込むとか、婬賣屋に引込まるとかで、平生は身慄ひをして居つた所の花柳病を自分から背負込ことになります、統計によつてみますと、梅毒患者の十分の七までは酒飲みのやうであります、梅毒なんかと申しますれば、かゝる病氣に罹ることは、箇人としても、非常に恥づべきことでありますが、此を國家の上より見ますると、青年壯年の間に此の病氣が盛んになると、國家の元氣が自然に衰へて來る、殊に國家の干城となるべき軍人の間に盛んになると由々しき大事であります、この點から申せば、私共は、彼の土耳古人をエライと思ひます、土耳古では、宗教の禁制を能く守りますから、酒は一滴も飲まない、宮中で何かの儀式があつても、外國人には酒が出るが、外には出てないやうすです、そこで、風俗を害することも無く、道德が能く行はれるものですから、軍隊などにも決して花柳病といふものが無いので、軍人の勇壯なること、身躰の立派なることは、他國の人が羨む位のやうすであります、我國の武勇は世界に聽いて居りますが、此の禁酒の美風が行れたならば、猶

ほ一層國威を揚ぐることが出來るてありませう、

更に此を犯罪と云ふ上から申しましたならば、先づ東京に就いて申せば、三分の二は飲酒家であるといふことです、實に夥しいものではありませんか、犯罪と云へば、たゞ、その人一人の利害得失のやうにありますが決してそうではありませんので、結局、國家の經濟に大いなる影響を及ぼし、延いて國人全般の厄介になるのです、

猶ほまた此を他の方面より考えますれば、折角人間と生れながら、一人前の人間として生存するこの出來ない聾唖白痴と云ふものは、實に可愛想なものですが、此等の人は多少は遺傳に由るのですが、比較的飲酒家の血脈に多いといふことです、自分の利害も兎も角としても、不幸を子孫までに殘すとは、實に殘酷なことだと考えます、子や孫のことは關せないといふならば、いざ知らず、多少子孫の利害を心に掛くる以上は、是非とも禁酒をやらなくてはいけませぬ、

かやうに、衛生上より申しても、國民元氣の消長より申しても、また、犯罪の媒介とか、國家全躰の經濟とか、子孫の不幸とか申す種々なる方面より見ますると、或る場合に藥用として用ゐる外は百害あつて一利なしてあります、此等の現實の事實に照しまして、佛の陀ゝ誡めの難有ことを益すゝ〳〵成ずるのですが、今、大略、經說の上の

御敎誡を擧げて見ますと、『正法念經』の中には、飲酒に三十六種の過失あることを示されてあります、それは、

一には盜財散」二には現に疾病多し」三には鬪諍を興す」四には殺害を增長す」五には瞋恚を增長す」六には多く意を遂げず」等て、今、一々擧ぐることは止しますが、要するに所有罪惡の媒介をなし、肉躰上精神上の健全を害することは明白なことてあります、

して見ると、吾れ〳〵は斷然禁酒を行らなくてはなりませんが、佛陀は、更らに不酤酒と云ふことをお示しになりました、自分の飲むのが害てあるとずれば、それを知りつゝ酤ると云ふ筈は無いのてす、こゝが特に御注意をして貰らひたいのて、佛敎信者と云ふものは、寸時も利他といふことを頭腦から離していけないのてすから、酒を飲む飲まぬは、一人の利害てすが、酒を酤るとなると廣く罪惡の媒介をなすことになるのです、即ち利他と云ふ根本義に相違して來ます、酤るといふ以上は、是れ亦た一種の職業てあるから、已むを得ないといふ人もありますが、成程職業に相違はありませんが、世の中は廣し事業は多い、酒を酤らなくては生活が出來ないといふのても無いのてすから、その人の決心次第ては、他に職業は隨分あるのてあります、かく申せば、

非常に極端のやうてすが、現に米國のメイン州、アイオワ州の如きは法律を以て、酒類の販賣を禁じて居ります、我國でも此の意見を持つて居る人が尠くありませぬのです、

所で、かくは申すものゝ、社會一般の風習とか、個人〳〵の習慣嗜好といふものは、一朝一夕には斷然止すといふことは、却々困難てす、此の困難な場所を踏み切つてやるのが必要ですが、それが出來ないとすれば、一歩許るして、多量の酒を用ゐる人は可成次第に減じて、或る人が云つたやうに、「面白の酒宴や本心を失はぬほど」、と云ふ位にして慎み、飲んでもよし飲まんでもよいといふ程の人は、それこそ斷然禁酒をいたし、まだ此の習慣のない青年の人々は、斷じて此の習慣をつけぬやうにして行きますれば、自然に飲酒より來る罪惡が少くなります、すべて、物柄は易きより難きに進みまするものですから、一足飛びには參ねりませんものです、終りに臨んて、猶ほ一言御參考に申して置きたいのは、亞米利加の富豪家として世界に有名なるカーネギーの語てあります、その著述である『事業家の領分』と云ふ書の中に、飲酒のことに關して左の如く云ばれました、

予は敢て禁酒の功能を說かんとするものに非ざれども、余の觀察に依るに飲酒の習慣は他の有らゆる種類の誘惑物よりも最も失敗を招き易きが如し、されば、余は青年の輩に勸むるに多量の酒を飲まざることを以てせんとす、全く酒に口を觸るゝことなくば、更に妙なれども、此事困難なりとせば、食事の時以外に飲酒せざることに決し固く此の規則を守るべし云々

此は綏ならず急ならず、何人も實行することの出來るのてありますから、此のカーネーの誠は大に參考にして宜いと思ひます、

酒の事に就いては、申せば申すほど、厭らしい事も、面白い失策話も澤山ありまするし、教訓となるべきこともありますけれども、禁酒と云ふも節酒と云ふも不酷酒と云ふのも、早や、彼れ是れ云ふ議論では無いのて、只、希望するところは、實行の如何にあるのてありますから、一旦、節酒を行らうとか、禁酒を行らうとかいふ決心をなされましたなら、或る人の云つた、「我が禁酒やぶれ衣となりにけり、さあついてくれさあついてくれ」と云ふやうにならぬ樣に、その決心を何處〳〵までも相續なさることてあります、それさへ出來ればそう、甚だしい失敗もなく、見苦いこともなくして、次第に品性も高まつて來るのてありますから、何卒、そのお思召を異れ〳〵も希望いたしますのてあります、

第七席

第六　不説過戒

この戒は少々入組むだ戒て、小乘の方ては云はれぬのでわるから大乘の戒法の大乘の戒法たる所はこゝにあるといふてもよい、これまての五つは世間の道徳の上ても明かぢやが、これは今一つ進んでをる、それは何故かといふに小乘と大乘とは、自利と利他との差別があるので小乘の方は毎度申す通り自分さへよければ他はどうてもよいといふ流義てあるから他の過を説く位は別に罪ともならぬやうに心得てをるが、大乘の方てはこれが餘程惡いのぢや、何故かといふに大乘の方ては利他を旨とし自利を後とするのであるから他の過を説くなぞとは大丈夫のなすべきとてない、それを他の過を説て喜んてをるやうなものがどうして大乘の菩薩といふことが出來やう、今の世の中の人はコンナことには氣が付かず、何んても澤山戒法さへ持てばよいと心得、それを有難がつてをるが、五戒や十善はこれは人天の果を受くる位なことて、諸佛の位に入る如きものてはない、それを五戒十善二百五十戒五百戒等を受持してをる小乘の僧を有難がつて、あの和尚は木食ぢやから有難いの、一食ぢやから結構ぢやとツマラヌこ

とを珍重して大乘の戒法をのゝしるものがあるこれらはまだ〳〵佛の位に入ることの遠いものぢや、一食ぢやからとて木食ぢやからとて、それは自分ばかりの修行にはならうが他を化することは出來ない、人間の如來は人間に同じで、人間同樣の行ひをして人を化してゆくのがまことの大乘の法だ、自分ばかり勉強して獨り自分がエラガツテ、生徒に少しも出來ないことをいふ、教師の良教員といふことの出來ない如く、自分ばかりが澤山の戒法を持つただけては大乘の菩薩とはいへぬ、されば佛祖もこの小乘の自調獨善主義を排斥して、白癩野干の心を發するといへども、二乘自調の行を作すことなかれと仰せられ、かつたいや畜生のやうないやしい心を發しても自調獨善の行ひだけはすなといはれた、此小乘のものが、大乘の行者の過を説くやうに他の過を説くやうなことがあつてはならぬ、自利利他てあるから他の過を説くといふことは、決して自ら利する所以てはないのである、日常の商賣をするにつけても、彼の店の品物は惡い、この間も彼の店て買つた人がかういふことをいふたといへば、其店でもまた此方の店の惡口をして終には双方ともに衰へるやうなものぢや、近い例が岩谷の天狗烟草と、村井兄弟商會とが互に誹りあつたことがある、岩谷の烟草は火付きが惡い、イヤ村井のは混りものがある、なぞと新聞紙上で爭ふと、兩方とも賣捌に影響して却

て默つて雨方の喧嘩を見てをつた、千葉商會の烟草が賣れ出したやうなもので、何につけても他の過を說くといふことはよいことではない、春來れば花が咲いて秋去れば木の葉が散る、今年は人間が見に來ぬからとて花の開かぬこともなければ、今年は風が惡いから葉が散らぬとは云はぬ、任運蕩々として自然の風にまかす、何の所に他の過を說くべきであらう、人の頭の上の蠅は追へるが、自分の頭の上の蠅は追ふことが出來ぬ、過のあるものには大慈悲の心を起してこれを改め導くのが大乘菩薩の心得、化他の要道である、ソコデ御經の中には、外道の惡人及び二乘の惡人、佛法中の非法非律を說くを聞ては常に悲心を生して、此惡人輩を敎化して大乘菩心を生せしむべし、而るを菩薩反て更に自ら佛法中の罪過を說くは菩薩の波羅夷罪なりとあります、よし人が佛法をそしらうとも、其人を誹るやうではまだ〳〵大乘の菩薩とは申されませぬ、大乘には自他かないのでありまするもの、コンナ心の小いことではなりませぬ、

昔、山寺に三人の法師がありました、いろ〳〵の修行をいたしましたが、此度は無言の行をしやうといふので、三人申し合せ、山院夜靜かに一室香の烟も妙なる時、三人は燈をともして互に語るまい、言ふなと誓ひまして無言の行を初めました、初めの中は、誰も謹んで一言半句も出すものがございませなんだが、だん〳〵夜が闌けまする

に從ひ、燈の光が闇くなりますして、今にも消えそうになりまするとが、思はず、口を聞きまして早く油をさせ、燈が消ゆるぞと、申しまするとと、次ぎの座の僧、さてこそ御身は無言の行を破り玉へりと云ひました、これを聞いた、三人目の僧、とう〳〵二人とも物申された、わしばかりは無言だと云はれたといふことである、何んと面白い話ではござらぬか、互に他の過を說て其實皆な〳〵物言ふてしまうたのである、これらがわれ〳〵にとつてよい戒めぢや、武田信玄の隣國北條氏康と戰ふた時、氏康に不平があつて武田家へ參りしもの、どうか家來にして下され北條家の要害、氏康の爲人もよく心得てをりまするといふと、信玄、自分の主を捨てゝ敵國に入り、自分の國のことをとやかう申すやうなものは、又た何時如何なることあつて此國を出で敵にいろ〳〵なことを通ずるやも計られぬ、このやうなものは、あつて益なき武士なりとて斬つて捨てられたといふことである、ゆめにも他の過を說くべきではない、孔子樣も直情徑行は夷狄の道ぞといはれた、それに今の西洋學問をした人は何事も權利だとか、義務だとかいふと、人のことでも正しくなければ、堂々これを論ずるのを德義のやうに思ふてをるのはまことに慨はしいことではないか、或る人が孔子樣に、我が黨に直きものあり、父羊を盜み子これを訟すといふた、これは親が羊を

盜んだのを子が訴へ出た、何んと正直ではないかといふのである、孔子樣は、これを聞かれて、我が黨の直きものは然らず、父は子の爲めに隱くし、子は父の爲めに隱くす、直きこと其中にありといはれた、世間の敎ても此通り、まして大乘佛法に於ては他の過を說くべきではない、それで此戒を設けられたのである、

第八席

第七　不自讚毀他戒

先きの不說過戒も此不自讚毀他戒も共に佛法の上の戒法でこれを本宗の大德面山和尙は、これを說て先きの不說過戒は他の過失を說くを戒められたので、これは少々入組たる道理あり、先つ說く我は勿論菩薩戒を受けて同戒の出家在家の菩薩が、七逆五逆亦は十重禁を犯したるといふことを見出し、聞出してとくと聞き定めもせで、二乘外道の菩薩戒を受けぬ同法中ならぬ人に向てあの人は、この戒を犯されしと他に聞かしむることを戒めらるゝが本の制意なり」とあり、此の不自讚毀他戒には「この戒の讚は我れが身の上の善を自ら褒むるなり、毀は他人の上の惡をそしるなり、この戒は讚毀同時に結すとて我が德ばかりを人に向つて說く分にて他の惡を說かされば、これは貪ばかりゆへに輕罪にて犯重にはならず、又他の惡ばかりを說て我がことを褒めなば、これも愼ばかりなれば輕罪にて犯重にはならず、この毀は謗の字とは別意なり、謗は少しも咎なき人を謗ることとなり、毀は實に咎ある人を毀ることに用ふ、故に讚毀何時とは有戒無戒を諸ぜず、同時に我を褒て他を毀る言ばを向への聞く人が聞て信じて迂詐と思はぬ時にこの戒の結罪なり」と仰せられてある、これで此戒の如何なるものであるかといふことは明らかであるから別段、御話するほどもないことぢやが、マーザット自分だけを褒めて他の惡いとを言はぬといふやうに心得てをればよい、每度申す通り、大乘では自他の別を立てぬのであるから自を褒めるの、他を毀るのといふとのあるべき筈はない、自分でこそ自分だといふてをるが、外から見ればそれか他ぢや、自分から見て他といふてをるものも、其人からは自ぢや、自だの他だのと迷ふべきものではない、口は口、鼻は鼻と別々であるからとて口が鼻の惡る口をいひ、おればかりぢやと威張り、鼻は鼻、目は目と互に他を斥ければ、どちらが違つても其人の體は不具となつてしまう、それと同じ道理で、宇宙は一枚、眞理は一つじや、それに自分の他だのと互に差別してゆけば、其間に眞理に違ふ所が出來るのぢや、佛法各宗の爭ひどちらが負けても釋迦の耻、それに自宗ばかりがよくて他が惡いなどといふ

のも、矢張り此の不自讃毀他戒を犯したものぢや、これは法の上の話、今はお互の身の上に就ても其通り、已に佛の位に入って利他の行ひをするのてすもの、何を苦んで自を褒め他を毀りませりや、昔、支那の戰國の時分に趙といふ國がありました、國は小さうでございまするが、なか〳〵エライ人物のあつた國て、其隣は秦といふて有名な強國でございまするが、此小さな趙の國を如何ともすることが出來ませぬ、ソコデ秦は戰ひを挑む爲めに趙の國へ使ひをやつて其國の寶としてをる寶玉を呉れよ、さすれば多くの城と交換をしやといふて參りました、趙の國ては祖先傳來の寶玉て手放しかねるのてはありますが、何にいたせ、强國たる秦のいふことてはあり、多くの城と交換をしやうといふとてあるから承知をいたしまして、藺相如といふ人を使者として、其玉を待たせてやりました、スルト秦王は百官を會して此玉を受け取り、さて約束の城を渡さうとはいたしませぬ、藺相如は早く城を御渡し下されといふたが、言を左右に托して渡しさうにもない、これは玉を取りたいために秦のやつた策略てもと〳〵城を渡す所存はないのてす、ソコデ相如もこれは計られたなと思ひまするから、秦王に向つて趙の國は義を重んずる國てあります、其義を重んずる趙が秦王を欺いたとあつては、國の辱てござりまするて申上げまするが、其玉には疵があります、それは一寸目につきませぬが、といふから秦王ためつすかめつ玉を見たが、疵らしいものもない、スルト相如、それは私より申し上げませうと其玉を受取るや否や、大喝一聲してこれ趙の國の寶玉、疵なぞのあるべきか、汝、秦王、我が國を欺き此玉を奪はんとす、我れ此玉を碎くも汝にわたさじと、睨みつけましたから、滿廷の百官、ビックリして一言も出ませぬ、其中に相如は玉を持て安穩に歸りましたから、趙の國ては相如の武勇を賞して相如なればこそ、かゝることが出來たのてあるといふて、終に我が國ていふ內閣總理大臣の位につきました、スルト此國に廉頗といふ人があります、これは七十幾度の戰未だ曾て負けたことのないといふ大將軍てありましたが、相如が出世を嫉みまして、相如何程のことがある、たゞ玉を安全に持ち歸りしだけにて、かゝる高位に上るといふことはあるべき筈ではない、それを武勇だの大膽だのと賞めそやすのは何事ぢや、それに又ヨイ氣になつて高位高官に居るといふことは、これ此廉頗を侮るものぢや、相如、何程の事かある、此廉頗が一聲の下に倒してくれると威張て相如の登城を待ち受て一ト爭ひしやうとしてをりまするとと、相如は廉頗に出合はぬやう〳〵と避けてをりまする、或る日のこと、トウ〳〵道で出遇ひました、出遇ひかけると相如は、家來に言ひつけて車をかへして逃げかけまする、スルト家來が、あなたも秦の

國に使ひして滿廷の百官を驚かした御方てはござらぬか、それに一人の廉頗位に怖れて逃げるとは何事でござるといふと、相如がィナ〳〵左樣ではない、今ま此趙の國が強國に隣りしてかく安全なのは、廉頗と此相如とがあるからてある、然るに兩人出遇へば積る怨みの爭ひとなり、我死すか、廉頗死すか、或は又双方死すかとなつて此國は一つか二つの寶を減ずることとなる、それては此國の爲めにならぬのてあるから、如何に罵るとも、われさへ忍べはそれてよいてはないかといふたのを、廉頗が聞きまして、左程の心掛とも知らず、我慢な行ひをなしたのは我が過てあると、廉頗は荊棘を背に負ふて相如の許に赴き其罪を謝したといふことてあります、此相如が自だの他だのとの考なく、たゝ一意國の爲めを思ふた心掛はわれ〳〵大乘佛敎徒、殊には佛祖正傳の大戒を受けたるものゝ忘れてはならぬことてあります、不自讃毀他戒の眞意もとこにあるのて、これは佛法の上ばかりてなく、世を渡る人と人との交際にもこの心掛あつてこそ、初めて圓滑に行くことの出來るのて德孤ならず必らず隣りあつて、自他平等の心とそ肝要でござります、

第九席

第八、不慳法財戒

凡そ佛弟子たるものゝ行ひの第一は布施と申して互に施し合ひ惠み合ふことにあるのて、水の混々と流れてわれ〳〵に濕ひを施し、太陽の赫々として照してわれ〳〵に光明を施すが如く、われ〳〵已に諸佛の位に入つたものは、諸佛の行ひじまひしが如く、如何かして一切衆生を惠まんとの心得かなければならぬ、申すも畏きことだが、敎主釋迦牟尼佛は國王にもなることの出來る御身を以て其國王の御位をも棄て、花の如き官女をも、愛らしき妻をも、いとしき兒をも棄てゝ出家したまひしのは何の爲めてござりませう、たゝ一切衆生を憐れと思召したまひ、難行苦行せられたので、さて正覺を成して佛になりたまひしよりは、橫說竪說五十年、席暖かなるに暇なく、或は東、或は西と御敎化下され、如何なる惡人にも法を惜みたまはず說き示されたのは釋迦牟尼佛の御一代を伺ひたてまつるものゝ涙を禁めることの出來ないところてあります、智あるものゝ智を施し、財あるものゝ財を施し、有無相通じてゆくのが此宇宙の規則てありまするに、智惠があるからとてこれを惜み、財があるからとてこれを惜みとてます〳〵これを積み重ねんと思ふて人に施すことを知らぬといふやうなのは、これ皆な宇宙自然の規則に背くのてあります、ソコテ世の中の不平等といふことが起り、智者はます〳〵智

に、愚者はいよ〳〵愚となり、富者はいよ〳〵富み、貧者はいよ〳〵貧しくなるのでございまする、支那の儒教流の政治は其民を愚にすといふので、民百性などがあまり物の道理などを知ってぐず〳〵言ひ出すと政治が取り難いものでありますから、民百性には學問などをさせませなんだ、我が日本の御維新前も殆んどそれと同樣で、學問といへば武士以上のものばかりに限られて、町人百性は學ぶべき所もなかつたやうでありますが、それではならぬといふので、今上皇帝御即位に相成りましてより教育の普及を御計り下されて、今は津々浦々、野の末、山の端までも學校のなき所はなく、讀者の聲を聞かぬところはないやうになし下された、これは今日日本の文明が長足の進歩をいたしまする大原因で、支那が今尙ほ頑民が多くて世界の事情を知らず、宜教師を殺しなどして國の害を招くといふものは人民の知識が足らぬからであります、西洋ではかういふことはございませぬが、貧富の懸隔が非常に盛んで金持は安樂にして財を積み、貧乏人は額に汗を流して勞働して尙ほ貧乏人はいよ〳〵貧乏になるのですから、そこで貧富の懸隔を平均しやうといふ社會主義といふものが起つて、財產家を敵とするやうになりましたので、これは決して宇宙の眞理に叶ふたものといふことは出來ませぬ、富めるものは貧しきものに施し智あるものは愚なるものを敎え導いてゆくのがまことの道であります、此道に背くのは此不慳法財戒を犯したものといはねばなりませぬ、法も財もこれを慳むなといふのであります、

昔、支那に智覺大師といふ人がありました、此御方は俗の時に或る所の知事をしてをられたのでありまするが、或る年のことと非常な饑饉で、民百姓は非常な難義をいたしてをりました、どうかして救ふてやらうと思はれたが、致方がない、ところが役所には官金が多く貯へてある、併しこれを出すのには一度、朝廷へ申し出ねばならぬが、これを申し出て其許可を得るには多くの時日を費すものであるから、そのやうなことをしてをれば、世間に多くの人民を殺さねばならぬことゝなる、ソコデ獨斷を以て官金を出して民百姓の苦を助けた、民百姓は大に喜んだが、官金費消であるから其罪はなか〳〵輕からぬ、とう〳〵知事は都に古されて死刑に處せらるゝことゝなつた、其時の天子を太宗皇帝と申し上げたが、皇帝は此人の平生を御存じであるから、どうも清廉潔白の聞えある男が官金を費消すべきではない、これには何か樣子のあることであらう、と臣下を召して斬罪を申しつくる其時に少しでも憶する氣があつたならばこれを刑に處してしまへ、若し泰然自若としてをるやうであつたらば、其罪を許してやれよと仰せられた、臣下の者は其心して刑場に臨みまするとと、今や白刃の下に首を刎

ねられやうとするに泰然として動かず、身命を領民に施すと云はれた、それを聞いた臣下のものは直に刑を止めて其罪を許し、勅命によつて僧侶とならしめたので延壽と號して高僧大德となられましたこれが宗鏡錄といふ百卷の大著述をなされた智覺大師のことであります、身命を領民に施して少しも惜む所のないといふのは、實に大丈夫の行ひではありませぬか、これは主として財の上の話だが法はことに貴いもので一句一偈とも宇宙の眞理、天地の妙用を含むでをるのでありますから、これを惜まずに施すといふことは其功德實に大なものであります、御存じの通り六祖惠能といふ御方は路を歩みながら人が、金剛經の「應無所住心自淨其心」といふ句を唱へてをるのを聞て發心せられたといふてはござりませぬか、たゞ此一句の功德は六祖のやうな大人物を出したのでありますから、一言の法によつて菩薩の大願を起し、一句の歌によつて修身齊家の道を自得するやうなことがないとは申せませぬ、から惜まず歌へ施してゆくといふことがわれ〳〵の心得でなければなりませぬ、水は如何にしても物を濕さうとしてをります、火は如何にしても物を燒かうとしてをります、われ〳〵は如何にしても佛の道に入らしめやうと心得て財あるには財を、法あるは法を施し合はねはならぬのでござります、

第十席

第九　不瞋恚戒

サテ、今更私が仰山らしく申上げなくても解り切つた話でありますが、虛にならぬは世の習ひであるから、何をするにも辛抱勤忍といふことが肝要であります、所が此の道理は充分に承知をしながら、九仞の功一簣に缺くと申して、辛抱に辛抱、勤忍に勤忍をして、やつと、こゝ一息で首尾克希望の高山が築き上げらるゝのであるのに、瞋恚の焰のために、無端年來の希望計畫を水泡に歸せしむることが尠くないのです、恐れ愼むべきは瞋恚の焰であります、そこで佛敎では諸の罪惡の源を貪瞋痴の三毒に歸して居るので、佛陀の御說法は結局此の三毒の對治のためにお說き下されたと云つても宜い位であります、そこで、彼是、經論にある事柄などを引いてお話をすることになりますると、一席や二席の話では到底盡きませぬが、今はそれ等の事を措きまして、兎も角、此の瞋恚の煩惱は、吾れ〳〵の世に處する上に就てみても、また、信仰を得て安心立命する上にして、何れに取つて見ても、非常の障礙となり破壞の惡魔となるのであるから、如何にしたならば、此の惡魔を對治することが出來るかと云ふことを

お話しいたしたいと思ひます、かくなりますると、理論や理窟の問題ては無くして、實際のことになりますから、切々困難てありますが、極手近い所が、第一に世の中は如何しても儘にならぬものてあると云ふことをシミリと合點することてす、昔横、彼の「此の世をはわが世とぞ思ふ望月の缺けたることも無しと思へば」と云つた藤原の長者てさへ、實際はそう思ふやうには行かなかつた、また、夕日を扇の先きて自由にしたと云ふ清盛てさへ、實は憐れなる最後であつたのてあります、してみると、如何に死物狂ひに狂ひ廻つても、決してそう思ふ通りには行くものて無いから、勘忍辛抱をするより外はありませぬ、此に歇て、或る人が一寸面白いことを申しました、それは、一昨、世の中は、日增に文明開化となり、昔は極不自由てあつたのが、今日は極自由と云ふやうに、便利に便利、自由に自由を重ねて來るので、先づ例を擧げてみれば、昔は東海道五十三驛、日が照つても雨が降つても、照るに就け降るに就け、非常の困難をしたものてあるが、今日ては滊車と云ふ至極便利なる交通機關が出來て、五十三驛何んのその夢の間に行くのである、此の點から云へば實に重寶便利である、しかし、此は便利な一面て、能く〳〵考えてみれは不自由なことが隨分ある、先づ新橋から京都まて行くとして切符を買つて乘り込む、品川大森川崎鎌倉と過ぎ、猶ほ進んて、箱根の嶮路も過ぎて見ると、海と云ひ山と云ひ、その景色は實に立派なもので、こゝしばらく、車を停めて此の山の景色海の景色を眺めたいといふ氣が起るが、如何しても、自分の思ふ通りに、そう勝手に停めることは出來ない、また、よし車を停めなくても、少し靜にして詩の一句も歌の一首を吟じたいと思ふが、それも、同室の連中が、大きな聲て馬鹿話をするやら、煙草を薫べるやらて、如何しても思ふやうに行かぬ、かやうにして、彼れや是れやて不平を列べて居る間に早や京都に着すると云ふ工合て、便利なやうて便利でない、自由なやうて自由でないのてあると申しましたが、成程、そんな點から考えて見ましたなら、滊車と云ふても難有迷惑てありませう、所が、私は、此の滊車のことは兎も角として、此を人間の生涯に比べてみたならば如何てあらうと思ふのてあります、餘程能く似て居るてはありますまいか、吾れ〳〵が母の腹の中よりギャットと生れたのは、滊笛一聲新橋發の滊車に乘り込んだやうなものであります、それから、七歳八歳十五歳廿歳と成つてみれは、何んだか世の中が面白くなつて來て、此れならば、何時までも廿歳の若旦那で居つてみたいと思ふたのが、切々そう注文通りには行かぬので、妻を迎へて家を持つ、そうすると子供が出來る、社會の交際が出來ると云ふやうに、次第にうるさくなつて來て、兎や角として居る間

に五十六十となつて、此の世の暇乞をせなくてはならぬやうになるので、五十六十に成つてから、少し眞面目に一生涯のことを考えて見ると、何んのために生れたのであるやら、何んのために名譽や利慾のために奔走したのであるやら、自分で自分のことが解らぬことになるのであります、かやうに考えて見ると、此の一生涯は全然汽車の旅で、便利なやうで不便利であるのであります、さてかやうに人間の一生涯は汽車の旅であると云ふことが合點が出來たならば、その便利な點を飽迄利用して、その不便利な點は、充分辛抱をしなくてはなりませぬ、これが前から申しまする勘忍辛抱で、一旦汽車に乘つた以上は、そう我儘を通さふとしても、そうは行かぬ、世間で彼の人は實に偉い、豪傑である英雄であると云ふが、その人の成効した上を外面からソット見ると、何んでも無いことのやうに思はれるのですが、深く內部に立ち入つて考えて見ると、その勘忍辛抱と云ふものは、一通りや二通りのことではありませぬ、何時も引合に出る韓信や張子房は無論のこと、我國で申せば、大閤と云ひ、德川家康公と云ひ、何れも勘忍辛抱の結果であります、普通の人から見れば、洵に意氣地なしである、實に女々しいことであると思はれるのであるが、その女々しい所、意氣地無しのやうに見える所が、その人の價値のある所であります、普通の人が瞋り立腹する場合に瞋るほどの人では、偉いとは云へませぬ、大抵の事には瞋りもせず、立腹もせない、と云ふ世間でも能く承知して居る話であります、始めて大いに事を成し遂げることが出來るのであります、

頭が、殿上で抜刀したといふ科で、その國を取り上げられました折に、赤穗の老臣大石良雄は、瀟然として國元を去りましたからして、天下心あるの人は、良雄が復讐の志あるを悟り、その評判さへ彼處此處に聞ゆる程でありましたが、或時、不圖、隆摩の侍喜劍と云ふ人と妓樓で邂逅しました、喜劍は平生良雄のことを聞いて非常にその人物を慕ふて居つたのに、圖らずも、妓樓で面會たので、平生の評判と異なるのを怪しみ、私かに良雄を一室に招き、微言を以て復讐のことを諷しましたけれども、承知した氣色も見えませぬので、喜劍は大に怒つて、良雄に向つて申しまするには「汝は人面獸心なり、主死し國除かるゝに、汝は大臣にして仇を報ゆるを知らず、獸にあらずして何ぞ、汝既に獸なり、余故に汝を遇するに獸類を遇する道を以てせん」と、左の足を良雄の前に突き出し、肴を足の指に挾みて良雄に食はせました、所が良雄は平氣で、首を垂れてその肉を食ひ、且つ舌を出して喜劍の足の指を嘗めましたので、樓中の人も非常に驚いた樣子であります、かやうな有樣で、その場は濟みましたが、その

後一年程も過ぎ、喜劍は藩命を帶びまして、江戸に參ゐりましたに、丁度赤穗義士復讐の事で大騒でありましたから、段々尋ねて見れば、その首謀者は、先年自分の足の指を嚙めた所の大石良雄でありましたので、喜劍も大に後悔をいたし、「自分の目が良雄を獸類と見たのは自分の目の罪である、自分の口が良雄を獸類と罵りたのは――口の罪である、我が足が獸類として嚙めさせたのは我が足の罪である、我が心良雄を獸類と待遇したるは、我が心の罪である、あゝ、我が一身罪に浸さる、余れ死せん」と申し、早速病と稱して鄕里に歸り公私の用を辨じて江戸に來てみまするとと、早や良雄等は皆切腹仰付けられ、既に泉岳寺に葬りたる後でありましたから、喜劍は直に泉岳寺に赴き、恭しく良雄等の英魂を吊ひまして、「あゝ、自分は萬罪を地下に謝するより外は無い」と申し、良雄の墓前に割腹したといふことであります、

大石良雄のことは、我國の人は誰れ一人として知らぬものはありませんが、その夜討の壯快なことばかりを聞いたのみではいけませぬ、夜討をするまでの幾多の艱難辛苦を考えてみなければなりませぬ、憤激の餘り一刀の下に敵を斃すことは易いですが、滿腔忠君の情を笑の裡につゝんで居って、徐に敵を斃すと云ふことは六ヶ敷いのであります、大石良雄の如きは如何でありませう、此に申しました話の如きも、實に侮辱の極でありますが、その他隨分堪え兼ねたこともあつたでありませうし、瞋り罵りたいこともありましたでございませう、その時若しや一朝の怒りに乘じて、侮り辱める奴を粉微塵にするのは、實に壯快ではありますが、隨つて自分の大望はこれで頓挫せねばなりませぬ、人間萬事此の通りで、世間の事を行るにも、佛の聖敎を信ずる上にも、あゝ此れまで堪え忍んでも……此れ程勉めても……世間の人は自分を信じて呉れないであらうか、信仰は得られぬであらうか、猶ほまたかゝる場合に、一寸自分の氣に障ることがありますると、只さへ瞋恚の炎を起さうとする所でありますから、三寸の胸中は見る〳〵千波萬波のために搔き亂れて、自分の前途の利害得失も能く考える遑がなく、それのみか、他人までも迷惑を掛け、それが因緣となり、一血の雨を降らすやうになり、此の世からの修羅道を現ずることは、隨分珍くないのでありますが、かやうにして、此れ皆本を尋ねてみれば瞋恚の焰のために、自分で自分の身を燒くのでありますから、朝夕に、此の誡めを忘れないやうにして、可成平和に此世を送るは無論のこと、猶ほ進んでは一歩なりとも菩提の道に進れんことを希望いたします、

第十一席

第十　不謗三寶戒

人の人たる道としては、人を謗ると云ふことは實に避けねばならぬことてありますが、況して三寶を謗るなど云ふことは夢にだもなすべきことてはありませぬ、所が古來より何の道理も解らずに居ながら、佛樣の惡口や坊主さんの惡口を云へば、何んだか如何にも自分は偉いものとても思はれるやうに考えて居るのか知りませんが、無暗に佛敎の惡口をする人があります、特に、明治の世の中は、敎育が普及いたしまして、津々浦々に至るまて一通文字の讀めない人は少ないと云ふ狀態てありますから、一寸、新聞の片端や雜誌の片隅にても、坊さんの惡口ても出てると、坊主憎けりや袈裟まて憎いと云ふ流義て、一二の坊さんの失策を種として、佛敎全躰を謗るのてあります、此等の人々は一時の面白半分てもありませうが、此が次第に習慣となりまして、遂には、難有佛敎の話を聞いても耳に入らないやうになり、人々具有して居る此の佛性と申す、如來と少し異らぬ本性を暗すことになりまするのは、返す〳〵も殘念なことてあります、そこてありますから、佛陀は特に此の一戒を立てゝお誡めなされたのてあります、しかし、三寶を謗つていけないと許り申しますると、何んだか、世間の人は承知せないかも知れませんから、大畧、三寶のことをお話いたしませう、

一躰、三寶と申せば、三種の寶でありまして、此の寶は世間一般のいふ所の寶とは異つて、上は恐れ多くも　上御一人より、下は九尺二間のわびしい住居をして居るものに至るまて、皆同一に有して居る所てあります、猶ほまた一歩進めて申しますと、此の宇宙間に有りと有ゆるもの皆これを有して居るのて、一切の寶といはるべき寶の根本の寶ともいふべきものてす、

その寶とは、佛と法と僧との三種てありますが、語を換へて申しますると、宇宙の三大原理て、平等無差別の原理が佛と云ふのて、それを極手近く人間社會に應同して現はれましたが、三千年の昔、印度に出世遊されました釋迦牟尼佛てあります、次に法と申すのは差別獨立の原理て、此を最も完全に筆墨の上に現はしたが、五千餘卷の經論てあります、またその次の僧と申すは諸法調和の原理て、此を日用の上に實行して手近く現はして居るのが僧て、俗に申す坊さん方てす、してみまするとと釋迦如來と申すのは、宇宙間に有りと有らゆる一切のものが具有して居る平等無差別の原理を、至極完全に顯はれましたのてあるから、寶を申せば、吾れ〳〵も進んで此の極點に達せ

なくては出來ないのですから、或る一部分の目的を云へば、商業とか工業とか農業とか、種々樣々に相異もありませうが、大躰の目的から申せば佛に成るのにあります、五千餘卷の經論と八萬四千の法門と申せば、佛敎の專賣の樣に聞えまするが、此れも實を申せば、平等無差別の本躰から現はれて居る差別の一法〳〵であるから、その物〳〵が、本分の位を守つて、手は手、足は足、眼は眼、口は口と云ふやうに差別をしながら、同一本躰たる身躰の發達のために盡すやうに、差別の個々の物柄が等しく平等無差別の原理に隨順するので、此の關係を說いたのが佛陀の說法であるし、此を書き記したのが經論でありますが、實の所は佛陀の經論では無くて、人々お互の經論となさなくてはなりませぬ、僧と申しても、世間では直に頭に圓くして法衣を纏うて居る人のみのやうに思ひますが、物の調和が僧の本躰でありますから、平等と差別との調和、差別の或る一法と或る一法との調和で、今日八ヶ間敷東洋の平和だとか、世界の平和だとか申して居るのと異つたことはありませぬ、そこで、此の僧と云ふ實が一家內に現はれますれば樂しき家庭となり、一國に現はれますれば一家の平和となり、世界に現はれますれば世界の平和となるのです、三寶と云ふことは極大器申しても、かやうな深い意味がありますから、その道理を聞いた人は、本氣では三寶を謗しるとは出來ないのです、昔から有名なる學者で、最初は食はず嫌で、やたらに、佛敎を謗りて居つたのが、不圖した因緣からして、その道理を聞いてみて、非常の佛敎信者となつた人は、却々一々擧げることは出來ませんが、今最近のことを擧げてお話しいたしませう、

それは、幼少の時より、基督敎に敎育せられました外國人でダムロカと申す人です、此人は基督敎國に生れた人ですから、敎育は無論のこと、基督敎の敎義も深く研究した人ですが、不圖した因緣から佛敎を聞き始め、段々聞いてみると、今迄自分の世界唯一の宗敎であると思つて居た所の基督敎よりも、一層二層も佛敎が勝れて居ると云ふことを感じ、彼の有名なる目黑の雲照律師の下にある所の僧園に入つて研究をせられ、時々新聞紙上等に自分の考を發表し、また佛敎演說等をせられますが、その人の說によると、基督敎は今日の科學と反對するものであるが、佛敎は此れと異なり、科學と一致するものであるから、世界の進步發達を望むならば、佛敎に依らなくてはならぬ、基督敎は文明の敵であると云ふのであります、猶ほまた世界の平和を保持して行くには基督敎ではいけない、何故かと申せば、基督敎の行く所には火酒と機關砲が隨ふので、云はゞ基督敎の傳道は戰爭の先驅をするのであるといふのです、かやうに

基督教は科學と一致せず戰爭の先驅をする所のものであるから、眞の文明といふものは此佛教に依らなくては出來ないといふ意見であります、今、私は此のダムロカ氏の語が眞實であるか否とか云ふことは、詳しく申さなくとも、今日の科學と一致せないことは多少學問をした人は皆承知して居らるゝ所であるし、また、戰爭の先驅をいたして居ることは、隣國の支那に徵しても明かなことでありますから、略して置きますが、兎に角、かやうに、假令幼なの頃より基督教國に育つた人でも、公平な耳を以て聞きますれば、宇宙の眞理であつて、一箇人としても、國としても歸依すべきものであるといふことは疑ふべからざることであります、

所が、世間には前に申しましたやうに、佛教の道理を聞かずして、却つて物知り顔に佛教を謗るやら、また多少學問もあるので、佛教の眞理は認めて居るけれども、佛教は東洋の宗教である、基督教は西洋の宗教である、今日は萬事萬般西洋を主とせねばならぬから、眞理非眞理は兎も角基督教を信ぜようと云ふッマラヌ考えよりして、自分の本心を欺き世間を欺く人もあります、實に愍れむべき人々ではありませんか、結局かやうな人々は、今生では、丁度風前の燈同樣なる危險極まる中にありながら、浮萍の風に漂ふ如く、ウカ〳〵として安心立命をすることも出來ず、それのみならず、佛教を謗りて、本來具有して居る所の佛性の芽を折り摧き、猶ほまた他人まで欺いて、未來永劫の罪過を造ると云ふのは、本氣の沙汰とは思へません位であります、何卒皆さんは、平生充分に御注意あつて、自分で三寶を謗るなどは無論のこと、生意氣な人等が種々に誹謗をするやうなことがありましたならば、かやう人は可成說得して正道に歸せしむるやうにお心掛を願ひたいのであります、此れ實に勸むる功德共に成佛て、是れ亦利他の一分であります、

（一般の注意）十戒說教は昔からいろ〳〵の著述がありますて、今は當世向きに御話をしたのでありますから不殺生戒に於て動物虐待のことをいひ、不酤酒戒に於て禁酒論をし、不妄語戒で實業道德不愼法財戒で社會主義をいふたやうなものでありますが老人たちにはそれではわからぬかも知れませぬから充分に掛酌して平易に御說き下されたい、との戒法の事は、宗傳があるのですから、次ぎに戒文の略解をいたしますが、どうか修證義の說教と參酌して下されたい、此十戒の中、初めの五戒は人倫道德、后の五戒は大乘戒法の深意でありますて、通常の說教には初めの五戒だけに止めてもよろしい、

（參照）として動物虐待防止會の旨趣書を掲げます、これは餘程よく諸種の點から動

物虐待の不可なることが示してありますまして、御參考にはよろしい、

抑も動物の虐待は、一個重要なる人道的社會問題にして、其社會各方面に及ぼす利害の深且大なる、苟も人道の開發に意有り、社會の公益に志有る者は、一日も忽諸に附すべからざるなり。

(一)、無罪可憐なる無告動物を猥りに虐待慘殺して顧みざるもの、果してこれ人間至當の權利なるか、他動物に對する殘忍刻薄は、やがて人類に對する殘忍刻薄に非ずや。他動物に對する親切と人間相互に對するのそれとは其心情に於て何の異るところあらんや、彼無告の弱者を苦しめて得々たるが如きは、未開國民の惡風にして、斷じて文明國民の行作に非ず、動物虐待の防止は實にこれ人道の問題なり。

(二)、我邦の今日到る處に動物の虐待が白晝公衆の面前に行はるゝが爲め、兒童青年を始め成人に至るまで社會全般をして、不知不識の間殘忍非道の惡行に慣れしめ、優美高尚なる天賦の品性を傷ふに至らしむるの其幾許なるを知らず、動物虐待防止は實にこれ教育上の問題なり。

(三)、頑是無き兒童が虐待する其始豈惡意有らんや、然れども之を爲すことの多き、本能的傾向は終に意識的罪惡となりて現はれ、或は殺人の大罪を犯すに至る。人を殺すと他の動物を殺すと、其精神狀態に於て何等の異るところ無きなり。即ち殘忍殺伐の氣風を養成せしめ、犯罪の素因を構成する動物の虐待を防止することは實にこれ法律上の問題なり、

(四)、更に合理的利害問題よりするも、家畜運搬法、屠場制度等の宜しきを得ざるが爲め、吾人が營養物として用ゐとる肉類、又は乳液に異狀を來し、人類社會の健康を害すること實に大なり。且つ又た彼樹間に戲れ、青空に舞ふ可憐にして有益なる歌禽を濫獵するが爲め、農產物に影響を及ぼすこと尠少なりとせず、動物虐待の防止は實にこれ衛生上、經濟上、農政上はた審美上問題なり。

要するに動物の虐待は、人類の品格を破るものなり、文明の体面を汚すものなり、國民の幸福を妨ぐるものなり、社會の美觀を損するものなり、同志相謀つて茲に本會を設立する所以のもの、素より無罪可憐なる無告動物に對する一片の同情に出づと雖、又以て社會的改善を計り、之に依て健全優美、高尚なる大國民の氣風を養成せんとするの素志に外ならず。

(參照)　左は醫學士山根正次氏の論ぜられたる禁酒論の大要であります、參考の爲めに掲げます、

私が今日御話せんとするものは酒の害である、此事に就ては明治廿九年に初めて演說を遣つた私の鄕里は山口縣の萩であるが、前年檢疫事務官として出張を命ぜられたことがある、其當時中學校の生徒が酒を飲むと云ふことを聞き、時の知事より、學生が酒を飲むやうでは困るから、是非訓誨をして呉れと云ふことで、或寺に於て演說をやつたこともある、其は私が重に御話をする『疾病性酩酊』又『酒醉』とも『酒狂』とも稱へる一種の病が起る、之に就ては司法省の命を襲つて外國に派遣され、種々探究の結果此「アルコール」中毒の恐る可き諸病の原因となることを悟り、屢々公開演說を試みた、然るに今日から考へて見ると、其當時人に向てその害を說きながら、自分に飲むことは止められなかつた、其で之ではいけない、自分が飲みながら、人に禁酒を勸むる資格はない、かゝる薄志弱行てならぬと思ひまして、段々演說を重ねるに隨ひ、終に一滴も飲まないことになつた酒を飲むと精神を一時皷舞するが、段々と正確の思想を失なつて粗暴となり、擧動が自由活潑となり、爽快の念を發する、之が酒を嗜む者の利用する重なる目的である、併しながら生理上より之を調べて見ると、一時精神を皷舞し、續いて麻痺せしめ、其結果色々の害毒を招き、罪惡を犯す媒介となるものである▲私は此酒の害を大別して、精神上から生ずる害と、體育上より生ずる害との二とします▲精神上から生ずる害は、言語及ば動作の失闊である、第一に自己及び他人の名譽を害する談話を爲し、第二に約束信用を破壞す可き談話、第三に秘密及び信用を失ふ可き談話、第四に自己及び他人の名譽を害する談話を爲し、第五に風俗を壞亂す可き談話を爲します▲次に動作より發するものを類別しますれば、第一、人の身躰に危害を與ふ可き動作を爲し、第二、自己の身躰に障害を與ふ可き動作、例せば傳染病などでも、酒を飲んだ爲に畏る可きものを畏れず、其に近づいて病毒を受ける等の事、第三、器物及び建物等を損害すべき動作、第四には人を侮辱す可き動作、第五には正業を放棄す可き動作、第六には法律を無視し、公けの事業を害す可き動作『例せば彼の兵士は國家を守る可き者である、其者が却て酒を飲み、公けの秩序を害し、法律の厄介になつた者が、各師團の統計に依ると六百〇一人ある(此處に第一師團より第十二師團及師び近衛師團、臺灣守備隊、憲兵隊に至るまでの統計表を示された)苟も軍人たる可き者が、飲酒の爲にかゝる多くの犯罪者を出すと云ふは實に嘆はしき次第である、其れから風俗を壞亂し、疾病を將來すべきことは澤山である▲昔て私が土耳古に在つた時の話をすれば、此國の人民は酒を飲まぬ、土耳古の軍隊には

花柳病がない、此病氣は諸君は宗教者であるから御存知はあるまいが、實に口にするにも恥る病である、下痢、癩病、梅毒を總稱して花柳病と云ふが、土耳古の軍人には、かゝる病氣を受けた者は一人もないと云ふとである▲此國の軍人の勇敢なることは彼の露國の大軍に對して非常なる戰鬪を遂つたのを見ても解る、勇敢なる精神は勇壯なる身躰に宿る彼の土耳古人の強健には實に驚くことである▲私は此國にて觀兵式と同じ式に參列して實に軍人の勇壯なる身躰の立派なることに感服した▲私は何故斯の如く立派であるかと聞いたら、土耳古人は皆宗教の(回々教のこと)禁制を守る爲めに酒を一滴も飲まない、其結果風俗を害せず、道德が能く行はれて居る、彼方の人民は大抵酒は飲まない▲宮中に於て何か儀式のある時は、外國人には酒が出るが、外には出ない、故に酒を飲んで精神に異狀を來すの、惡所へ遊びに行くの、喧嘩をするのと云ふ者はなく、又花柳病にかゝる者もない▲日本の陸海軍人は澤山此病に罹りて居るものが多くある、三等症と云ふのは即ち之である、之多くは酒を飲んで風俗を壞亂したる結果として招いた者である……土耳古人は酒を飲まない結果、一躰に此病毒はなく、隨つて身躰が強健である、然るに日本人は之と反對して居る、其實例に就て話しますれば、本年花見の時期、一ヶ月間に酩酊に依り、警察の厄介になつた者が、東京府下四十七ヶ所の停車場で八百八十二人あつた……單に上野の花見丈でも、警察の厄介になつた者が四百八十人、勿論一寸厄介になつた者も含んでの調査ではあるが、兎に角皆酒の爲である、かやうな有樣は果して文明國の狀態と見做すことが出來ませうか、學士は仙臺衛戍病院に於ける飲酒と宗教と梅毒との關係に說及し、飲酒は梅毒を誘ひ不品行者を作るものである、宗教を信ずる者には梅毒患者が少ないと云ひ、梅毒は亡國病であると云ひ、更に又通常の酒にも十八「プロセント」から廿「プロセント」甚だしきは廿二「プロセント」を含んで居る、酒屋が酒を醸造する時には稅を多く取らるゝから、成る可く少なく强くして、之を賣る時には水を雜ぜて薄くして賣る、又人造酒などには「アルコール」を澤山含んで居るから、飲めば直ちに疾病性酩酊を起し、大變醉ふのであります

今私が酒の爲めに犯罪を遂つた統計に就て御話申すが、東京に於る監獄署に這入て居る者は壹萬〇十八人である、內、酒を飲む癖のあるもの、其から定量なき者、又凡そ二三合位飲むと云ふ者、又飲まない者を區別して見ると▲定量なき者、一、四三六人▲癖ある者九九三人▲定量ある者、三、三〇〇人、壹萬十八人の犯罪者中、酒を嗜む者六千二百六十九人、嗜まない者が三千七百四十九人、之を以て見ても、犯罪

と酒と大變關係の有ると云ふ事を申上るとが出來る、又刃をふるつて人を殺害し、或は强姦を爲し、强盜を爲すが如き大罪を犯す者は皆酒飲が多いが、卅三年度に十五人、卅四年に十三人の死刑執行者があつた、又御承知の彼の條約改正の即下に、横濱に於て婦人三人を殺害したる大事件を起したるロベート、ミルラーは大變「ウヰスキー」を好みました、又此等を表にして示せは▲三十三年死刑執行者

氏	年齢	酒量の度
坂下慶次郎	三六	十七才より飲酒を初め常に五合强を用ゆ
黑田健次郎	三六	幼少より酒を嗜む、常に五合位
狎田增太郎	四〇	深く好まず五合位
松岡元平	四六	深く好まず
竹內ヒキ	四〇	幼少より酒を飲み三十前後は不斷三四合を飲む
秋山喜兵衛	四七	少量
今井鶴太	不明	十五六才より酒を好み常に三四合を飲む
小池次郎吉	四七	壯年より大酒
柳澤善次郎	四二	壯年より酒を嗜み常に一升位を傾く惡癖あり
池谷龍藏	二七	酒を嗜まず
狩野竹松	三二	量三四合位
高橋利平	三四	大酒惡癖あり
飯塚高太郎	四〇	三四合を飲用す
ロベート、ミルラー	五〇	「ウヰスキー」を好んで飲用す

之を以て見ても犯罪と酒は大變に關係のあると云ふことは解つたと思ふ

其から又病氣の上に就ても一時的なる傳染病、永久的なる腦病、及び神經系疾病即ち腦溢血卒中或は神經を麻痺し、精神病の原因となり、妻を殺し子を殺し種々なことをやる者がある

先年妻を殺し控訴院に於て酒の中毒により、精神に異狀を起したと云ふことになつて無罪放免となつた、此男は非常の酒飲で、或時親類に酒宴があつて、泥の樣に醉つて家に戻り剃刀を以て妻を殺し、殺人犯として東京に送られた、此者の平生の行爲は決して惡くない酒を飲むと打つて變り、後に至り其の爲したる所業は凡て覺えない、其て私は之を疾病性酩酊と云ふ精神病を起し、其に依つて殺したものであらうと云ふた、此男には元の妻が八人あると云ふから、悉く呼寄せて平常の行爲を尋

ぬた處が酒を飲まない時は猫のやうに溫順で、酒を飲むと虎の如く或は妻を打ち、或は殺さんとする擧動があるから、八人迄は皆逃出した、不幸にも九人目が殺された、猶其他の原因からも調べて全く酒醉の爲てあると云ふを以て無罪放免となつた、歐羅巴などでは、かゝる精神病者を入れる處が別にあるが、日本ではないから、以後決して酒は飲まないと云ふとて下げられた、斯樣な譯で酒から精神病にかゝる者は澤山ある、學士は尙ほ本年青年禁酒令の出てんとせし時、內務省の依頼に依り、茲三年間の精神病者を取調べた結果を擧げ、此の如く多くの例證に依りて見ますると、酒は絕對的に生理上不必要てある、一滴も用ゐないても決して差支ない、獨乙のグルズルト先生が、酒は病理上にも必要がないのみならず、却て多くの病氣の原因となるもので、心臟病や肝臟や腦病等の病源となると云つて居らるゝのは不思議はない、殊に恐るべきは、酒を飲て出來た子は非常に弱い、私は宗敎者にもかゝる病氣に罹つて居る人がありはすまいかと思ふ、又傳染病などの流行の時、酒を飲んで傳染を防ぐなどゝ云ふは最も誤りである……以上述べたる所に依て、酒は害あつて益のなきものてあるといふことは御解りになつたと思ふ、又聾啞白痴等は大抵飲酒家の血統に多い樣てある、かくも害毒ある物を、今日は法律を以て之を飲むことを止める位ては駄目だ、宜敎宗敎の力、又は互の制裁を以て止めねばならぬ、御寺の門前には不許葷酒入山門と云ふ禁牌石も建つて居るとてあるが、貴下が禁ぜらるゝは勿論、ドウカ日本國民をして此害を知らしめ、一般に禁酒をする樣に勸めて貰ひたきものてある……

終りに臨み一言申して置きたいことは、我が日本の國稅の大部分は酒てある、然るに若し禁酒盛んに行はれ、醸造家が少なくなつたらば、大いに國家の經濟に關係を及ぼすてあらうとの杞憂を懷く人もあるが成る程一應は尤の樣てあるけれど、決して心配には及ばぬ、酒造家が無くなれば貴重の米穀を潰すと云ふとがなく、又我國に於て警察費、監獄費に費す金額は莫大なものてある前に示せし統計表に依て見れば、酒を飲をぬとに依て大に其罪人を減じ、國に遊惰の民なきに至り、各々實業に勉勵する樣になれば、國家の利益は實に酒造の稅に倍することを得るは明らかなる道理である……

社會主義の西洋に於て發達せる狀態も一應御心得にならねばなりませぬてこゝに掲げます、

西洋の社會主義とは如何樣のものてあるかといふことを話すに就ては、是非西洋人

の思想を二千年來支配してをつた基督教といふものゝ性質から調べねばなりませぬ、抑も基督教といふのは如何なるものでありませう、それは今更ら私の云ふまでもなく、何誰も御存じの如く猶太の大工の子イエス、クリストによつて唱へられたので宇宙には一つの神がある、其神の外は人間は一切平等で此世に於てこそ君だの臣だの父だの子だの貴いの賤いの貧の富のと區別があるが、神樣の目からは一切平等だといふのですから人は互に相愛するといふことが根本になつてをります、それで貧民救濟などのことは、クリストの專ら力を盡くしてをるところであります、されば舊約全書の箴言の中にも、

貧しき者に惠むはエホバに貸すなり、此施濟はエホバ償ひたまはむ

といひて、貧民救濟を勸め、新約全書の馬大傳には、

イエス彼に云ひけるは、全からんことを思はゞ、往きて汝が所有を售て貧者に施せ、されば、天に於て財あらむ

などといひ、又貧者を慰めて、

貧き者は福なり、天國は即ち其人の者なれば也、
哀む者は福なり、其人は安慰を得べければなり、

といひ、舊約の申命記には

汝等の家族皆な其の手を勞して獲たる物をもて快樂を取るべし、是れ汝の神エホバの祝福によりて獲たるものなればなり、

とて手を勞する即ち勞働するといふことを重んじて安逸なることを咎めてをります、此教の根本たる平等の思想はかくして發達しましたが、中古羅馬法皇といふものが出來て、自から基督教義の正當なる相續者であると稱し、王公貴人よりも貴きものは羅馬法皇なりとし、國王といへども此羅馬法皇の命令には從はねばならぬ、如何なる學者の新說でも羅馬教會の說に背くものは正しきものでないといふて、法皇僧侶が勝手氣儘なことをして國王を苦しめ學者を苦しめましたから、これ實に基督の眞意に背くものであるとて此跋扈を止め宗教上の不平等を打破したのが、第十五世紀に行はれたる有名なる宗教改革であります、それから又平等の主義の上からいふと、此世の中にはなか〳〵不平等がある、それは國王や貴族の跋扈です、國王や貴族が勝手氣儘な政を施して人民を苦め、租稅を重くし、自由を束縛し壓制極る政治を布きまするとき、人は悉く平等なものである、神の前には國王もなく、貴族もない、然るにわれ〳〵は何の爲めにかく苦めらるゝのであらう、國王貴族は何の爲めにか